

ルーテル学院大学大学院附属  
包括的臨床コンサルテーション・センター叢書

# 対人援助実践を紐解く： スーパービジョン体制からの理解



2023 年 10 月発行  
ルーテル学院大学大学院附属  
包括的臨床コンサルテーション・センター編

ルーテル学院大学大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センター 叢書  
「対人援助実践を紐解く：スーパービジョン体制からの理解」

目次

▶ 巻頭言		福山 和女	1
タイトル		氏名	ページ
第 1 章	「不安定な社会状況でのソーシャルワーカーへの期待」 —スーパービジョン体制に焦点を当てて—	福山 和女	2
第 2 章	社会福祉と希望のありか—今日の社会福祉を考える—	白井 幸子	20
第 3 章	スーパービジョン・トレーニング・プログラム担当者よ り	加藤 純	27
第 4 章	対人援助実践を紐解く実践：対人援助者はどのように実 践を紐解こうとしているのか	山口 麻衣	33
第 5 章	包括的臨床コンサルテーションセンターの内的外的資源 の活動報告	照井 秀子	53
終章	援助者を支援する実践：人間の尊厳を守る社会の実現を 目指して	山口 麻衣	67
▶ 添付資料			
資料 1 臨床相談プログラム実績		.....	71
資料 2 報告事例一覧		.....	72
▶ 執筆者プロフィールと担当		.....	81

## 巻頭言

この度、ルーテル学院大学大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センターは、2022年4月から山口麻衣先生をセンター長にお迎えし、2023年4月からプログラム、運営委員会を再編成して、近い未来を見据えた期待に基づき、新スタートを切りました。

現在、人手、社会資源の不足などがその主たる要因となっているのですが、社会福祉にかぎらず、対人援助の専門職のやりがいや再考すべきテーマとして議論的になっています。

この時期を機に、臨床死生学研究所設立後の14年間の研究員の成果を一つのまとめとできないだろうかという考えのもとに、ルーテル学院大学大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センター叢書として「対人援助実践を紐解く：スーパービジョン体制からの理解」と名付けて、歴史的経緯、諸理論の変遷、研究テーマ、等の分析の全容を報告するとの目標を掲げて取り組みだしました。結果、相当の分量となり、時間的制約から部分的報告となってしまうしました。この14年間には延べ271名の研究員の報告や論文が発表されたのですが、これらの研究員のほとんどが社会福祉だけでなく保健、医療、心理、教育とそれぞれの専門領域の実践で今も活躍していただけることはとてもうれしいことです。彼らのこれまでの貢献と今後の一層のご活躍を期待して、この報告書を提出したいと思います。

福山和女（大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センター 前センター長）

## 第1章

### 「不安定な社会状況でのソーシャルワーカーへの期待」 —スーパービジョン体制に焦点を当てて—

福山 和女

#### はじめに 社会的背景

不安定な社会の中で多くの人々が不安に悩まされ、誰かに支えてほしいと願っている。社会福祉の現場の専門職も同じように不安定な状況下で業務をしていて誰からも保証されていないと考え、孤独下で働いているという現実がある。このような背景の中で、スーパービジョン（以下、SV）体制やコンサルテーション（以下、CON）体制の活用がもたらす効果について考察する。

実際には、SV や CON を実施する場合、スタッフの抱えるニーズのどれに対応するのが適切なのか。そのニーズは多様化しており、時と場合により変化することから、実際に実践現場で SV や CON を実施する場合には、現場での不安定さが専門職に与えている影響の度合いを考慮する必要がある。このような現在の社会状況下で、専門職であるソーシャルワーカーは、この不安定さを問題視するのではなく、現に生じている事象であるとの認識から、この不安定さの質を解析し、その力動に十分配慮した上でソーシャルワークの展開をすることが期待されていると考える。

本稿では、SV 体制や CON 体制に焦点を当て、実践でもたらされるその成果について考察する。まず、1) ソーシャルワークの定義を明確にし、2) 現実の社会状況に見られる諸課題を整理し、3) 現場で活躍しているソーシャルワーカーが抱く SV や CON に関するデータをニーズから分析して、さらに、そのニーズを、4) システムの内在者と外在者の観点から詳細に再分析し、「もやもや感」の度合いを理解する。このように SV や CON のニーズをより可視化することにより、ソーシャルワーカーが直面する不安定さの質を詳細に紐解くことができると考える。ここでのデータは、現実の社会状況が反映されている包括的臨床コンサルテーション・センターの研究員たちの報告内容を参照する。

#### 1. ソーシャルワークの定義

本章では、ソーシャルワークのスーパービジョンについて考察する上で、まず、ソーシャルワークの定義を示す。「ソーシャルワーク専門職のグローバル定義」（2014 IFSW）を適用する。「ソーシャルワークは、社会変革と開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する。実践に基づいた専門職であり学問である。社会正義、人権、集団的責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知を基盤として、生活課題に取り組み、ウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。」ここでいう生活課題とは、原語で、life challenge という。

この定義に基づけば、ソーシャルワーカーの実践は次のように理解できる。「人」は社会環境の中で様々なシステムと交互作用を展開している。その人々は「生きていくうえ

で」様々な課題と取り組んでいる。ソーシャルワーカーはこの人々の取り組みを支援し、ウェルビーイングを高めるために環境の中の様々なシステムに働きかける役割を担っている。そして、スタッフ間で協働実践を展開している。

ソーシャルワーカーは、スタッフたちへのスーパービジョンや組織マネジメントを遂行する責任がある。日本医療ソーシャルワーカー協会の業務指針を例にとる。業務指針6．教育・訓練・管理における責務として、6-4 医療ソーシャルワーカーは、スーパービジョンを行う場合、専門職として公正で誠実な態度で臨み、その機能を積極的に活用して医療ソーシャルワーカーの専門性の向上に寄与すること。6-6 医療ソーシャルワーカーは、組織マネジメントにあたっては、クライアントの満足度を高めるためにも、職員の働きがい向上をさせること、と規定されている。これによれば、スーパービジョンなどは、いずれもソーシャルワーカーの専門性の向上並びに働き甲斐を向上させることがその責務遂行の目標となっている。

## 2. ソーシャルワーカーを取り巻く社会状況

次に、ソーシャルワーカーが現在直面している社会状況について概観する。その状況は、大きく2つに区分できる。

### 2-1) 取り組むべき喫緊の課題

ソーシャルワーカーは現場実践の中で、人材確保の課題が急遽突出してきた。それは、職場組織としても喫緊の課題となる。一般的に社会の人口動態の影響を受け、職場で働く人材としてのスタッフが不足してきた。特に、中堅を担ってきたソーシャルワーカーたちが転職等の理由により離職し、中間スタッフ層の空洞化の事象が生じており、これが新人育成に影響を与えている。

### 2-2) 社会資源不足の課題

ここでは、人材、ケアサービス、業務、制度改正、スーパービジョン体制等を取り上げる。

#### 2-2-①) ケアの質の変化

現場での介護をはじめケアサービス全般に専門性の質の低下が問われている。それは、法律や制度の改正が頻繁に行われ、それに準じた業務計画の修正が求められる。上述の第1項目の人材確保の対策がその例である。人材確保のためには、介護や相談にのる対人援助者の専門性のレベルを低めて、門戸を広げたことにより、専門性の質よりも、「専門的ケア」から「誰もができるケア」へとその切り替えが求められたのである。

また、問題解決型志向への偏重が強く、利用者や患者などソーシャルワークの対象者が抱える問題に焦点を当て、原因追求型の援助となり、直線的志向から問題を取り除くための計画案の提示が主流になった。その意味では解決策を提示できることの認

識が強くなり、対象者を問題視して、対象者の尊厳の保持の原則を弱体化させたと考える。

## 2-2-②) スーパービジョン体制の認識不足

スーパービジョン体制が専門家育成としての特別な手段であり、特別な教育策を実施する必要性が認識された。しかし、現場では多忙な業務の中で、スタッフ間のコミュニケーションもままならず、忙しそうに飛び回っている上司にスーパービジョンをお願いすることは不可能であり、その結果、「職場では業務上のスーパービジョンは受けたことがない」と主張するスタッフが多く存在する。実際には職場、施設や機関が創設され業務が開始されたその時点から、スーパービジョン体制が稼働しなければ、その施設や機関はそれぞれの業務目標を遂行することができないのではないかと。

この事象は、スーパービジョンの概念が多様化したこと、また、スーパービジョンを受けたいと欲するスタッフたちの希望する獲得物が複雑で、専門性の質の向上や実力の向上がゴールとされ、その期待される成果が巨大化したことで、スーパービジョンに対する不安が膨張したのであろう。スーパーバイザー側も教育機能が特化され、一定期間に高い実力を身につけたスタッフの育成という要望に応えるべくして努力し、スタッフに何度教えても理解されないという不全感を抱くようになる。

## 2-2-③) 業務の質

これらの事象について考えると、組織レベルにおいてスタッフが組織の業務を遂行しているという認識が不明確となり、スタッフとしてではなく、個別化された「自分自身が良しとする」仕事をしていると考えるようになった。これは、組織という職場の業務という認識よりも業務の個人化・私的化・主観的ニーズなどが発生しているものと考えられる。

また、職場の中に専門職性の同質化と異質化の要求が増え、自らが専門職として業務遂行していることの感覚が鈍化してきているのかもしれない。これが関係して、専門職務と専門機能とがあいまいになり、退院支援の目標が多様になり、スタッフは実現不可能な広範囲の支援が求められていると誤解してしまっている。その結果、業務遂行の免除をスタッフ自身が行ってしまっていることもある。これが、影響して、上司からの命令・指示系統に対する反発が生じ、業務遂行の自己決定権はスタッフ自身が持つとの誤解が生じ、上司からのコミュニケーション不足に対して苦言を唱えるようになる。

上述の課題の存在から、職場のソーシャルワーカーであるスタッフの自立性と自律性との概念理解の混同が生じていると考えられる。ここでいう自律性とは、専門職として自らをコントロールして振る舞うことであり、一方、自立性とは、必要に応じ、個として、集団の一員としてバランスよく振る舞うことができるという意味である。

## 【まとめ】

これらの社会状況がソーシャルワーカーに影響を与えている。これらの課題は、組織体制の弱体化から生じたものか、それとも他の影響要因が考えられるのだろうか。いずれにせよ、スタッフには様々な影響が及んでおり、どれかを解決すればよいというものではない。いずれにせよ、このような社会の状況下にいるスタッフがスーパービジョンやコンサルテーションを受けたいと欲していることは間違いない事実である。

### 3. 保健・医療・福祉システムからみるスタッフに及ぼす影響

環境の中にスタッフ（ソーシャルワーカー）が存在し、地域文化、制度/政策、社会資源、職能（専門家）集団、専門情報、組織、部門組織、多職種、同僚、クライアント・家族など、それぞれの10サブシステムと交互作用して、影響を受け、その影響のさまは多様である（図1：保健・医療・福祉システム参照）。

その結果、さまざまな状況が発生する。組織レベルでの業務行動は、おのずと様々な影響を受け、変化を強いられる。

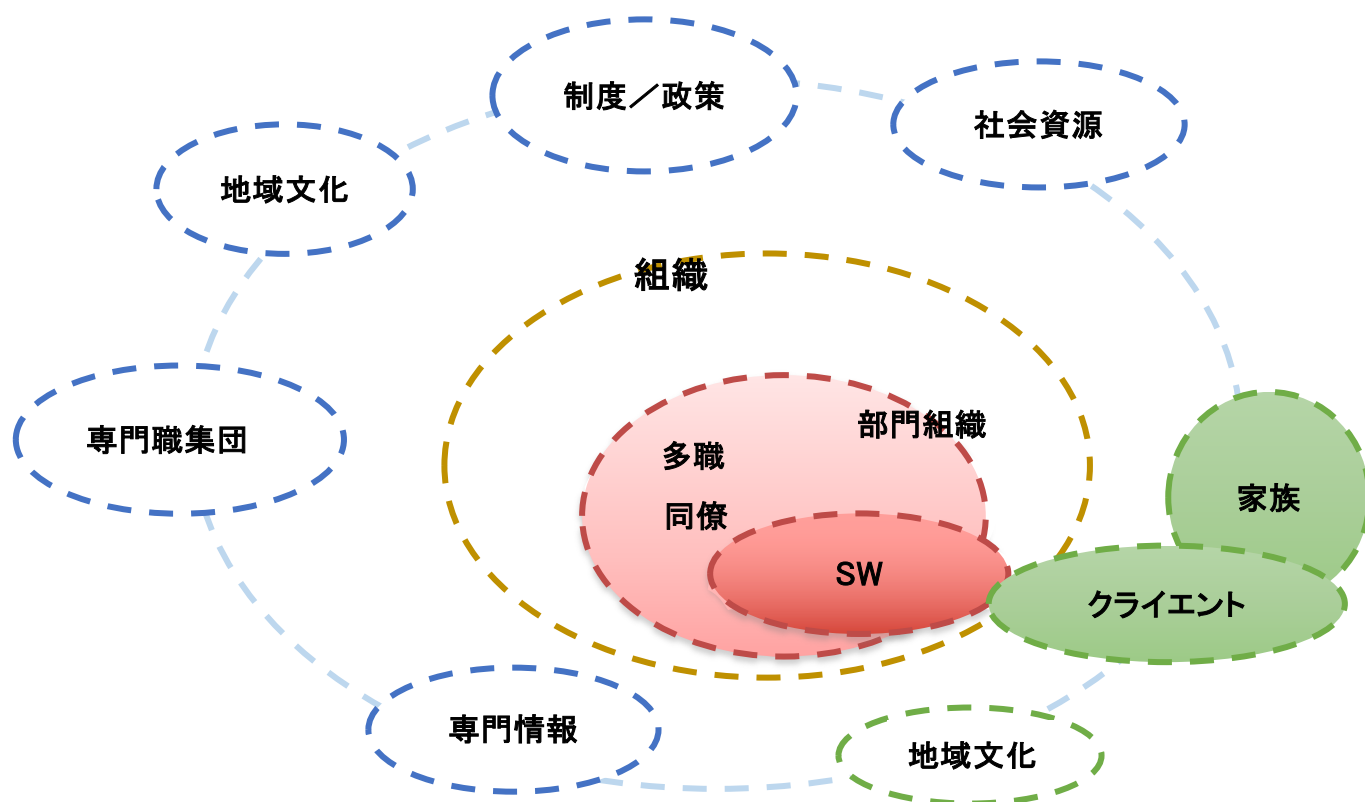


図1 保健・医療・福祉システム（福山 2005 : 227 参照）

### 4. スーパービジョン体制にみる課題

スーパーバイザーとスーパーバイジーとの関係から考える。『ケースワーク論日本的展開をめざして』（1978）ミネルヴァ書房のなかで、「ケースワークにおけるスーパービジョ

「その必要性と問題点」という依田の論文がある。それは、スーパーバイザーの立場を図式化している（図スーパーバイザーの立場を参照）ここでは、スーパー・スーパーバイザーの必要性を説いている。図中 SW は、スーパーバイジー、SVor はスーパーバイザー、CL は、クライアントとする。

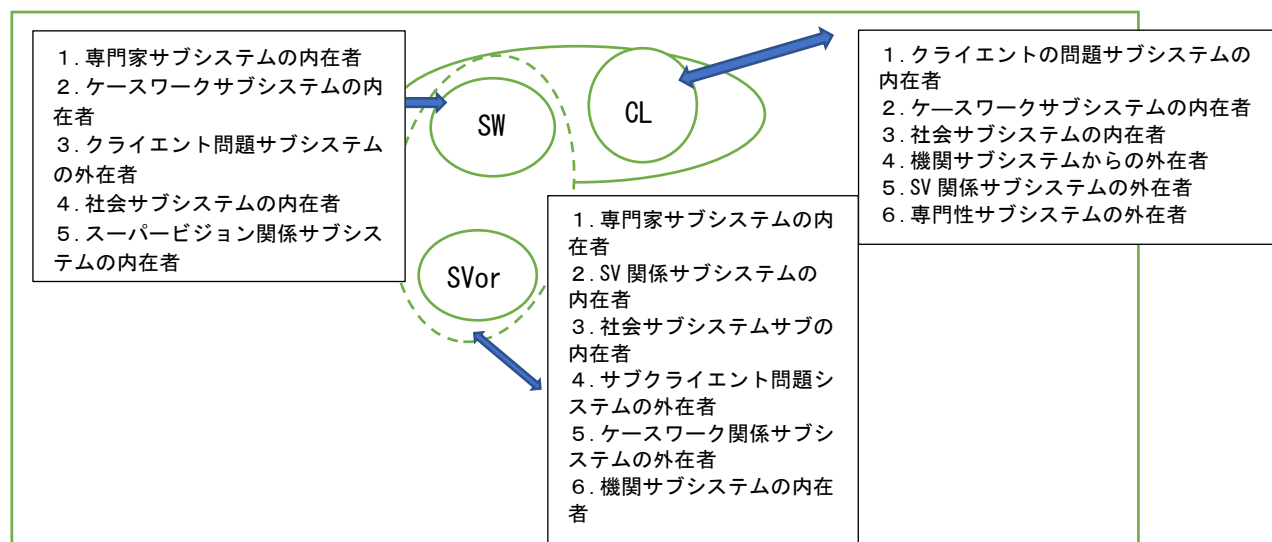


図 2 : スーパーバイザーの立場

図 2 は、スーパーバイザー、ソーシャルワーカー、クライアントの立場をサブシステムの内在者と外在者の比率から分析したものである。スーパーバイザー、スーパーバイジーの立場からスーパービジョンのニーズを理解することができる。スーパービジョン体制の交互作用のさまを考えると、クライアントは、内在者 3 : 外在者 3 であるのに対して、SW は、内在者 4 : 外在者 2 である。ところが、スーパーバイザーは、内在者 4 : 外在者 2 である。サブシステムの内在者であるということは、そのサブシステムのなかでの矛盾に取り組むことであり、その整理はとても難しい。サブシステムの外在者であれば、そのサブシステムに巻き込まれていないので、客観視できる。この意味から考えると、ソーシャルワーカーもスーパーバイザーもそのサブシステムによる巻き込まれの状況で取り組まねばならず、エネルギーが大変必要になる。スーパーバイザーは、スーパーバイジーであるソーシャルワーカーの立場を内在者、外在者から整理することで、ソーシャルワーカーの負担軽減ができ、業務遂行を可能にすることができる。この意味から考えると、スーパーバイザーにも負担軽減が必要となるため、スーパーバイザーのスーパーバイザー、すなわちスーパー・スーパーバイザーが必要となると考える。

このようにスーパーバイザー、スーパーバイジーのそれぞれのニーズを詳細に分析することで、ソーシャルワーカーがもやもやして不安定になっていて、スーパービジョンやコンサルティングを受けたいと思う状況を理解する必要がある。この状況の的確なアセス



メントにより、該当ニーズに焦点を当てたスーパービジョンやコンサルテーションが展開できると考える。

## 5. 報告レポートのニーズ別内訳

ここでは、SV 体制や CON 体制の成果について考える。まず、スタッフのニーズを分析する必要がある。その主要なるニーズの充足が SV 体制や CON 体制の成果をあげる一つの策となると考える。

そのニーズを SV 体制の構成要素として以下の 7 軸で分析し、スタッフにとってはどのニーズが主要なるものかを考える。

- |                          |   |           |
|--------------------------|---|-----------|
| 1) 主体（機能・役割）             | } | 社会的側面     |
| 2) 業務行動プログラミング           |   |           |
| 3) 発達段階モデル ……………         |   | 心理・精神的側面  |
| 4) 実践方法とスキル・理論 ……………     |   | 物理・環境的側面  |
| 5) 原理・原則（姿勢）・独自性確立 …………… |   | 霊的側面      |
| 6) 5 領域協働体制（エコシステム）…………  |   | 身体的・生物的側面 |
| 7) トレーニング体制の稼働           |   |           |

包括的臨床死生学研究所/包括的臨床コンサルテーション・センターの報告書にはレポートが、2010 年から 2021 年までで 270 本掲載されている。それらのレポートは、当該研究員が、死生学、SV、CON のそれぞれに関心を持ち、特定のテーマを設定し、彼らのニーズを提示しているものである。

これらのレポートに描写されている彼らのニーズを分類したところ、1) 主体（機能や役割）が 45 本、2) 業務行動が 16 本、3) 発達段階プログラムモデルは該当なし、4) 実践方法・5) 原理・原則・独自性の確認が 111 本、6) 協働体制（5 領域）が 58 本、7) 人材育成が 30 本であった。

この報告書は、「死生学について考えたい」、「SV や CON について考えたい」との申し出のもと、研究員がそれぞれのプログラムのいずれかに参加し研究を終了し、研究成果を報告した。それらのレポートは、報告会で発表され、それを年一回の報告書として発行してきた。その報告書の各研究員の関心点に注目し、彼らの研究成果とみなし、本章では、その分析結果を紹介する。

### 5-1) SV/CON のニーズ：主体（機能・役割）

このニーズに該当するレポートは、関心の焦点がシステムの「主体」とであると捉えた。そのシステムは、専門職、SV/CON の行為者であるスーパーバイザー、コンサルタント、その所属組織であり、そのシステムの主体に焦点を当て、特にその機能や役割について考察している。そこで、研究員の焦点として、まず、その主体がどのような状況下

にあるのか、また、その主体としての遂行責任などをどのように考察しているかについて詳細に分類した。

#### 5-1-①) どの状況下なのかースーパーバイザーであるスタッフからの訴え

- ・「上司から SV を実施するようにとの指示があった。昨日まで同僚だった人たちとの関係が難しくなった。」
- ・「特に、認定資格が取得できたことで主任になったが年齢的に自分よりも年上の同僚に対して、指示を出すのは非常に難しい。」
- ・「現在 3 年目なのに SV を担当するようにと命ぜられる。他のスタッフは新人ばかりである。」

#### 5-1-②) その立場で何をすべきかー職位や責任についての疑問

上述の専門職の訴えは、スーパーバイザーという職位、その役割遂行に伴う責任が不明であり困っている。彼らは、スーパーバイザーとしての役割と機能の遂行に際して、SV 体制の「主体」としての立場をあまり理解していない。その果たすべき職責、機能・役割はなにか。これまで、ミクロレベルでの業務遂行をしてきたが、メゾレベルである組織レベルの業務計画と遂行、すなわちマネジメントに戸惑う。日常の業務遂行の際にこれらについては意識して考えてこなかったとの言である。

ここでの課題は、管理職として SV・CON 実践の内容にマネジメントも含めることが求められたことである。一人のスタッフとして指示通りに動いてきたので、業務が、上司・部下関係 命令・指示系統に関連があったことを認識していなかった。スーパーバイザーやコンサルタントとしての業務遂行は難しく、途方に暮れている現状にある。

この状況下では、職位の変化に対応するためにスーパーバイザーやコンサルタントの役割遂行について明確にする必要である。このように、スタッフ自身の職責、役割、機能について不明確であるとの不安定さは、2010 年からの社会状況の中で、その時代にどのような問題事象として検討されてきたのであろうか。このニーズに該当する研究員たちの報告内容を分析した。

### ○研究員たちの報告からの分析 (45 本)

このニーズに該当する 45 本の報告については、主体を、専門職、利用者・家族の 2 分類で整理した。

#### 1) 主体が専門職である場合

○ (主任) 介護支援専門員, ケアマネジャー :

実践能力と自己統制 (井上貴 2010 ; 2011)、在宅ターミナルケアでの役割 : 看取り : 精神的・社会的・霊的苦痛 (三澤弥 2010 ; 2011) ; (下ノ本 2010 ; 2012) ; (小倉 2012)、スーパーバイザー (役割・指導・相談)・専門職の利用者との関わり

○ソーシャルワーカー (医療・社会福祉士・ケアワーカー) :

専門性の再認識（西脇（高橋）2011）、退院支援での医療ソーシャルワーカーの機能（石橋2010）、エンドオブライフプラクティスでの役割（藤原2013）、外国人支援での役割（大倉2013）、悲嘆作業での役割（大賀2013）

○スーパーバイザーの役割（萬歳2017）、社会的立場の役割遂行（下山2017）、スーパーバイザーの不安、限界（帰属意識）（伊東2018）、スーパーバイザーの組織に働きかける役割（古寺2021）、スーパーバイザーの教育機能（井上智2021）、スーパーバイザーの管理的機能の職務（中越2021）

○自己開示（前廣2010；2012）、専門職の自律性（石橋2010；2017）、自己覚知（鈴木麻2020）

○臨床心理士：役割の多重性の認識（瀧澤2011）、コンサルテーションの役割（宮川2015）、実習指導教員：役割（小川智2016）、成年後見人：意思決定支援の役割（久我2016）、SVの機能（榊原2018）、音楽療法士：SV/CON体制での役割、専門職のアイデンティティの形成（佐藤裕2019）、実習生指導の役割（松尾2020）

## 2）主体が利用者・家族の場合

重症心身障害児と家族：スピリチュアリティと二人称のいのちの視点（網谷2010;2011）、仏教的人間像の理想；包括的自己実現概念の生活場面への適用（清重2010；2011；2012；2013；2014；2015；2016）、被爆者のよりどころ（石井2011；2012；2013）、社会人の研究活動の意義（斎藤2015；2016）

## 5-2) SV/CON のニーズ：業務行動プログラミング

このニーズの場合、困っている内容は、彼らの業務行動について、計画したり、遂行プロセスについて分からない状況にある。

### 5-2-①) どの状況下なのか

スーパーバイザーであるスタッフの訴えは以下のとおりである。

「これまでSVやCon.を受けたことがないのでSVやCONが何か知らない。」

「経験年数が長く、SVを実施しているが、その妥当化ができない、自信がない。」

### 5-2-②) その立場で何をすべきか

上述のような訴えがあった時、何に困っているのかについて尋ねると、業務遂行の認識不足、業務遂行責任を自分とはとる必要がない。指示されたからそれをしたのだとのこと。自らその業務責任を免除している。また、その仕事は自分が行っているとの自覚から、組織レベルの業務であるとの認識を持たず、ましてや職位やその役割、職務については全く自覚がない。これは、専門職としての自律性の欠如であるので、自律性を養う必要がある。そのためにも自己の業務行動については目的、目標など、事前に計画を立てる能力が求められる。業務行動プログラミングの様式を使うことにより、専門職性の自律が育成され则认为。このニーズに該当する研究員たちの報告内容を分析した。

## ○研究員たちのレポートからの分析（16本）

このニーズに該当する16本の報告については、専門職の業務に焦点をあて整理した。

### <専門職>

- 支援相談員：介護老人保健施設の日常業務マニュアルの必要性（大野 2010）、介護支援での家族への情報提供（高橋 2011）、独居高齢者支援（佐藤弓 2012）、事業所の組織レベルでの CON 業務の取り組み効果（八谷 2017）
- 医療ソーシャルワーカー：スーパーバイザーの職務遂行：スタッフ募集・SV 体制の説明の職務の意識化、マニュアル化（中越 2020）、業務行動プログラミングによるグループ SV の効果（土山 2021）
- スーパービジョン：組織アセスメント（野口 2015）、業務の複雑性（萬歳 2016）、業務行動のバックアップ（宮内 2016）、業務分類（河野 2017）
- コンサルテーション：組織成果（八谷 2017）、アセスメント（石川陽 2021）；（赤松 2021）
- 保育業務（寺井 2020）、児童虐待対応（池田 2020）

### 5-3) SV/CON のニーズ：発達段階モデル（自律性の形成）

このニーズの場合、困っている内容は、彼らの専門職としての発達段階について困っている状況にある。

#### 5-3-①) どの状況下なのか

どの状況下なのか—スーパーバイザーであるスタッフからの訴え  
「スタッフは私の指示に従わず、自分の案を通そうとする。かなり経験を積んできているので、ほぼ大丈夫であるが・・・」  
① このニーズは、スタッフの自立性と自律性に関する認識の混乱から生じている。SV/CON の機能（管理、教育、支持）のうち、教育機能が特化され、集中的重要視されている。また、専門職としての自立が理想化されており、早期に自立を希望する。その意味では、発達段階モデルの適用が必要である。スーパーバイザー、スーパーバイザーは、ともに発達するが、直線的ではなく、階段のように発達し、互いにそのスピードは異なる。そして、段階ごとに課題と取り組んでいる。

#### ○研究員たちのレポートから該当なし

### 5-4) SV/CON のニーズ：実践方法、スキル、理論

このニーズの場合、困っている内容は、彼らの業務で、実践方法、適用するスキル、支援計画を練る場合の理論が分からない状況にある。

#### 5-4-①) どの状況下なのか

スーパーバイザーであるスタッフからの訴え  
「新人のスタッフが指示したことに従わない。」  
「何度も同じ質問をしてくる。指示したことにに対する報告がない。」  
「CON であることの自覚がない。」  
「突然、スタッフが相談に来て、答えを求める。」

#### 5-4-②) 方法論

上述のような訴えについて、何に困っているのかを尋ねると、専門職が実践する場

合、ソーシャルワークの質に変化が生じている。問題解決型志向・原因追求型：直線的志向により、問題を取り除くための計画案を追求して、それが妥当であるかどうか分らずスーパーバイザーには即回答を求める。ソーシャルワークが専門的相談から誰もができる相談へと変換してきており、専門性の軽視が見うけられる。

## ○研究員たちのレポートからの分析（111 本）

このニーズに該当する 95 本の報告については、一見、スタッフがソーシャルワーク面接計画、支援計画における方法論に注目しているようであるが、研究員たちの報告内容は、非常に多様であり、下記のサブ項目、1) 制度・政策とソーシャルワーク、2) ケアの実践方法：相談型、カウンセリング、組織運営論のマネジメント、3) ソーシャルワークの理論モデル・アプローチ・包括的・総合的・統合的モデル、4) 死生学、ターミナルケア、グリーフケア、グリーフワークで分析した。

### 1) 制度・政策とソーシャルワーク

児童虐待防止法・DV防止法の審議における母親の意味づけ（池田紀 2011）、専門職の記録業務の枠組み～介護保険制度（三田 2011）、退院困難のスクリーニング：診療報酬制度（野口 2013）、CON 契約の前提条件（山田 2015）

### 2) ケアの実践方法：相談型、カウンセリング、組織運営論のマネジメント

看取りケアの困難の質（下ノ本 2011）、災害支援活動：「曖昧な喪失」の概念適用（山田 2011）、ターミナル期の成年後見人のクライアント認知（齋藤 2012）、支援者支援の取り組み（御牧 2012）、医療機関におけるソーシャルワーカー部門の組織管理運営（野口 2012）

### 3) ソーシャルワークの理論モデル・アプローチ・包括的・総合的・統合的モデル

#### ○システム論、自我心理学、生物（生態）学、役割理論、危機理論、

バイオ・サイコ・ソーシャルモデル（心理社会的モデル）：ソーシャルワーク支援：退院後の援助評価（大橋 2010）、患者の心理社会的問題（山本 2010；2011）、心理社会的モデルの有用性（福貴 2010）、成年後見人：身上監護：ソーシャルワークアプローチの有用性（鈴木四 2013）、退院支援開始時期と入院期間の相関関係（中越 2016）、支援付き意思決定（鈴木四 2017）、危機介入理論：危機対応・（古旗 2020）、精神保健福祉分野の支援における問題解決思考に陥りやすい現状（古旗 2021）

#### ○対象者理解

聴覚障害と精神障害：対象者理解のプロセス（赤畑 2012）、DV PTSD：当事者理解&あいまいな喪失（永沼 2013）、担当ケアマネジャー：独居高齢者と相互会話（佐藤弓 2014）、障害児：親の障害受容（古寺 2014）、MSW：透析者の状況変化（金井美 2014）、DV 被害者と二次被害（野坂 2017）、一般児童への保育と障害児保育の共通点と相違点：重度重複障害児への具体的な保育・支援（寺井 2018）；子どもの主体性を支える保育方法（寺井 2020）；重度重複障害児に対する保育士支援；統合保育：一般の児童と障害を持つ児童のかかわり（寺井 2021）、住民の死生観の認知度：就活プログラムの意義：死の人称（岡江 2021）

#### ○評価様式

記録の妥当性(三田 2012)、記録評価尺度開発案(三田 2013; 2014)、デッソー理論：初回面接の目的：アセスメント(萬歳 2013)、高度救命救急：転院支援スクリーニングシート(安藝 2013)、児童虐待：Threshold の概念の判断基準(池田紀 2018; 2020)

#### 4) 死生学、ターミナルケア、グリーフケア、グリーフワーク

レジリエンスとセルフグリーフケア：コメディカル医療従事者の喪失体験からの回復過程(遠山 2011)、エンド・オブ・ライフケア：生きてきた証を 継承する支援(藤原 2012)、ソーシャルワークにおけるグリーフワークの構造(品田 2012)、湯灌と悲嘆作業の関係性：家族(野田 2013)、看取り：地域と人の逝き方(杉山 2013; 2014)、ホスピス・緩和ケア：患者の気持に寄り添う(大川 2014)、デス・エデュケーション(小高 2014)、独居がん患者の在宅看取り(大賀&森 2014)、DV 被害者とあいまいな喪失(水沼 2014)、死生観の危機(小高 2015)、がん医療における緩和ケアチーム：CON(御牧 2015)

#### 5-5) SV/CON のニーズ：原理・原則(姿勢)、独自性確立

このニーズの場合、困っている内容は、彼らの専門職性の原理・原則(姿勢)・独自性の確立に関して、どのように考えて取り組むべきかが分からない状況にある。

##### 5-5-①) どの状況下なのか

スーパーバイザーであるスタッフからの訴え  
「専門家として知るべき価値、倫理綱領の知識を持っていない」  
「倫理的ジレンマをもつ」  
「人の尊厳と尊重との違い(対象者、専門職、専門機関)、問題のある人」

##### 5-5-②) 原理・原則(姿勢)・ソーシャルワークにおける独自性の確立

上述のような訴えから、専門職の倫理原則、専門職の姿勢、価値観が揺れており、スタッフは自らが専門職として行動しているかどうか不安になってきたことを示している。

#### ○研究員たちのレポートからの分析(31 本)

このニーズに該当する 31 本の報告については、以下のように分析した。

精神障害者：地域・まちづくり、コーディネーションの役割・機能(河島 2010)、虐待をした母親に対するアフターケア対策(竹家・渡邊隆 2010)、相談員・MSW の姿勢：終末期ケアでのトータルマネジメント技法の開発(柳原他 2010)、高齢者福祉施設におけるコア人材育成：管理職クラスのスタッフの養成：組織コミットメントと役割期待(藤井 2010)、独居高齢者支援：家族との関係性を取り組む(佐藤弓 2010)、統合失調症の生きづらさへの理解(瀧澤 2010)、統合失調症の社会機能障害(瀧澤 2011)、ソーシャルワーク支援との関係(佐藤弓 2011)、介護支援専門員：看取り準備教育(梨本 2011)、介護支援専門員の経験知の活用と関係機関や人々との関係性(佐藤弓 2012)、学生相談活動における臨床心理士の専門性(独自性)(瀧澤 2012)、看取り対応マニュアルの提案(梨本 2012)、介護老人保健施設の支援相談員：ターミナルケアのアセスメント：利用開始期からターミナルケアが始まっている(三澤真 2010; 2011; 2012)

#### 5-6) SV/CON のニーズ：協働体制の稼働

このニーズの場合、困っている内容は、彼らが自己の専門職性と他者の専門職性が異なっており、多職種間での協働実践をどのように実施していくのがよいか分からない状況にある。

##### 5-6-①) どの状況下なのか

スーパーバイザーであるスタッフからの訴え

「地域を基盤に展開するソーシャルワークやケアワークにおいて、医療・福祉・介護・保健・教育の多専門職との連携会議に招集することが必要となり、会議の運営をする方法がわからない。」

「招集者として、会議の司会を担うが、特に専門性の異なる施設、機関、機構などとの協働実践は同意を取り付けることが難しく、力のある専門職がリーダー的にその会議を仕切ってしまう。」

##### 5-6-②) 協働実践の困難性には、多様な要素が影響している

上述のような訴えから、多専門職との協働実践上の課題が生じ、同質性(ホモ)・異質性(ヘテロ)のCON体制の効用と限界、同質性の専門職の尊重、異質性の尊重および尊厳の保持が求められていることが理解できる。

#### ○研究員たちのレポートからの分析 (58 本)

このニーズに該当する 58 本の報告については、以下、協働実践、CON、SV、CON/SV に分析した。異質専門職者への CON の実施への抵抗は、専門職性についての理解が得られないことがその理由である。領域協働体制(エコシステム)：医療・福祉・介護・保健・教育・司法・産業であり、研究と開発 今後の協働体制には、CON の適用が求められ、包括的コンサルテーションモデルなどの開発が必要である。領域の異なる専門職からの補充：不足しているところを穴埋めするのが CON である。専門職ならば、限界はないとの信念から CON を行っている。コンサルティには、訓練よりも教えてほしいという欲求が強く現場では実施が難しいとの印象である。CON と SV とを明確に区別して、その成果を追求する必要がある。

研究員の報告の内容は多様であり、分析項目を、1) 協働実践：異質性の中で、2) コンサルテーション、3) スーパービジョン、4) スーパービジョン/コンサルテーションを設置した。

##### 1) 協働実践：異質性の中で

スクールソーシャルワークにおける機関間連携・協働の課題(竹家・渡邊隆 2011)、高齢者福祉領域における「音楽療法」の再考察～音楽療法士として(櫻井 2019)

##### 2) コンサルテーション

社会福祉協議会でのコンサルテーションの効果、地域アセスメント(河島 2016)、CON：実践と研究を行き来する思考の言語化(池田紀 2016)、包括的臨床コンサルテーションがもたらす成果

(山下 2017)、CON を受けたことの成果 (田中典 2016) ; (宇佐美 2017) ; 教育現場 (吉田 2017) ; (菅井 2017) ; (渡邊淳 2017) ; MSW としての CON 成果 (チェ 2016, 2017)、一般医療機関での CON 導入の意義 (宮川 2017)、(御牧 2018)、(河野 2018)、(飯田 2021)、ソーシャルワーカーが行う CON 実践に関する調査 (古寺 2019)、CON を受ける準備 (佐藤裕 2020)、CON のアセスメント (石川陽 2021)

### 3) スーパービジョン

音楽療法スーパービジョン (佐藤裕 2017)、アンケート調査 (佐藤裕 2018)、スーパービジョンがもたらす効果と限界 (宮川 2018) ; (赤松 2019)

### 4) スーパービジョン/コンサルテーション

SV と CON がもたらす効果 : (小川康 2017)、(鈴木麻 2017 ; 2018 ; 2019)、(古寺・品田・鈴木あ 2017)、(原 2018)、(石川陽 2019)、(赤松 2020)、児童養護施設 : 小規模化・地域分散化・SV/CON 体制の必要性 (橋村 2019)、専門職の行う SV、方法論、専門性の有効活用、巻き込まれないなど受ける側 (CON/SV) の準備 (志賀 2021)

## 5-7) SV/CON のニーズ : トレーニング体制の稼働

スーパーバイザーであるスタッフからの訴えには、研修プログラムの選択、ワークショップの選択、職場派遣・個人的関心・キャリアパスの形成、その上、社会資源不足、人材確保 : 人材、専門職のトレーニング体制として 6 軸構想を提示する。

- 1) 科学と実践との協働体制 : 超学際的、専門職的協働
- 2) 科目「コンサルテーション」の位置づけ・醸成 (教育研究との協働)
- 3) 同質性 (ホモ)・異質性 (ヘテロ) の CON 体制の効用と限界
- 4) CON 体制の組織的展開プロセスの精査 (協働の相乗効果) 不足から専門職人材育成システム (トレーニング体制) の必要性が含まれている。これに基づき
- 5) CON モデルの開発と研究 : 実践の妥当化と試行
- 6) コンサルタント養成・訓練体制のための尺度・ツール開発が求められる。

## ○研究員たちのレポートからの分析

このニーズに該当する 29 本の報告については、組織、トレーニング体制、専門職、CCTC 研究所トレーニング・プログラム、領域別トレーニング体制に分けて整理した。

### <組織>

無料低額診療事業ハンドブック (人身売買被害者及び在日難民編) 作成に関する研究 (西田 2010)、地域における高齢者虐待防止策の構図 (乙幡 2010)、子どもの死生学教育の重要性と課題 (横田 2012)、無料低額診療事業ハンドブック (在日難民編)、作成に関する研究 (西田 2012)、ソーシャルワークの専門性による研修型コンサルテーション : FK モデル適用の会議演習 (斧 2015)、医療ソーシャルワークのスーパービジョン : 職場内事例検討への喪失概念の援用 (土山 2015)、教育センターでの活動をスーパーバイザーとして考える一ケースカンファレンスや勉強会 (大川 2015)、障害福祉ソーシャルワーカーの育成・確保と CON (菅井 2018)、クライシスにおける対人サービス組織の SV 体制



の効果的機能、ストレスの高い環境のスタッフの業務保障、リスクマネジメント体制（古旗 2020）、母子生活支援施設における SV/CON 体制の整備（横井 2021）

#### <トレーニング体制>

専門職成年後見人等の身上監護：実務上の課題；施行 5 年後（鈴木四 2010）；施行 10 年後（鈴木四 2011）、がん診療連携拠点病院におけるバイオ・サイコ・ソーシャル側面からの支援機能（大橋 2011）、ソーシャルワークのスーパービジョンの探索的・予備的 研究：フォーカスグループインタビュー調査（赤畑・古寺・品田・鈴木あ 2015）、公益的取組「認定就労訓練事業」；事業所スタッフとのかかわり（藤井 2016）、JICA 日系社会シニアボランティア（大倉 2017）、職能団体における SV：ソーシャルワークの視点（辻本 2020）

#### <専門職>

ソーシャルワーカー：インターク面接記録に基づく理論構築（ドロシー・デッソーの観察基盤モデル）（萬歳 2011）、介護支援専門員：看取り支援の準備教育の調査（梨本 2011）、病院チャプレン：医療チームでの機能（浜本 2011）、ファシリテーター：養成講座の意義（鶴沢 2014）

#### <CCTC 研究所トレーニングプログラム>

上級トレーニング・プログラムの研究（萬歳英美子 2010；2011）；（萬歳・御牧・佐藤弓・野口 2016）；（野口 2017）、調査・研究トレーニング・プログラム研究（鈴木あ・品田・古寺 2016）、SV トレーニング・プログラムの効果（池田繭 2018）、SV トレーニング・プログラム研究員報告（石橋・一杉・崔・増村・西村・吉田・小糸・西村 2016）；（古寺 2020）、CON トレーニング・プログラム（佐藤裕 2021）

#### <領域別トレーニング体制>

保育科学生：地域子育て支援センターでの体験（平澤 2011）、社会福祉分野における組織活動の活性化－人材育成／確保の観点（秋山 2011）、介護職員の人材育成・定着意識調査（秋山 2012）、CON・SV：職場内 SV の難しさ（佐藤弓 2017）、指導者養成の効果（御牧 2017；2019）、高齢者介護施設における対人援助職員の育成方策と介護施設の役割（福嶋 2013；2015；2016）；職員間のトラブル解消と連携方策（福嶋 2017）、音楽療法士：職業的成長と SV（実態調査）（小柳 2018）、SV/CON 体制（佐藤裕 2019）、実習生（スーパーバイザー）；資質・成長を支える SV の意識化（松尾 2020）、児童発達支援実践： 専門家育成プロセスでの職業的社会的化（井上智 2020）

## 6. システムの内在者・外在者（ニーズが生まれるエネルギーの動き）

それぞれの報告内容のニーズ分析をしたものをさらにシステム内在者としての立場、システム外在者としての立場から、いずれのシステムが縛りを付加しているのかどうか、強く巻き込まれているのかどうかを整理するとそのテーマの特徴が明確になる。優先順位 1 位のものをさらに詳しく分析すると、内在者で、もやもやしているなら、他のシステムでの外在者立場からもう一度、自身の立場を眺めることにより、取るべき態度は決定される。システムに内在されている場合、外在の立場だからこそ理解できることもあるかもしれないという期待がわく。多くのシステムの中からどの立場を優先するのかを決定するこ

とで、スーパービジョンやコンサルテーションで取り扱うテーマが明確になり、進むべき方向性がよりはっきりとさだまってくると考えられる。

#### 6-1) 主体の役割や機能

このニーズでは、内在者としての立場 15：外在者としての立場 18 で、ほぼ同比率であった。各システムの内在者としての立場では、システムの中での既知の内容の矛盾、悶々さを明確にしたい。外在者としての立場では、システムの外にあるものを客観視して、未知のものを探究し、習得したいという意欲からの思いが反映されたものであった。

#### 6-2) 業務行動プログラミング

このニーズでは、内在者としての立場 10：外在者としての立場 10 と、全く同比率であった。恐らく業務遂行する上で、自己の既得の情報では不十分さを感じ、また、自分の立場が環境からの影響を受けていることを客観視した場合に、さらに自分にとって未知の理論やモデルなどを探究しなければならにというニーズが発生したと考えられる。

#### 6-3) 発達段階モデル

該当なし

#### 6-4) 実践方法、スキル、理論

##### 6-4-①) ソーシャルワーク

このニーズでは、内在者 2：外在者 2 と、全く同比率であった。制度という外界の束縛に対して準ずることからの縛り（内在者）を感じている場合とソーシャルワーカーとしての実践家が制度を適用することを考慮する際に、その制度に対して外在者としての客観的限界を感じている。だからこそもやもやしているのだろう。

##### 6-4-②) 方法：相談型、カウンセリング、組織運営論のマネジメント

このニーズでは、内在者 2：外在者 2 と、全く同比率であった。これも、ケアの専門性を発揮しているという内在者としての苦悩と運営論など、組織を概観して外在者として取り組むことの客観的取り組みの必要性を主張するが、それが果たして適切であるのか、その妥当性が見つからないので困っているのかもしれない。

##### 6-4-③) ソーシャルワークの理論モデル・アプローチ・包括的・総合的・統合的モデル

#### ○システム論

このニーズでは、内在者 6：外在者 1 と、内在者の立場の方が多数であった。これは、ソーシャルワークの展開をシステムから俯瞰してみることで、内在者としての立場に疑問を持つ。ある意味ではシステムに巻き込まれている自己を見つけるかもしれない。

### ○対象者理解

このニーズでは、内在者 1：外在者 4 と、外の方が多数であった。ソーシャルワークの展開については、外在者として客観的に当事者支援を展開することで、原理原則を守り切れていないのではないかとの思いに駆られる。

### ○評価様式

このニーズでは、内在者 2：外在者 2 と、全く同比率であった。これは、ソーシャルワークの実践上、マニュアルなどの必要性を考え、作成していくうちに外在者としての姿勢を維持できるようになっている。

#### 6-4-④) 死生学、ターミナルケア、グリーフケア、グリーフワーク

このニーズでは、内在者 4：外在者 7 と、外在者の立場の方が多数であった。この分野では、人の尊厳という観点から支援するが内在者としてでは到底理解しきれないことが多く、外在者として客観的に支援方法について考える必要が出てくる。しかし、それは人の尊厳の保持をする姿勢との矛盾かどうかを考えている。

#### 6-5) 原理・原則（姿勢）・独自性確立

このニーズでは、内在者 3：外在者 6 と、外在者の立場の方が多数であった。これは、6-4-④と同じ状況であり、外在者としての位置を維持できるようではあるが、内在者としての支援方法を模索してしまう。つまり、薄情であるとの批判を受けたくないという気持ちが生じるからであろう。この立場の差を埋めることには困難さがあると考える。

#### 6-6) 協働体制の稼働

##### 6-6-①) 協働実践

このニーズでは、内在者 1：外在者 1 と、全く同比率であった。専門職として同等の立場から支援を展開することは、どちらの立場での理解も求められる。

##### 6-6-②) コンサルテーション

このニーズでは、内在者 9：外在者 5 と、内在者の立場の方が多数であった。内在者では多くの限界が見えてくる。外在者から見て何が見えるかに頼っているとも考える。

##### 6-6-③) スーパービジョン

このニーズでは、内在者 2：外在者 1 と、内在者としての立場の方が多く、スーパーバイザーも内在者であり、その限界や効用が共通して理解できるという利点がある。

##### 6-6-④) CON/SV

このニーズでは、内在者 10：外在者 5 と、内在者の立場の方が多数であった。これは、スーパービジョンでの限界を理解してほしいと思いながらも、スーパーバイザーに客観的にシステムを俯瞰して見えるものを提示してほしいと思うのかもしれない

## 6-7) トレーニング体制

### 6-7-①) 組織

このニーズでは、内在者 6 : 外在者 4 と、内在者の立場の方が多数であった。研究員が内在者の立場からさらに指導を得たいと求めるが、同時に当該システムの外在者としての立場からさらに他の未知の方法論や技術を習得したいという気持ちがはやるのかもしれない。

### 6-7-②) トレーニング体制

このニーズでは、内在者 1 : 外在者 5 と、外在者の立場の方が多数であった。研究員が内在者の立場から物事を見ている場合、甘やかされているとの思いが強くなり、外在者としてさらに客観的に新しい情報を習得したいと思うようになっている状況が描かれている。

### 6-7-③) 専門職

このニーズでは、内在者 2 : 外在者 2 と、全く同比率であった。専門職性については、内在者として、これまでの経験から積み上げられたものを習得する方が効果はあがるとの思いがあるのかもしれない。

### 6-7-④) CCTC 研究所トレーニング・プログラム

このニーズでは、内在者 4 : 外在者 3 と、内在者の立場の方が多くであった。専門職性と同じ機関のトレーニングを受けることから内容的には一致することが多く、分かり合えるがさらに客観的なものを入手したいという考えを研究員たちが持っていたといえよう。

### 6-7-⑤) 領域別専門職

このニーズでは、内在者 3 : 外在者 5 と、外在者としての立場の方が多数であった。専門職性から考えて、理解されているとの思いがあるが、もっと理解して認めてほしいという個人的な思いが強くなる可能性があることを示唆していると考ええる。

## おわりに

本稿では、SV や CON について次のように説明することができる。スタッフである人が抱える「もやもや感」は、現場実践を展開している立場からは、どのような状況下においてもすっきりと整理されているものではないことが理解できた。逆に言えば、専門職として活動するには、環境が一定のものではなく、少しずつ変化していて、生きている有機体としてその事象に対応しているのである。その環境の中の一員としてスタッフは、職場内外で様々な工夫をしていること、それが専門家であることの証明であり、SV や CON の活用を通して、専門職としての成長を目指して取り組んでいるさまであると結論づけたい。逆に言えば、専門職としての貢献は、職場内外でのこれらの活動によって保障されていることを認識することが必要であろう。

## 参考資料

- 福山和女編著（2005）『ソーシャルワークのスーパービジョン』ミネルヴァ書房.
- 福山和女（2010）「医療・保健・福祉領域での協働のあり方」『総合リハビリテーション』 38（12），1155-1161，2010-12-10.
- 依田和女（1978）「ケースワークにおけるスーパービジョンーその必要性と問題点」『ケースワーク論日本的展開をめざして』ミネルヴァ書房.

## 第 2 章

### 社会福祉と希望のありか—今日の社会福祉を考える—

白井 幸子

#### パート 1：地上に平和と平安を求めて

##### 1. 地上に神の国を

地上に平和で平安のみなざる理想郷を求める祈りや願いや運動は、人々の記憶にとどまるものから、誰からも忘れ去られたものまで、いつの時代も国の内外を問わず数多く存在していた。地上にいわば神の国を実現しようというこのような試みは、現代の社会福祉の思想とも深く関わるものと思われる。

地上の神の国について聖書は、「思いわずらうことなく、何をおいても第一に求めるべきもの」、「すべての持ち物に勝る価値ある至福の国」として語っているが、そのように語られる「地上の神の国」を求める試みが歴史上常に数多く存在してきたのは、現実の世界がいつも多くの苦しみと悲しみと争いの絶えない世界だったからであろう。

よく知られた以下のような出来事も、そうした試みのひとつと考えられる。

##### 1) 太平天国の乱<sup>1)</sup>

19 世紀半ばの中国に、地上に天国をという旗印のもとに起きた農民、市民、クリスチャンよりなる巨大な反乱は、「太平天国の乱」と呼ばれる、規模からも、持続性からも、目的からも、忘れることのできない地上の天国を目指す運動のひとつであった。

天啓を受けたと信じる洪秀全によって指導されたこの反乱は、征服王朝である清王朝を打倒して地上に神の教えに基づく理想郷を実現しようとする運動であり、一時、当時の清朝の広い地域を支配下に治めたのであるが、洪秀全の死後、運動に分裂が起こり、清朝の攻撃に耐えることができず理想を実現することなく 13 年後に崩壊の道をたどった。

##### 2) 「新しき村」<sup>2)</sup>

今から 100 年ほど前に武者小路実篤とその同志によってはじめられた「新しき村」運動も地上に理想郷を建てようとするもので、地上の神の国を目指す運動に通じるものであったと思われる。

新しき村は、1918 年宮崎県に開村され、村民は最多時 60 人を越えていたが、ダム建設により農地が水没することになったため、1939 年埼玉県入間郡に移転し、2023 年現在も 10 人ほどの村民が住んでいて、新しき村の理想の伝統を受け継いでいるという。

##### 3) 「杜子春」

また、芥川龍之介<sup>3)</sup>の名作「杜子春」における主人公の若者は、大きな富を手にしても得ることのできなかつた地上の平安を得るために、最後に仙人に弟子入りするのであるが、この作品に、自死した時、枕元に聖書があったと伝えられる芥川が、「地上の神の国」を求めて苦闘したであろう足跡を想像することができる。

##### 4) 「蜘蛛の糸」と福祉の思想

芥川は、「西方の人」、「きりしとほろ上人伝」、「南京の基督」など、イエス・キリストに関する多くの作品を残しているが、すでに古典となった「蜘蛛の糸」は、「一人が救われるには、万人が救われなければならない」、あるいは、「自分が救われるには、あなたも救われなければならない」という、福祉の中心にある「すべて

の人に平和と平安を」という思想と人間だれしもが持つエゴイズムをめぐる作品である。「蜘蛛の糸」は、すべての人が望む幸福な人生とそれを妨げるエゴイズムの間で苦しんだ芥川のいのちをかけた価値ある遺産である。

「この世で悪の限りを尽くして地獄に落ち、血の池で苦しんでいた「蜘蛛の糸」の主人公犍陀多（かんだた）のもとに、ある日、極楽のお釈迦様から救いの蜘蛛の糸がもたらされた。それは、生前、山道を歩いていた時、目の前の山道を横切っていた一匹の蜘蛛を、いつものように踏み殺そうとした犍陀多が、なぜかその時だけは慈悲の心が働いて、踏み殺さなかった犍陀多へのお釈迦様からのご褒美だった。

蜘蛛の糸に気づいた犍陀多は喜んで蜘蛛の糸にすがりつき、よじ登りはじめた。そしてかなり登った時ふと下を眺めてみると、何と、今登ってきた蜘蛛の糸に血の池にいた無数の罪人がつかまってよじ登ってくるではないか。

さあ大変だ、犍陀多一人を支えるだけでも危ない細い蜘蛛の糸にこれほど多くの罪人が取りすがって無事なはずはない。

「おーい、やめろ、もどれ、もどれ」と犍陀多は思わず叫んだ。

するとその時、蜘蛛の糸は犍陀多の上方で切れ、犍陀多は元の血の池に落下したという。」

## 2. 今日の困難

第2次世界大戦のあと100年余り、日本はこれまでの歴史に比べると、戦いのないことにおいては比較的平和で落ち着いた時間を与えられてきたように思われる。けれども、2023年現在の日本は、内外共にこれまで経験したことのない新たな大きな課題と困難に直面している。

地球規模の困難としては、ロシアのウクライナ侵攻という国家規模の不正と暴虐が横行し、それに伴って多くの地域でこれまでも存在していた食糧危機が一挙に危機的状況に達していること、温暖化による多くの想像外の困難が世界の各地に起きていること、そして何よりもこれまで以上に核戦争の恐れが迫っていることなどがあるが、日本国内の問題としては、以上の世界的規模の問題に加えて国家として返せる見込みのない巨額の借金があること、とどまるところを知らない少子化の傾向、年々減少する実質賃金、奨学金の返済に立ち往生する若者、年老いて身に迫る生活苦、働く人の4割に達する非正規労働者の存在とそこに存在する苦悩などがある。

## 3. 困難はこころの領域にも

しかし、日本が直面しているこうした困難は、目に見える社会問題や経済問題にとどまらず、それら以上に、精神や心理の領域に深刻な影を落している。

2020年9月3日の東京新聞夕刊によれば、国連児童基金(ユニセフ)が行った、先進国・新興国38か国に住む子どもの幸福度を調査した報告書によれば、日本の子どもは、生活満足度の低さ、自殺率の高さから「精神的な幸福度」が37位と最低レベルであったという。

日本は、自殺率の比較的高い国として知られている。アジアの中では、日本は決して貧しい国とは言われないのであるが、自殺率がアジア諸国よりもはるかに高い<sup>4)</sup>。若者が将来に希望を持っているか、学ぶことに意欲を持っているか、などに関するいくつかの国際的調査があるが、多くの調査によればそこでも日本の若者の位置はかなり低いと報告されている。たとえば総務省による平成26年版「子ども、若者白書」によれば、日本を含めた7か国の満13から29才の若者を対象とした意識調査で、自己肯定感を持つ人の率は日本が45%であり、他の6か国(米、

英、仏、独、韓国、スウェーデン）が 70%以上であるのに比べ、際立って低いと報告されている。

#### 4. 社会福祉と希望のありか

第 2 次世界大戦のあと、日本は生きるのにはげしく苦しむ時代を経験したが、そこには一つの希望があった。それは軍国主義から解放され、新しい平和憲法のもとに、男女平等社会に生きるという希望であった。現代はこれらの希望が基本的にあるいはかなりの程度実現されているはずであるのに、現代に生きる日本人に希望が希薄で、生きることに喜びと満足を感じる人が少ないように思われるのはなぜなのか。

苦しい時代には希望が必要であるが、今日という困難な時代に生きる人々は何を希望として生きているのか。

今、日本の社会福祉の領域で働く人々が対象とするのは、このような時代に苦闘しつつ生きている若者、高齢者、成人、子ども、女性、男性である。社会福祉の領域で働く人々は、このような新たな困難の中に生きる今日の日本人の中に分けて入って、助けの必要な人々と共に生きることを目指す貴重な存在である。今日の日本という格差社会に生きる人々の格差をやわらげ、ともに耐えて生きたいと願う人々を助け、閉ざされたように見える社会に希望を見出すために、人々と共に、その先頭に立って歩むのが社会福祉に関わる人々の一つの姿であると思われる。

そのことはしばしば助けを必要とする人々と共に苦しむことを意味するかもしれないが、利用できる限りの社会資源を活用して人々を社会的、経済的に助け、精神的、心理的にも支え、自らも現代に生きる希望をもって、人々と共に歩まねばならないと思う。

これらに関連し、人々を常になぐさめ、しばしば励まし、ひとつの希望を指し示す「ストローク」について、後に述べたいと思う。

#### 参考文献

- 1) 小島晉治（2001）洪秀全と太平天国、岩波書店。
- 2) 武者小路実篤の「新しき村」、朝日新聞夕刊、2023 年 2 月 13 日一面
- 3) 福田清人、芥川龍之介（2016）清水書院。
- 4) 自殺率の国際比較（2017）World Health Statics.

#### パート 2 ; 社会福祉とストローク

米国の精神科医であり、交流分析の創始者であるエリック・バーン（1910—1970）は、人は**他者からの刺激**なしには生きられない、人は誰でも他の人々から自分の存在や価値を認めてもらいたいという願いをもって生きていると言い、他の人々の存在や価値を認める言葉や行為を「**ストローク**」と呼んだ。エリック・バーンは、人は他の人々からのストロークなしには生きられないと考えた<sup>1)</sup>。人間の成長には、肉体のために栄養物が必要であるように、健全な精神の発達には「**心の栄養物**」が必要である。エリック・バーンは心の栄養物を「**肯定的ストローク**」と呼んだ。

##### 1. 人はストロークなしには生きられない。

「人はパンのみによって生きるのではない」という聖書の言葉<sup>2)</sup>があるが、人間はパンがあったとしても、ストロークなしに生きることはできない。身体がパンによって養われるように、人の心はストロークによって養われ、支えられる。人の



心が豊かになるのは、知恵や知識にもまして、人々から与えられる肯定的ストロークによる。

けれどもこの社会には、常に肯定的ストロークが不足しがちである。日本においても、現代社会に特にストロークが欠乏している状況がある。ストロークが欠乏している状態を埋め合わせてくれる働きが、社会福祉の分野におけるさまざまな活動である。社会福祉の活動がいかに現代社会の中で必要とされているかを後述したい。

はじめに、具体的な出来事を紹介したい。以下の話は、私の知人の A 精神科医が、心理療法の研究会で話して下さったことである。A 先生は「最近よいことがあってね...」と言って次のような話をしてくださった：

「衣類の工場を経営している知り合いの社長さんから、どなたか工場で働いてくださる人がいたら紹介していただけないかと頼まれたので、全く問題がないわけではなかったが、20 代の B 子さんを紹介したということである。工場の社長さんは B 子さんを採用する決断をした。

それから数カ月ほどして、A 精神科医は社長にばったりと出会うことがあった。B 子さんを紹介したものの心配していたことでもあり、社長さんに B 子さんの様子をたづねた。『B 子さんはどうしていますか』と。すると、予想外の返事がかえってきた。

「良い人を紹介していただきありがとうございました。おかげで助かっています。」と言われたのである。

聞いてみるとこんな様子であった。B 子さんは朝早く誰よりも先に出勤してきて、ロッカールームの入り口に立って、出勤する職員一人一人にあいさつをするというのです。「おはよう、そのセーターよく似合うよ。ブローチも素敵だよ」。とか「おはよう、その髪型いいね」とか、「おはよう、今日はいい天気だよ」とか声をかけるのであった。『あんな子が入ってくると、私たちの負担が増えるだけだ』と言っていた従業員たちも、彼女が風邪などで休と、『今日は B ちゃん休みかい、寂しいね』というようになった。今や、B 子さんはみんなからその存在を喜ばれ、職場にとってなくてはならない存在になっている、とのことであった」。

## 2. ストロークとは<sup>3)</sup>

交流分析で理解されている「ストローク」という用語は、**他人から与えられるあらゆる刺激**のことをいう。もらってうれしいストロークもあれば、もらって悲しいストロークもある。前者を肯定的ストローク、後者を否定的ストロークと呼ぶが、単にストロークという時は、肯定的ストロークを意味することが多い。

たとえば、笑顔で迎えられればそれが肯定的ストロークであり、怒った顔で迎えられればそれが否定的ストロークである。

以上のことに示されるように、ストロークには言葉によるストロークと、言葉によらないストロークがある。朝、「おはよう」と声をかけられればそれが言葉による肯定的ストロークであり、にっこり微笑まれるならば、それが言葉によらない肯定的ストロークである。

言葉によらないストロークには、表情や動作によるストロークと、身体に関するストロークがあり、そのそれぞれに肯定的ストロークと否定的ストロークがある。表 1 にストロークの分類を示した。

表 1 ストロークの種類

ストロークの種類	身体に関するもの	心理的なもの	言葉によるもの
肯定的ストローク	握手する なでる さする ハグする	ほほえむ うなづく 耳を傾ける 信頼する	ほめる はげます 慰める 語りかける あいさつする
否定的ストローク	たたく なぐる ける つねる	返事をしない にらむ あざ笑う 無視する 信用しない	しかる 非難する 責める 皮肉をいう 悪口をいう

出典：白井幸子(1983)『看護に活かす交流分析』

### 3. 各発達段階に必要なストローク<sup>4)</sup>

人間は赤ちゃん、幼児期、思春期、成人と各発達段階を通して成長していくのであるが、それぞれの発達段階において満たしてほしい「**基本的欲求**」を持っていると理解されている。

赤ちゃんの時には、「**接触欲求**」があり、母親に抱っこしてほしい、やさしくほおずりしてほしいなどの肉体的な接触欲求が基本的欲求である。

幼児期になり、言葉がしゃべれるようになると、自分の存在や語っていることを理解してほしいという「**承認欲求**」が基本的欲求となる。

青年期になると「**自我の確立への欲求**」が「**基本的欲求**」となる。自分を育ててくれた親から自律し、自己を確立する欲求が基本的欲求となるきがいを感じられるような仕方で**構造化**して過ごしたいという欲求である。

各発達段階において、基本的欲求を満たして成長していくことが健全な心身の発達に不可欠だと言われている。

### 4. ストロークが不足する社会

今日の社会に「ストローク」不足で生きている人々が多いと思われるが、その中で、とりわけストローク不足に陥りやすい人々の第一は、独居高齢者である。

独居高齢者の数は、高齢化社会の出現とともに急激に増加し、65才以上の高齢者の30%前後を占めると報道されているが<sup>5)</sup>、周囲との交流が減ると必然的にストロークをもらう機会も減っていく。

最近の新聞報道<sup>6)</sup>によれば、15才から65才の日本人の引きこもりの人数は146万人に達すると言われる。引きこもりが長くなるにつれて、社会や家族からストロークを受ける機会がどんどん減っていくことになる。

さらに、私たちは経済的苦境に直面すると、多くの場合、ストローク不足陥る。

参考資料に「**ストローク貯蓄の壺**」<sup>7)</sup>を示してある。私たちの心に他の人々から与えられたストロークを貯めておく壺がある（と想像してみてください）。この壺の7～8分目までストロークがたまっていると、少々意見が異なっている人とも、共存共栄してやっていけると考えられている。貯蓄の壺に半分くらいストロークが満たされていると、まあまあな気分で見られると理解される。壺にほんの僅かしかストロークがたまっていないときは「何をしてもつまらない」という気持ちになる。「ストローク」のやりとりがないところでは、人は孤独に陥り、幸せにな

るチャンスを奪われる<sup>8)</sup>。

人が幸せになる条件：他の人々との親密なストロークの交換にある。

## 5. 偏差値教育とストローク

教育熱心な日本は偏差値教育の国である。偏差値教育の本質は、子供たちを常に仲間と比較し、点数の良い子供に高い評価を与える教育である。したがって、個々の児童がどれほど頑張っても、良い評価を与えられる児童は常に上位の少数者であり、半数以上の児童は十分な評価を与えられることがなく、その結果ストローク不足の状態になりやすい。

偏差値に評価基準を置く教育はすでに行きづまっている。そのことは、日本の若者、学生の自己肯定感が、他国の若者に比べて著しく低いことにも示されている<sup>9)</sup> 偏差値教育の対極にあるのは、一人一人の児童・若者の本来持つ個性的な善きものを評価し、すべての児童に肯定的評価を与えることのできる教育である。

## 6. 助けを必要としている人々に必要なもの

助けを必要としている人々の多くは経済的に苦しく、その上、病弱であり、しばしば、支えてくれる家族がなく、職もなく、交流すべき仲間がいない。その結果、助けを必要としている人々の多くは、ストロークを得る機会が少なく、あるいは、ほとんどない。

したがって、これらの人々に対する援助は、物質的、経済的、法的、知的であると同時に精神的、心理的である必要がある。

精神的、心理的援助の中で用いられるひとつの技法にストロークという価値ある方法がある。ストロークの背景にあるのは、人は誰でも幸いを求めて生きている尊い存在であるという認識と、他人に対する暖かい共感である。

### 条件付きストロークと無条件のストローク<sup>10)</sup>

肯定的ストロークには条件付きのストロークと無条件のストロークがある。条件付きストロークとは、相手に何か長所があると認められるときに、その長所をほめることによるストロークである。一方、無条件のストロークは、相手の何らかの長所をほめるのではなく、相手の存在そのものを肯定し、認め、ほめるストロークである。

助けを必要とする人々の何をほめたらよいのか。多くの場合、それらの人々にはお金はない。病いを持つ人も多く、職もなく収入もない。頼りになる家族はいないことが多く、知識や技術も特になく、そのため社会に貢献することも困難である。

このように多くの場合、社会通念からすれば何らほめるべきところがないように思われる人々に、大きな長所があり、差し上げるべき肯定的ストロークがある、というのが存在に対するストロークである。すなわち、これらの人々は、人生の不利な条件を背負いながら、これまで必死に生きてきた。今も、与えられた状況の中で頑張っている。忍耐をもってそのように生きているその姿が尊敬に値し、ストロークに値すると考えられるのである。

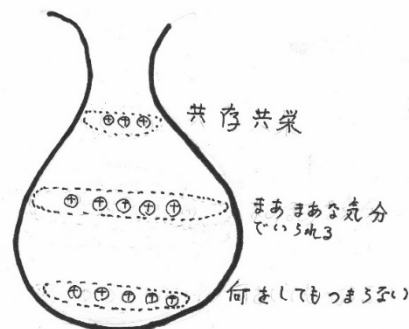
現在福祉の対象である人々は、たまたまそのような環境に生まれたのであり、逆に現在福祉の対象とはなっていない人々も、たまたま、幸運に、何とか自力で生きているのであり、両者は互いに、互いの存在を尊重すべき人間同士である<sup>11)</sup>。

## 7. 社会福祉とストローク

ストロークの特徴の一つは、肯定的ストロークを他人に与えても減ることがな



## ストローク貯蓄の壺



いという点である。それどころか、他人に肯定的ストロークを与えるときに、そのことが、ストロークを与える当人にとっての肯定的ストロークとなる。こうして、ストロークを与える人は、自らもストロークを豊かに与えられ、ストロークを出し惜しみする人からは、ストロークの貯えが失われてゆく<sup>8)</sup>。

他人にたくさんの肯定的ストロークを与えることのできる人のその才能は、天から与えられた恵みであるが、だれもがそう願うことによってストロークを与える人となることができる<sup>12)</sup>。

社会福祉に関わる仕事に就く人々は、常に、日々に多くの困難に直面していくであろうが、様々な困難を突破して、多くの助けを実現するために、ストロークという、この素晴らしい武器を持って歩んでくださることを願う。

### 引用・参考文献

- 1) バーン,E. (南 博訳) (1994) 人生ゲーム入門, 可出書房新社, pp13-17.
- 2) マタイによる福音書: 4 の 4.
- 3) 白井幸子 (1983) 看護にいかす交流分析, 医学書院, pp62.
- 4) バーン,E. (南 博訳) (1994) 各発達段階に必要なストローク.
- 5) 内閣府 (2021) 「令和 3 年の高齢社会白書」.
- 6) 朝日新聞、2023 年 4 月 1 日、朝刊.
- 7) ストローク貯蓄の壺
- 8) スタイナー・クロード (白井幸子監訳、盾エリナ訳) (2021) 交流分析の根底に流れるもの, 誠信書房, pp26-30.
- 9) 内閣府 (2014) 平成 26 年版「子供若者白書: 特集、今を生きる若者の意識、国際比較から見えてくるもの」.
- 10) スチュアート・イアン&ジョインズ・ヴァン (深沢道子 監訳) (1991) TA TODAY: 最新・交流分析入門, 実務教育出版.
- 11) バーン,E. (2018) 人生脚本のすべて, 星和書店.
- 12) 白井幸子 (2004) 臨床にいかす心理療法, 医学書院.

## 第3章

### スーパービジョン・トレーニング・プログラム担当者より

加藤 純

#### 1. はじめに

包括的臨床コンサルテーション・センターの研究会には、専門職としてのご自身の働きに悩んで参加している方が多い。たとえば、管理職やベテランになったり、新しい部署に異動したりして、これまでとは異なる働きが求められているが、自分はその働きを全うできているのだろうかというような悩みである。専門職としての成長過程での悩みと言って良いだろう。

そのような悩みへの答えを見つけるため研究会に参加して、文献を読み、仲間と一緒に討議して、各自の専門家としての歩みを可視化するために取り組んだ研究の成果をまとめたのが、毎年の研究報告書である。

包括的臨床コンサルテーション・センターのトレーニングプログラムは、「調査研究プログラム」「コンサルテーション・トレーニングプログラム」「スーパービジョン・トレーニングプログラム」によって構成されている。

ここでは、スーパービジョン・トレーニングプログラムを担当してきた立場から、参加者が著した研究報告書の背景や意義について考察してみたい。いわば翻訳書の巻末にある「訳者あとがき」のようなものである。訳者あとがきでは、著者の経歴や著作が記された文脈、著作の意義などについて、訳者自身の関心も交えて解説されていることが多い。ここでは、研究報告書が記された文脈としてスーパービジョン・トレーニング・プログラムの研究会の概要を解説してみたい。

#### 2. スーパービジョンを実施できているかという疑問

##### 1) 実践から生まれる疑問

包括的臨床コンサルテーション・センターのプログラムは、研修ではなく研究会として実施されている。参加者の悩みや疑問に講師が答えたり、解決に役立つ技法を伝授するのではない。参加者が自らの実践について研究するのである。悩みや疑問は日々の実践から生まれるが、答えも実践の中に隠されている。自分の実践を振り返り、解決につながるヒントを見つけられるような研究に参加者は取り組んでいる。

スーパービジョン・トレーニング・プログラムに参加する皆さんが共通に感じている課題は、もちろんスーパービジョンに関することである。

研究の第一の焦点は、自分がスーパービジョンを実施できているかという悩みや不安である。その疑問は実践から生まれる。

個人レベルや組織レベルの変化があると、スーパービジョンを取り巻く状況が変化して、スーパービジョンができているかという疑問が顕在化する。

個人レベルの変化は、昇進や異動、経験年数などにより初めてスーパービジョンを担う立場になったというような変化である。組織レベルでの変化としては、これまであった部署が再編されて新しい部署が作られるなどがあり、組織の変更による個人の立場が変化する。児童養護施設の小規模化・地域分散化も組織の変更の例と考えられる。中間的なレベルでの変化として、たとえば組織は変わらない中での職員構成の変化がある。ベテラン職員が異動や退職して、新人が就任するなど、スーパービジョンの中でこれまでと異なる職員層への対応が求められることになる。

##### 2) 実践に隠されている答え

自分がスーパービジョンを実施できているかという疑問は実践から生まれるが、疑問に対する答えも実践の中に隠されている。

答えを見つけるヒントを得るために、スーパービジョン・トレーニング・プログラムでは、テキストとして A. Kadushin and D. Harkness (2014). *Supervision in Social Work*. 5th edition. Columbia University Press を使っている。

カデューシンのテキストを読んでスーパービジョンとは何かを理解して、スーパービジョンの説明に該当する実践を自分もしていることが確かめられれば、スーパービジョンを実施できているかという疑問に対する一つの答えが得られるだろう。

### 3) 概念と実践を中間的な抽象度で結び付ける

スーパービジョンという概念と実践を結び付けられれば、スーパービジョンを実施していると認識できるが、実は概念と実践を直接結び付けることはできない。抽象的な概念と具体的出来事を結び付けるためには、概念を少し具体化して出来事に近付ける一方、出来事を少し抽象化して概念の方向に近付けて、概念と出来事の中間で結び付ける必要がある。

これは、スーパービジョンに限らず、雨・みぞれ・雪でも、それぞれの名称に該当する物の特徴を抽出して、目の前で降っている物にその特徴が備わっているかを判断して、雨と呼んだり、雪と呼んだり、みぞれと呼んだりする。児童虐待や依存症、愛着スタイル、等々、支援の場で使われている概念も、具体的な現象に直接結び付けられるわけではない。たとえば児童虐待という概念に該当する現象の特徴を示し、目の前で起きている出来事にその特徴が備わっているかを判断することにより、概念と出来事を結び付けられるようになる。

スーパービジョンという概念も少し具体化して、スーパービジョンを他の実践とは異なるスーパービジョンと呼べる実践として成り立たせる特徴を示す必要がある。一方、実践を少し抽象化してスーパービジョンと呼べる特徴を見つける必要がある。そして、スーパービジョンという概念を成り立たせる特徴と実践から抽出した特徴とが合っているかを判断することで、具体的実践をスーパービジョンという概念に結び付けられる。

### 4) 概念を細分化すると疑問も細分化できる

スーパービジョンを実施できているかという疑問に答えるために、もう一つ役立つのは疑問を細分化することである。疑問を細分化する方法の一つは概念を細分化することである。

スーパービジョンが実施できているかという大きな疑問よりも、管理的スーパービジョンができていないかという疑問に細分化した方が答えに向かう道筋が見えやすくなる。

カデューシンは、スーパービジョンを機能によって管理的スーパービジョン、教育的スーパービジョン、支持的スーパービジョンの3つに分けている。実際にカデューシンのテキストを読むと、こんなことまでスーパービジョンに含まれるのだと、その多様性に驚かされる。

スーパービジョンを機能によって三つに分けることは、スーパービジョンという概念を細分化することであって、概念を具体化することとは異なる。スーパービジョンを管理・教育・支持的スーパービジョンに細分化しても、管理機能も教育機能も支持機能も抽象度は下がり、具体的な出来事と結び付ける難しさは変わらない。それぞれの機能を成り立たせる特徴を理解する必要がある。そして、自分の実践例にも、その特徴が備わっているかを検討する。たとえばカデューシンが挙げる管理的スーパービジョンの特徴を理解して、その特徴が自分の実践例にも備わっているかを判断するのである。

研究会参加者は、これまでスーパービジョンだと思わずに担っていた業務が、たとえばカデューシンのテキストに記されている管理的スーパービジョンの説明に沿っていることが分かったと、自分は管理的スーパービジョンを実施していたのだと認識できる。

自分がスーパービジョンを実施していたと認識できると、意識的に実施できるようになる。中越 (2020) は、カデューシンが管理的スーパービジョンとして示す 12 種類の業務を実施していると意識する機会が増え、さらには意識的に管理的スーパービジョンを活用したことを報告している。

## 5) 参加者の研究例

松尾 (2019) は、実習生の資質に合わせたスーパービジョンが実施できているか疑問を持った。そこで音楽療法のセッション後のスーパーバイザーとスーパーバイジーのやり取りを具体的に描写して、そのやり取りを管理・教育・支持の機能により説明を試みた結果、三つの機能が指針として有効であることを示した。

## 3. どのようなスーパービジョンを実施しているかという疑問

### 1) 実践を具体的に描写する

参加者に共通するもう一つの疑問は「自分はどのようなスーパービジョンを実施しているか」という疑問である。最初に示した「自分はスーパービジョンを実施できているか」という疑問に答えるには、スーパービジョンという概念に結びつけるために実践を抽象化してスーパービジョンと呼べる要素を示す必要があるのに対し、「どのようなスーパービジョンを実施しているか」という疑問に答えるためには、実践を具体的に思い浮かべて、どのような場面で誰に何をしているのか詳細に描写する必要がある。

一つ目の問いに答えるには実践を抽象化し、二つ目の問いには実践を具体化する必要がある、二つの疑問は似ているようだが、答えを見つけるための方法は大きく異なる。

### 2) 役割として描写する

誰に対して何をしているかスーパービジョンの中身を具体的に描写するためには「役割」という概念が役に立つ。

役割とは、ある社会的立場を占める人が他者との交流のある状況において演じるパターン化された行動のことである。

この定義で重要な要素は4つある。「社会的立場」「他者との交流」「パターン化」「行動」である。役割は、他者に対する言葉や行動であり、具体的に観察可能である。パターン化された行動というのは、一度だけの行動ではなく同じような行動が繰り返されている時に役割と呼べるという意味である。

たとえば、コーチという立場を占める人が、選手との交流のある状況において、練習メニューを決め技術指導を繰り返し実行している時、コーチの観察可能な行動を役割という概念で説明できる。

スーパービジョンに当てはめると、主任や部門長などの立場を占める人が、職員との交流のある状況において、仕事の分担や進め方を指示したり仕事に必要な情報を伝えたり技術を指導したりしている時、この観察可能な行動を役割という概念で説明できる。

このように「どのようなスーパービジョンを実施しているか」という問いに答えるために役割という概念を使うと、第一に提供する人の社会的立場、第二に対象となる他者が誰か、第三に繰り返しの頻度やパターン、第四に観察可能な行動、という四つの軸で検討すると良いことが分かる。

## 4. 周囲がスーパービジョンを認識しているかという疑問

### 1) スーパービジョンだと認識してもらえていない感覚

参加者が感じているもう一つの悩みは、相手の職員や組織から自分の実践をスーパービジョンとして認識してもらえていないことである。たとえば、「自分は管理的スーパービジョンという意識で実践しても、職員はスーパービジョンを受けていると認識していない」(中越, 2020)とか、「現場でスーパービジョンという言葉が使われていない」(古寺, 2020)といった状況である。

## 2) 概念を細分化することにより疑問を細分化する

スーパービジョンの概念を細分化すると、自分がスーパービジョンを実施できているかという疑問を細分化できたが、同様にスーパービジョンの概念を細分化すると、周囲がスーパービジョンを認識してくれているかという疑問も細分化できる。たとえば、スーパービジョンを三つの機能に細分化すれば、周囲が自分の実践をスーパービジョンと認識しているかという大きな疑問ではなく、管理的スーパービジョンを認識してくれているか等と疑問を細分化できる。

## 3) 概念を具体化することにより疑問を具体化する

自分がスーパービジョンを実施していると言うためには、自分の実践をスーパービジョンという概念に結び付ける必要があるのと同様に、自分の実践を周囲からスーパービジョンとして認識してもらうためには、自分の実践をスーパービジョンという概念に結び付けてもらう必要がある。たとえば、後輩職員に「今の利用者との関わりはこの点が良かったですね」と伝えた時に、この発言を後輩職員が支持的スーパービジョンという概念に結び付けられれば、支持的スーパービジョンを受けたと認識してもらえたことになる。

しかし、自分の実践をスーパービジョンという概念に直接結びつけるのが難しいのと同様、後輩職員にとっても自分が受けた具体的な言葉掛けや働きかけをスーパービジョンという概念に直接結び付けることは難しい。自分が受けた言葉掛けや働きかけを支持的スーパービジョンという概念に結び付けるためには、支持的スーパービジョンという概念を少し具体化する必要がある。たとえば、支持的スーパービジョンの中身を「職員の業務遂行を支持すること」「職員の職務をそれで良しと認めること」として具体性を持たせると、「今の利用者との関わりはこの点が良かったですね」という言葉掛けと結び付けやすくなる。

このように概念を具体化することにより、疑問が具体化される。後輩職員がスーパービジョンとして認識しているかどうかという疑問は、概念を具体化することにより「自分の業務遂行を支持された」と認識しているかどうかなど具体的な疑問に変換できる。

## 4) 参加者の研究例

参加者の研究を改めて拝読したところ、スーパービジョンを周囲に認識してもらえているかということよりも、スーパーバイザーがスーパービジョンの機能を意識することにより、誰にどのようなスーパービジョンを実施したら良いか計画できることを示す段階に至っていた。

古旗（2019）は、サービス責任者とヘルパーの実施頻度に関する認識について質問紙調査を実施した。実施頻度に関する認識はサービス責任者とヘルパーとでおよそ一致した。支持的機能の頻度が高かったが、専門家としての成長を促す体制が弱いことが示唆されるとした。

充実を求める項目として、ヘルパーは管理機能よりも教育・支持機能を求めていることから、管理機能の必要性を理解してもらう必要があると論じている。さらにヘルパーが充実を求める項目にはバラツキがあり、回答者の成長段階によって求めるものが異なる可能性があると考えられている。

辻本（2020）は、園芸療法の職能団体でのスーパービジョンについて、実践者の立場によって管理・教育・支持の機能に該当する範囲を整理し、コンサルテーションの要素が強い場合があることを示した。会員個人の専門職としての自律性を高める必要性と、職能団体としての専門性を高める必要性を指摘している。

古寺（2020）は、ベテラン職員に教育的スーパービジョンと管理的スーパービジョンをどのように実施したら良いかを検討して、スーパーバイザーが培ってきた専門性を尊重し、専門性を脅かされる不安に配慮することと、部下の職務が組織内で承認されるように組織に働き掛けることが重要だと論じている。



## 5. スーパービジョンの効果に関する疑問

さて、最後にもう一つ、自分の実践が現場に役に立っているのだろうかと悩んでいる参加者もいる。この疑問に答えるためには、自分の実践が現場にもたらしている効果を明らかにすることが役に立つだろう。

### 1) ロジックモデルを使った分析

支援の効果を分析する方法の一つとして、プログラム評価で使われるロジックモデルがある。プログラム評価でいう「プログラム」とは「何らかの問題解決や目標達成を目的に行われる実践的介入」のことを指す。ロジックモデルは、プログラム（実践的介入）がどのように作用すると考えるかを示すもので、プログラムで行われる活動と期待される結果とのつながりを文章や図によって表現する。ロジックモデルは、いくつかの手法が提唱されているが、一般的に、プログラム（実践的介入）から直接産み出される成果物（アウトプット）と、参加者の知識や行動、スキルの獲得などの成果（アウトカム）と、参加者を越えた家族や地域社会に間接的に広がる波及効果（インパクト）に分けて、記述する。

スーパービジョンに当てはめると、スーパービジョンの実施状況・実施内容がアウトプット、スーパーバイザーの知識や行動、スキルの獲得などがアウトカム、その結果、利用者や組織、さらには社会に及ぶ影響がインパクトに位置づけられる。

スーパービジョン・トレーニング・プログラムでは、参加者のニーズに応じてロジックモデルを紹介することがある。参加者自身の実践の成果をロジックモデルを使って簡易的にイメージして研究会で討議することもある。さらには、年間を通した研究として、ロジックモデルを使ってご自身の実践がスーパーバイザーや組織に及ぼす影響を緻密に分析する参加者もいた（土山、2022）。

### 2) 参加者の研究

実践の成果を研究成果として示す方法はロジックモデルに限らない。参加者が、様々な創意工夫でご自身の実践の成果を示す研究に取り組んでいる。

たとえば、スーパービジョンの効果が出なかった場合にも視野を広げ、また効果があった・無かったことの理由も含めて研究テーマとした研究もある。

井上（2020）は、スーパーバイザーの職業的社会化をテーマに職場での研修会に参加した職員にインタビューした。井上はロジックモデルを用いていないが、まず、職員が専門職特有の用語を学ぶことを直接的な成果として示している。個人への効果として、専門用語が職員の内面から生じる言葉が結びついた時に理解が深まり、自分の変化・成長として自覚できること、さらに実感のある言葉は支援の根拠となり、自分の実践を評価・専門職としての自律性を獲得できることを明らかにした。また、組織への効果としては、多様な背景を持つ職員が職業特有の用語を学ぶことにより、職員同士が価値・視点を共有し、他者と協調するようになり、組織レベルの成長が見られたことを示している。

西條（2020）は、異なる四箇所での音楽療法実践で、誰がどのようなスーパービジョン機能を担っているかを記述して、重視される機能や担い手には差異があるが、スーパービジョンやコンサルテーションの機能が合ったことを示している。その上で、職場にスーパービジョンの機能があると理解すると、専門職として大切にされていると確認できるというスーパーバイザーへの効果と、業務が潤滑になり利用者に必要な支援を届けられるという利用者への波及効果があることを考察している。

赤松（2019）は、教育・支持・管理機能の意義を整理して、三つの機能が互いに影響して効果を出す論じた上で、管理機能だけでスーパーバイザーが関わろうとすると、スーパーバイザーは反発することがあるので、教育機能・支持機能を合わせ持つスーパービジョンの体制を整える必要があることを示している。

市川（2022）は、三つのスーパービジョン事例について、三事例×五項目の分析表を作成

した。五項目は「スーパーバイザーが表出したニーズ」「スーパーバイザーのアセスメント」「スーパーバイザーが設定した目標」「スーパーバイザーが行ったこと」「スーパーバイザーの変化」である。これは実践を詳細に記述すると共に、成果との関連を示す優れた工夫である。

## 6. 研究会のもう一つの成果

ここまで、スーパービジョン・トレーニングプログラムに参加した皆さんが、どのような疑問を持ち、どのような点に着目して研究してきたか解説してきた。印刷された成果としては参加者個人の研究が残されているが、もう一つ、大切な成果は参加者同士の共同作業である。

参加者同士の学び合いがいかに貴重だったか、中越さん（2020）が生き活きと語ってくださっている。カドゥーシンのテキストを事前にまとめながら読んで研究会に臨み積極的能動的に参加できたというご自身の体験と共に、他の参加者が文献を読み込み咀嚼していることが刺激になったと述べている。また、他の参加者が悩みを抱えながら仕事していると語るのを聴き、「自分だけではない」という安心感と励ましが得られたと言う。

報告書での文章にはなっていないが、研究会のオンラインの画面越しに、ある参加者から別の参加者に「いつも私の仕事をよく理解して、的確なコメントをくださり、ありがとうございます」と言った言葉が交わされることもある。

研修会でなく「研究」会であることにも意味があるが、「研究」ではなく、研究「会」であることにも意味があることを参加者から教えて頂いていることに感謝している。

## 第4章

### 対人援助実践を紐解く実践： 対人援助者はどのように実践を紐解こうとしているのか

山口 麻衣

#### はじめに：対人援助実践と研究方法の複雑化・多様化の交絡

対人援助者は困りごとを抱えたクライアントに向き合い、生活を支えるために専門性を発揮しようと日々努力し、省察を重ねながら対人援助実践を行っている。特に長期にわたるコロナ禍や災害などの社会経済情勢の変化が、要援助者か援助者かにかかわらず、個々人の生活そのものに影響し、誰もが先の見えない不安や生きづらさを感じるようになった。世界中で喪失感が蔓延し、希望を見出しにくい現実があることが、対人援助者の援助の困難さを増幅している状況にあるといえるだろう。福山(2018)は、人材不足、社会資源の拡張・多様化、プロフェッショナルの限界への対峙、専門領域間の境界線のあいまい化と協働関係のあり方との関係などの社会的背景が、保健・医療・福祉領域の現場やスーパービジョン研修活動に影響を与えていることを指摘している。コロナ禍以前もマクロ・メゾレベルの社会情勢の変化や不透明な状況が対人援助実践に様々な形で影響しているが、コロナ禍以降の近年の状況は、パンデミックの長期化、戦争被害、温暖化、AIなどのテクノロジーの発展と普及など、想定外の社会環境の激変が生じている。

対人援助者はこれまでの前提や日常が通用しない状況のなかで、自らの実践を振り返り、紐解こうとし、スーパービジョン体制のなかでスーパーバイザーとしての効果的な役割を模索していると捉えることができる。日常の揺らぎの中でどのように対人援助実践はなされているのだろうか。社会福祉領域の研究者・教育者としての立場から、対人援助の実践者が実践の何に焦点をあて、どのような方法で言語化し、発信しようとしているのかに着目してみたい。

対人援助実践だけではなく、その実践を言語化する手段である研究方法も複雑化・多様化していることへの気づきが実践を紐解くうえで必要ではないかと思われる。対人援助実践の揺らぎのなかでよい方向へ導きたいと考える対人援助者は、様々な形式で実践研究や実践評価をし、問いに対する答えを模索する。学びながら研究を始めれば、明確な答えがでるのではないかと期待して学びや研究を行おうとするが、問いを明確にすることも、適切な方法をみつけ具体的に研究を実施することも容易ではない。

方法論に関する知識不足を認識する場合があるが、様々な方法について理解を深めるのは困難を伴う。複雑化・多様化する実践と研究の方法の状況を知れば知るほど、全容もつかめず、どうアプローチしていいのか悩み、先が見えない深い闇に入ってしまうように感じるかもしれない。あるいは、自分の知っている知識やアプローチに疑問を感じることなく、複雑化・多様化する方法について無頓着になっている場合もあるだろう。

実践の曖昧さや揺らぎに対する認識に比較して、方法の複雑さや多様性は見えにくく、方法論に関する議論や関心も限られ、方法に関する揺らぎへの気づきはあまりないのが現状である。実践者が実践の困難を学びながら模索する際に、実践への対応の困難とそれを可視化するための方法の活用の困難の二つの困難が見えにくい形で交絡していると捉えることができるだろう。

## 1. 複雑化・多様化する研究方法をめぐる論点

対人援助者がどのように実践を紐解こうとしているのかを知るために、まず、これまで十分に体系だった議論がなされていないなかで複雑化・多様化している研究方法に関する論点を整理してみたい。対人援助実践者が実践を紐解くための方法を探る際には、1)EBP と NBP のせめぎ合い、2)実践研究への関心の高まりと実践-調査者による PBR の重要性、3)研究デザインと研究方法の多様化と複雑化、4)調査・研究や評価のコンピテンスの向上にむけた対人援助者の教育の動向の4つの複雑化・多様化する研究方法をめぐる論点を意識すべきであろう。それぞれについて以下に示す。

### 1)根拠に基づく実践(EBP)とナラティブに基づく実践(NBP)のせめぎ合い

対人援助領域のなかでとくにソーシャルワークはアートなのか科学なのかの議論がこれまでも多くなされてきた。近年では、根拠に基づく実践(EBP=Evidence-based practice)の必要性が論じられ、「エビデンス」が重視される。例えば、介護保険制度においては科学的介護の取組みにより、データの収集し、効果をエビデンスとして把握する実践が推進されている。その一方で、EBPの限界や批判とともに、ナラティブに基づく実践(NBP=Narrative-based practice)の大切さも論じられている。効果を数値化しにくい対人援助実践においては、何がエビデンスなのか、どのようにエビデンスを把握できるのか、把握しているのかなどの確認が求められる。

EBPかNBPかの二者択一の議論ではなく、研究者のスタンスや立ち位置によって、せめぎ合いがあり、共存している状態と捉えることができる。量的調査と質的調査の方法論に関する共存状態とも呼応している面もあるが、両者のメリット・デメリットを理解して、適切に活用していくことが望ましい。対人援助者が実践研究を行う際にも、「エビデンス」と「ナラティブ」のどちらを重視したアプローチにより実践を可視化したらいいのか、実践者の価値観や立ち位置が問われているのかもしれない。

### 2)実践研究への関心の高まりと実践-調査者による実践に基づく調査の重要性

研究と実践の関連は、様々な捉え方があり簡単に説明できるものではないが、両者の関連に関する議論は広がりを見せ、実践研究への関心が高まっている。学術的研究だけでなく実践研究、プログラム評価や実践評価研究、アクション・リサーチや参加型調査など実践に密着した研究の重要性が強調されるようになってきた。実践研究を実施する上でのスキルや留意点は学術的研究の場合とは異なる面もある。例えば、調査プロジェクトに外部の調査者と実践者がいる場合は、両者の関係は協働的で対等な関係であるべきと論じられている。また、参加型調査では、当事者やクライアントなどの援助対象者を研究対象としてではなく参加者として捉え、協力を得て調査することの必要性や配慮すべき点、研究方法の変革の必要性が論じられている。

このような研究と実践のつながりへの関心の高まりのなかで、特に着目すべき点は、対人援助実践者自らが実践を評価・研究することの重要性が近年ますます指摘されるようになってきた点である。EBPのアプローチへの批判から、実践に

基づく調査(Practice-based research=PBR)の必要性が論じられている。PBR とは、実践-調査者 (practitioner-researcher) が 調査を実施する、実践者による実践のための調査(Dodd & Epstein 2012)のことである。ここでは実践者の調査研究における立場に着目し、実践者自身が調査する場合に実践-調査者として捉えている。すなわち、外部の調査者が主体となって調査するのではなく、実践者自身が実践-調査者となり、主体的に調査研究を実施することが求められている。

EBP と PBR を比較すると、EBP は演繹的に既存研究を重視し、ランダム化比較試験(RCT=randomized controlled trials)を最高の方法と位置付け、量的研究を標準とし、総括的(summative)評価研究を重視し、研究者による調査が軸となり実施される。

一方、PBR は帰納的に実践の知恵を重視し、RCT には否定的な立場にたち、質的研究・量的研究多様な方法を活用し、形成的(formative)評価研究を重視し、実践者による実践が軸となり実施される。また、根底となる考え方の違いとして、EBP はエビデンスを階層的(Hierarchy of evidence)に捉え、ランダム化比較試験(RCT)、準実験調査、相関研究、質的研究、事例研究の序列があるが、PBR はエビデンスを車輪(Wheel of evidence)のように捉え、RCT、準実験調査、相関研究、質的研究、事例研究を同等に捉えている (Dodd & Epstein 2012)。PBR の強みとしては、柔軟性、比較可能性、費用、適応性、実践者への利益、クライアントへの利益があることであり、PBR の限界としては、ゴールドスタンダードではないこと、一般化しにくいこと、助成金を得にくいこと、出版(論文文化)しにくいことがあげられている(Dodd & Epstein 2012)。

Dodd & Epstein (2012) はさらに、PBR を研究の目的別に、探索的研究、記述的研究(ニーズ研究・モニタリング研究・アウトカム研究を含む)、説明的研究の3つに分類している。それぞれに、探索の問い、記述の問い、説明の問いがある。実践の中でのぼんやりとした問題関心から、関心のある問題を特定(Problem formation)し、この問題の特定がその後の研究デザイン、データ収集方法、対象者選定のすべてに関連してくる (Dodd & Epstein 2012)。探索したい問いを探ること、データを得ようとする前に既存の活用可能なデータを活用すること、調査を重視するよりも実践との統合を優先することという PBR の原則が示されている。

以上のように、Dodd & Epstein(2012)は実践者がどのように調査に取り組むか、EBP を重視した研究者主導の調査との違いを明確にして具体的に示している。実際には、EBR にも PBR にも解釈に幅があり、単純に差異だけを論じるだけでは見えにくい部分があり、慎重な検討が必要だろう。日本では対人援助領域での実践研究の重要性は従来から示されていたものの、実践者が具体的にどのように調査を捉えて調査したらいいのかについてはほとんど議論がなかった。また、実践者による事例研究や報告は学術的な調査研究として位置付けにくく、実践調査の位置づけが曖昧で、その意義などについての議論が乏しかった。

このような状況で、Dodd & Epstein(2012)の PBR と EBP の対比や PBR の進め方の説明は、日本の対人援助者がこれから実践 - 調査として取り組むうえで多くの示唆を与えるものであるといえる。我が国で対人援助者が調査を試みる際にも、実践 - 調査者として実践に基づく調査を行うことの意義を自覚し、PBR の強みと限界を理解して調査研究を行うべきであろう。

### 3)研究デザインと研究方法の多様化と複雑化

対人援助者が PBR を実施しようする場合、調査研究の専門家ではない実践者だからどんな研究デザインでも許容されるというわけではない。研究の問いを明らかにするために、研究デザインとしてどのようなものがあり得るかを理解し、適切なデザインについて慎重に検討することが必要となる。

まず、仮説検証的アプローチと仮説生成的アプローチ、演繹的アプローチと帰納的アプローチなど、とるべきアプローチを定めることが最初のステップとなる。量的研究は仮説検証的アプローチや演繹的アプローチが多く、質的研究は仮説生成的アプローチや帰納的アプローチが多いが、質的調査で仮説検証的アプローチのこともある。また、仮説検証や仮説生成的アプローチ以外にも、グランデッドセオリーでみられるような、アブダクション(仮説的推論)のアプローチにより、帰納的推論で仮説生成ののちにそのモデルの検証も試みるアプローチもある(シャーマズ 2014=2020)。前述した EBP と NBP のせめぎ合いとも関連するが、エビデンスを追求したいのか、ナラティブを大事にしたいのかなど、自分の知りたいことへの向き合い方を確認して、それにあった研究デザインを選ぶ。

また、研究デザインの検討の際には、研究方法も多様化していることを認識することが大切である。量的調査の方法は多変量解析のなかでも高度な手法も含め多岐にわたり、質的調査も様々なアプローチがある(Flick 2007=2011;サトウ・春日・神崎 2019 など)。研究デザインを定めて研究する際に、量的・質的研究方法のすべてに精通することは難しいが、必要に応じ研究に関するコンサルテーションや助言を受けて自分の問いにあった方法を知るうえで、基礎的な学びを深めることは大事だろう。

### 4)調査・研究や評価のコンピテンスの向上にむけた対人援助者の教育の動向

実践調査者による PBR の重要性が高まっても、対人援助者が自信をもって実践研究を行うには、対人援助者の学びの機会と研究を進める際の支援が欠かせない。対人援助専門職の養成や継続研修における教育においても、調査や評価のコンピテンシーの向上にむけた教育プログラムの変革や教育実践がなされている。

米国では、ソーシャルワーカーが調査や評価を活用し、その結果を実践に活用できる能力を高める教育をすることが明確に示されているのである。具体的には、米国ソーシャルワーク教育評議会(CSWE)が示したソーシャルワーカーに必要な9つのコンピテンシー(CSWE 2022)中に、「実践に裏付けられた調査(Practice-Informed Research)と調査に裏付けられた実践(Research-Informed Practice)に参与する(engage)」ことや、「個人、家族、グループ、組織、コミュニティに関する評価を行う」ことの2つが含まれている点は注目に値する。これらのコンピテンシーが必要なのは、これからソーシャルワーカーになろうとする人材のみならず、現場で日々実践している対人援助者も同様である。

調査に関するコンピテンシーとしては、調査法に関する知識をもち、既存の質的・量的実証研究のバイアスに気づき、学術的な批判ができ、調査結果をソーシャルワークの発展に活用していく能力をもつことが示されている(CSWE 2022)。知識が必要なことはわかっても、既存の質的・量的実証研究のバイアスに気づき、学術的な批判ができるコンピテンシーが必要なことは気づきにくい、大事な点である。特に、量的研究に苦手意識があると、数字は全て正しいエビデンスだと勝手に

鵜呑みしてしまう場合がある。バイアスや研究の限界に気づき、批判的考察できるコンピテンシが求められる。

評価に関するコンピテンシーに関しては、多様な個人・家族・グループ・組織・コミュニティに対するソーシャルワーク実践のダイナミックで相互作用のあるプロセスの継続的な要素を理解し、成果や実践の効果を評価する理論や方法を知り、適切な方法を選び、批判的に分析し、結果を実践の改善に活用するコンピテンシーを高めることを掲げている(CSWE 2022)。適切な方法を選び批判的に分析することの必要性が明確に示されている点がとりわけ参考になる。

日本のソーシャルワーク領域での教育に関する動向をみると、日本においても実践力を高めるための教育変革がなされているのがわかる。例えば、新たなソーシャルワーカー・社会福祉士の倫理綱領が2020年6月に、社会福祉士の行動規範が2021年3月に採択された。また、2020年に提示された社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験新カリキュラムにおいて、社会福祉調査は社会福祉士と精神保健福祉士の共通科目となった。

社会福祉調査のカリキュラム内容例をみると、社会福祉調査の目的として、ソーシャルワーク実践の可視化やソーシャルワーク実践の理論化が教育内容の中で例示された。さらに、「ソーシャルワークにおける評価の意義と方法」が、学ぶべき6つの柱の一つとして提示され、ミクロ・メゾ・マクロレベルにおける実践の評価や、根拠に基づく実践(EBP)とナラティブに基づく実践(NBP)が教育内容例として示された。ソーシャルワークにおける評価対象には実践・プログラム・政策があり、構造・過程(プロセス)・結果(アウトカム)・影響(インパクト)が評価されること、評価方法としては、シングル・システム・デザイン、実験計画法、質的な評価法があることが提示された。ソーシャルワーク実践の可視化や理論化にむけて、ソーシャルワーカー自身が調査に関する能力を有し、実践評価にも質的量的手法を活用して行うことがめざされているといえる。

また、認定社会福祉士や認定上級社会福祉士の研修においても、実践研究や評価の学びに関する研修が含まれており、特に、認定上級社会福祉士には実践の科学化を行うことのできる能力を有することが認定要件に含まれている。実践の科学化やEBPが重視されており、NBRに関しては十分に言及されていない面もあるが、スーパービジョンが必須となっており、スーパービジョンを受け実践を振り返る力を高めるのと同時に、実践の評価や実践研究をする力を高めることも期待されているといえる。

日本と米国のソーシャルワーク教育において、調査や評価が大事な要素として示されている点は共通していた。米国においては、さらに実践の中で調査を活用することや実践評価で適切な調査方法を選び、既存の調査や文献に対しても批判的に分析し、活用できることが明記されていた。日本においても、対人援助職の教育や専門職研修制度の変革が図られ、対人援助職であるソーシャルワーカー自らが実践研究を行う能力をもつことが求められるようになってきた。対人援助職としての専門性の向上にむけて、ソーシャルワーク分野での教育の変革期であるが、実践と調査研究をつなげていく試みや適切な調査方法の理解、批判的分析能力などの重要性を伝えていく教育研修の確立が求められる。

## 2. 対人援助実践の可視化—実践報告から傾向を知る

### 1)対人援助実践を可視化する力量を高める必要性

これまでみてきたように、対人援助実践と研究方法が複雑化・多様化し、相互に交絡しているという状況があり、グローバルな変化と国内でのソーシャルワークの専門性の向上のために、実践と調査やエビデンスの捉え方など様々な変革が期待され、その教育の変革も進められている。変革の意図を明確に理解して行動していくために、多くの対人援助者は、何が今、求められているのか、学び直し、実践を見つめ直すことが必要になってきているといえる。また、スーパーバイザーとしてスーパーバイザーを育成し、ソーシャルワークなどの対人援助の専門性を高めるためにも、スーパーバイザー自身が実践を研究できる能力を有することが期待されていることが示されている。研究方法が深化し、実践者への研究参画の期待も高まりながら発展してきているため、実践者も研修などでリスクリングして学びを深め、対人援助実践を可視化する力量を高めることが必要だろう。

### 2)本研究の目的

対人援助者が日常の揺らぎのなかで援助の質を高め、自らの専門的な援助に対する揺らぎに気づき、自信を取り戻すうえでも、研修プログラムなどの自己研鑽のなかでの学びの言語化の状況を把握することは、実践を豊かにするための学びの体得のプロセスを知るうえで重要である。対人援助者による報告は実践研究を進める際の言語化プロセスでもある。このような問題関心から、本稿では、対人援助者は対人援助実践をどのように紐解こうとしているのか、研修に参加した対人援助者による実践研究や実践評価に関する報告の内容から探ることを目的とする。

### 3)本研究の方法

研究の方法は、報告書の報告内容に関する質的内容分析である。ルーテル学院大学大学院附属の包括的臨床死生学研究所・包括的臨床コンサルテーションセンターの2009年度から2021年度までの年次報告会で発表された全272報告をリスト化したデータベースに、各報告の問い(リサーチクエスション)、方法、明らかになったことを追加して、その内容の傾向や特徴を探索的に分析した。包括的臨床死生学研究所から包括的臨床コンサルテーションセンターへと臨床死生学の人間理解を基盤に組織体制が発展してきた経緯から、臨床死生学領域とスーパービジョン／コンサルテーション領域の報告が重なりつつも時間の経過とともにそれぞれの力点を持ちながら積み重ねられてきた。これらの報告は対人援助者である各研究員が1年間のセンターでの研修での学びをもとに年度末の報告会で発表したものであり、論文そのものではないものの、実践・調査者によるPBR(実践に基づく調査)に関する報告としてとらえることができる。これらの報告は、論文化される前の実践研究のプロセスを知るうえで貴重な資料といえる。

研究テーマから臨床死生学領域とスーパービジョン／コンサルテーション領域に分け、Dodd & Epstein(2012)のPBRの目的別の3分類(探索的研究、記述的研究、説明的研究)を参考に、問いの特定と研究デザインのつながりを確認し、対人援助実践を紐解く実践がどのようになされているかを分析・考察した。具体的には、エクセルシートを活用し、2領域・年代別にリサーチクエスション、分析方法、



主な結果を示し、リサーチクエスションと方法のつながりから見えてきたものを探索的にカテゴリー化して浮かび上がらせて分類する作業を実施した。各報告には複数のカテゴリーに該当しうるものもあったが、どのように紐解こうとしているのかに焦点をあてて、象徴的な報告を例として表示した。なお、研究倫理の対応として、報告書の研究目的での活用について、了解を得たうえで活用した。

### 3. 「対人援助実践を紐解く実践」の分析結果

#### 1)臨床死生学領域での研究実践を紐解く

臨床死生学領域での研究は、探索的な研究や記述的研究が多く含まれていた。実践現場はそれぞれ異なるものの、実践に根付いた、実践しているからこそ明確にしたい問いをリサーチクエスションにしていた。実践者として日々遭遇する体験での戸惑い、気づき、テーマは多岐にわたるが、それぞれが自分のテーマの焦点が絞られてリサーチクエスションとして明確化していた。リサーチクエスションと方法の関連から、「手探りの中で探索する」、「文献から鍵概念に出会う」、「確かめて記述する」に3分類し、代表的な報告を具体例として表1に示した。

##### 「手探りの中で探索する」

ターミナルケアの実践において、命の尊厳、人間の尊厳を守る実践は奥深く、マニュアル通りの実践にはならず、それぞれが喪失のプロセスに絶えず直面する実践である。なにができたのか、何をしたらよかったのかを自問自答するなかで、自分の実践の問いはみえにくい。そのような手探りの中で探索するプロセスとして研究が位置付けられていることも多い。今回の臨床死生学領域での報告の分析では、施設や在宅での看取りが増えるなかでの実践の戸惑いを、複数の報告者が、手探りの方法として、文献研究、実践分析、半構造化インタビューを丁寧に行い、得た気づきから実践を新たな視点でとらえていた。

たとえば、鷹野(2010)は、利用者の急死に直面する介護職員に対するグリーフワークや精神的なサポートの必要性は何かを明らかにすべく、文献研究を報告していた。三澤(弥)(2010・2011)は、在宅ターミナルケアにおける介護支援専門員の役割は何か、実践事例に関する介護支援専門員の行動内容の分析を行い、ターミナル期において短期に支援の必要性を判断する中で、人の尊厳の保持が重要であることを明らかにしていた。小高(2014)は文献レビューと教育実践の分析から、広い意味での「生と死の教育」のなかでの「デス・エデュケーション」の位置と特徴をまとめた。その他、子供の死生学教育に関する文献研究による報告(横田 2012)や家族のスピリチュアリティという側面からの重症心身障害児の生命(いのち)に関する考察(網谷 2010・2011)、ホスピス・緩和ケアにおける「患者の気持ちに寄り添う」ことに関する実践記録分析(大川 2014)などもあった。半構造化インタビューの方法を用いた報告では在宅看取りケアに取り組むケアマネジャーの困難と戸惑い(下ノ本 2010・2011)や、自宅での湯灌体験で家族が抱いた気持ち(野田 2013)の報告などがあった。

看取りや死生学という共通テーマでも実践現場や関心により、それぞれの実践から浮かぶ問いが焦点化され、手探りの中でも適した方法を用いながら探求した結果の報告がなされていることがうかがえた。人間と命の尊厳の保持を基盤しながら、包括的に生と死をみつめる探索的手法は、エビデンスとしてはわかりにくい臨床死生学研究領域には適したアプローチといえる。

### 「文献から鍵概念に出会う」

今回の報告の分析においても、用いられた鍵概念は様々であるが、自分にあった概念に出会うことで漠然とした問いが具体的なリサーチクエスションとなり、言語化が促されていることがうかがえた。

例えば、石井(2011・2012)は、「抛り所」を鍵概念として、「広島から福島に至る問い」を副題として永続的な喪失のなかでの抛り所とは何か、何を持って抛り所とするかを、「抛り所」という概念が喪失のなかで生きる意味に関する本質的な考察の軸としていた。

藤原(2012・2013)は生きてきた「証」の継承という概念を手掛かりにすることで、エンド・オブ・ライフケアにおける相談援助職者の支援は生きてきた証を継承する支援であることを丁寧に論じて報告している。岡江(2020・2021)は、自ら担当者として実践している A 市の住民に対する終活プログラムの意義を明らかにすべく、プログラムに関する事例分析を行い、曖昧な喪失、老年期のアイデンティティ概念で分析・検討したのち、「死の人称」の概念を用いて、二人称の死についての語り合いのあとに、一人称の死の段階へ進めることを明らかにしていた。また、遠山(2011)は、コメディカル医療従事者の喪失体験からの回復過程を明らかにするために、セルフグリーフケアとレジリエンス概念を手掛かりに、分析していた。

明らかにしたい問いが明確になったあとに、どのように明らかにしていくか検討するうえで、文献研究により洞察可能な鍵概念(キー・コンセプト)を見つけることが手掛かりとなる。実践知を深めるうえで、これだと思える鍵概念に出会うことで、見えにくかった現象がこういうことだったのかと見えてくることがある。概念は理論と実践をつなぐ手掛かりのようなものであり、今回の報告の分析でも概念を意図的に活用していた。

### 「確かめて記述する」

明らかにしたい問いを確かめる方法として、半構造化インタビューを中心とした質的研究や統計データの分析などの手法が活用されていた。

支援者を対象とした半構造化インタビューとしては、老健の支援相談員を対象に、ターミナルケアの視点を最初のアセスメント時に組み込んでいるのかどうかを把握した研究(三澤(真)2010・2011)、成年後見ソーシャルワーカーを対象に、クライエントのターミナル期における対人認知がステージを辿ることを試みた研究(斎藤 2012)などがあった。梨本(2011・2012)は、介護支援専門員を対象としたインタビューにより、看取り支援に対する準備教育の必要性について検討し、インタビューの結果を踏まえ、看取り支援の特性を活かした介護支援専門員の看取り対応マニュアルの提案を行っていた。確かめた結果をマニュアルとして実践に活用する試みは、実践者によるPBRの例としても示唆に富む報告といえる。

統計データの分析としては、杉山(2014)は、地域格差や高齢化率などのキーワードで文献検索したのち、高齢化率の全国比較、都内特別養護老人ホームやおむつ支給の地域別比較に関する統計データを分析したのち、どこに住んでいても思い描いた終末期を迎えることが可能となるための必要な点を模索していた。

このように、確かめて記述することは、問いを深めるためにも独りよがりにならずに改めて実情を理解するためにも大切なプロセスといえる。また、調査を実践に活用し、実践を変革するためのステップとも捉えることができた。

表 1 臨床死生学領域でのリサーチクエストと方法の例

	リサーチクエスト	方法	
手 探 り の 中 で 探 索 す る	社会福祉施設利用者の死にゆくプロセスに関わり、利用者の急死に直面する介護職員に対し、グリーフワークを用いることによる精神的なサポートの必要性は何か	文献研究	鷹野(2010)
	ケアマネジメント実践プロセスにおいての在宅ターミナルケアにおける介護支援専門員の役割は何か	実践事例分析	三澤(弥) (2010・2011)
	在宅看取りケアに取り組むケアマネジャーがどのような困難と戸惑いを感じているか	半構造化インタビュー	下ノ本(2010・2011)
	自宅での湯灌体験で家族が抱いた気持ちはどのようなものか	半構造化インタビュー	野田(2013)
	「デス・エデュケーション」(死の教育)は若者の生き方や死生観にどのような影響を与えるだろうか	文献研究、実践分析	小高(2014)
	子どもの死生学教育の重要性と課題はなにか	文献研究	横田(2012)
	生活を共にする家族のスピリチュアリティという側面から、重症心身障害児の生命をどう捉えるか	文献研究	網谷(2010・2011)
	ホスピス・緩和ケアにおいて「患者の気持ちに寄り添う」とはどういうことなのか	実習記録逐語分析	大川(2014)
文 献 か ら 鍵 概 念 に 出 会 う	被爆者の抛り所とするものは何か。放射能被害という永続的な喪失の中で、人がどのように生き続けてきたか、また生き続けていけるのか	文献・歴史研究、政策分析	石井(2011・2012)
	エンド・オブ・ライフプラクティスにおけるソーシャルワーカーの役割は生きてきた「証」の継承を支援することでないか	文献研究	藤原(2012・2013)
	住民に対する終活プログラムの意義は何か。終活出前講座における住民が死生について考えるために効果的なアプローチはどのようなものか	実践分析	岡江(2020・2021)
	死に逝く患者をケアするコメディカルの喪失体験とグリーフ、そしてそこからの回復過程は何か	文献研究	遠山(2011)
確 か め て 記 述 する	老健の支援相談員が、ターミナルケアの視点を最初のアセスメント時に組み込んでいるのかどうか	半構造化インタビュー	三澤 (真)(2010・2011・2012)
	クライアントのターミナル期における成年後見ソーシャルワーカーの対人認知にはどのようなステージを辿るのか	半構造化インタビュー	斎藤(2012)
	ケアマネジャーの看取りの特性を踏まえた支援を行うことで看取られる側及び看取る側が納得したかわり方ができるのではないか	半構造化インタビュー	梨本(2011・2012)
	住む地域で人の逝き方は影響をうけるのか	既存統計資料分析	杉山(2014)

## 2)スーパービジョン/コンサルテーション領域での研究実践を紐解く

スーパービジョン/コンサルテーション領域での研究は、実践評価や効果研究など記述的研究が多く含まれていた。また、日々の実践の評価だけではなく、研修プログラムに参加した成果の報告も多かった。リサーチクエスションにも実践で気づいた具体的な問いが含まれ、理論やモデルを用いて実践の見える化をするプロセスが示されていた。

リサーチクエスションと方法の関連から、「日々の実践を振り返る」、「理論や概念に照らして分析する」、「構成要素や構造を可視化する」、「実践の効果を探求する」、「実践を数値で把握する」、「研修の成果を自己評価する」の6つに分類し、代表的な報告を具体例として表2に示した。

### 「日々の実践を振り返る」

実践例を振り返ることにより、実践のおかれた状況を明確にしていく探索的研究は、問いを深め、対応策を探る際の大事なステップである。たとえば、福島(2017)は、高齢者施設での介護職と看護職の職員間トラブルの事例検証や事例に関する行動観察を実施することの達成状況と課題の報告を行っている。横山(2021)は、母子生活支援施設における職員のスーパービジョン・コンサルテーション体制をどのように構築すればよいか、所属組織での高機能化・多機能化をめざした組織事例をもとにまとめている。

どちらの例も実践現場で直面する課題を整理し、実践担当者としてまとめた結果を報告し、今後に向けた対応のヒントを見出している。

### 「理論や概念に照らして分析する」

スーパービジョンやコンサルテーションの効果を知るために、理論や概念に照らして分析した報告が複数あった。理論や概念を視点やアプローチとして活用することで効果を知る基準が明確になり、具体的な分析につながっていた。

例えば、米澤(2018)は、地域包括支援センターのカンファレンスの場に焦点をあて、多職種協働におけるスーパービジョンやコンサルテーションの効果スーパービジョンの3機能(管理的機能、教育的機能、支持的機能)別で分析することで示している。また、組織のSV体制と、SV機能を補完する多数の専門機関・専門職によるコンサルテーションの機能が存在することを明らかにしている。研修で学んだスーパービジョンとコンサルテーションの関係を具体的な実践の場で確認している。

また、土山(2021)は業務行動プログラミングを用いたグループスーパービジョンの効果はなにかを明らかにするために、メンバーの発言やフィードバックの内容をスーパービジョンに求められる3側面に基づいて分析し、スーパーバイザー自身の変化とメンバーの専門性に対する認識の変化の両方を効果としてあげていた。理論を活用しながら、実践したグループスーパービジョンのプログラムを評価しているのと同時に、スーパーバイザーとしての実践自己評価にもなっている。

### 「構成要素や構造を可視化する」

構成要素や構造を可視化するためには、より多くの視点を把握し、整理し理論化を試みることも必要となる。赤畑ら(2015)は、フォーカス・グループ・インタビ

ユー(FGI)の手法により、ソーシャルワークのスーパービジョン(SV)を提供するプロバイダーの5種類と、SVの構成要素を明らかにしている。本報告は共同研究であったが、単独の研究ではなく、複数の実践者の協働による研究プロジェクトとして研究を実施することによる議論が深まり、可視化が丁寧に促進され理論化につながる深みのある報告となっていた。

### 「実践の効果を探究する」

研修での学びを枠組みとして自分の実践例の効果を測る報告は多数みられた。例えば、崔(2016)は自らバイザーとしてバイジーに対して行った面談の場面を実践例として、スーパービジョンがもたらす効果を明らかにしている。研修プログラムのなかで実践例を振り返り、報告するというプロセスのなかで、SVに関する理解を深め、実践のスーパービジョンの効果は単にクライアントの理解の深化にとどまらず、専門性の深化を促進していることを明らかにしている。

古寺(2021)は、スーパーバイザーの組織に働きかける力はどうなものか、ロジックモデルによる分析で明らかにしている。ロジックモデルを活用し、自分自身の実践のプロセスを整理し、管理的スーパービジョンに焦点をあてて分析することにより、自らの業務がソーシャルワーカーとしての管理的スーパービジョンであったと捉え直すことができたまとめている。自己実践を評価し、効果を明確にして示した報告といえる。赤松(2020)は、スーパービジョンとコンサルテーションの効果を確認し、事業所内における今後の取り組みについて検討するために、事業所内の実践を振り返り、バイザーからスーパービジョンを受け、バイザーと共にコンサルテーションを受けることで一体性と個性性のバランスをとることができるようになり、バイザーと協働体制を築くことができるようになることを示し、考察している。吉田(2017)もスクールソーシャルとしての実践について、カプランのコンサルテーションの4類型で整理し、学校におけるコンサルテーションの効果をまとめている。さらに、篠田(2010)は多職種連携の実践に関して同質性と異質性の協働体制を手掛かりに文献研究でソーシャルワークの独自性についてまとめている。

スーパービジョンやコンサルテーションの効果は見えにくい、自らの組織での実践を丁寧に振り返り、効果は何かという点から採りながら分析することで、効果を言語化している。記述的な研究や探求的な研究が中心であるが、見えにくい効果を少しずつ明確にしていく質的な探求が効果の把握に意義があることがうかがえた。

### 「実践を数値で把握する」

報告の中では発表数は少なかったが、質問紙調査や既存の実践記録などの量的データによる把握もある。例えば、野口(2013)は、「退院困難な要因を有する者」の抽出結果や、「退院困難な要因を有する者」へのMSWの介入結果を分析し、スクリーニングの意義や課題を考察していた。中越(2016)は、医療ソーシャルワーカー(MSW)が介入した1年間の患者の退院までの日数に着目し、傾向を分析した。病院の利用状況データなどの既存のデータは実践動向を知るうえの貴重なエビデンスであり、MSWの視点で浮上した問いに対して分析するのは、実践の評価としても重要なアプローチである。この他、実習の場面の指導者と実習生にそれぞれ質問紙調査で把握し、数値としてスーパービジョンの3機能を分析した報告があった(松尾 2019)。量的調査手法を用いた報告は少なかったが、実践の中にある既

存データを活用するなど、実践研究の方法において工夫がみられた報告であった。

### 「研修の成果を自己評価する」

研修に参加した学びそのものに対する成果を自己評価した報告も多く見られた。例えば、小川(2016)は、プログラム参加の振り返りとして、自分の問いを発表する行為は、自問自答し経験と関連付ける機会となり、問いを深化させることの重要に気が付いたと記していた。辻本(2021)は、ソーシャルワーカー兼園芸療法士の一人の対人援助職者としての包括的な役割を学ぶことを研修目標とし、専門職としての自覚・自信の重要性と自身の独自性の意識化により、組織レベルでの活動の効果を具体化できることの理解を研修成果として示した。池田(2016)は、実践と研究を行き来する思考の言語化、コンサルテーションを通して、実践と研究を行き来する自己の思考の言語化のプロセスを学んだと述べていた。また、佐藤(2020)は、音楽療法士のスーパービジョンがどのようになされているのかをプログラムを受講して学び、コンサルティがコンサルテーションを受けるまでに行う準備過程について、自分の現場での実践に照らしてまとめていた。

これらの報告結果から、研修の学びを自己評価することで学んだ内容が明確になっていることがうかがえた。

表2 スーパービジョン/コンサルテーション領域でのリサーチクエスションと方法

	リサーチクエスション	方法	
日 々 の 実 践を振り返 る	母子生活支援施設におけるスーパービジョン・コンサルテーション体制をどのように構築すればいいか	実 践 分 析	横山(2021)
	高齢者介護施設における対人援助職員間のトラブルはどのようなものか	実 践 分 析	福嶋(2017)
理 論 や 概 念に照らし て分析する	「職業的社会化」という視点からは、スタッフの育成プロセスはどのように整理できるだろうか	実 践 分 析	井上(2020)
	カンファレンスでの、多職種協働におけるスーパービジョンやコンサルテーションの効果は何か	実 践 分 析	米澤(2018)
	『業務行動プログラミング』を用いたグループスーパービジョンの効果は何か	実 践 分 析	土山(2021)
	学校でのコンサルテーションの実践にもたらす効果は何か	実 践 分 析	吉田(2017)
	医療・保健・福祉における多職種協働の中でソーシャルワーカーは独自性をどう生かせるのか	文 献 研 究	篠田(2010)
構 成 要 素 や 構 造 を 可 視 化 す る	ソーシャルワーカーが SV についてどのように思っているのか	インタビ ュー (FGI)	赤畑・古寺・ 品田・鈴木 (2015)
実 践 の 効 果を探究す る	スーパービジョンがもたらす効果は何か	実 践 分 析	崔(2016)
	スーパーバイザーの組織に働きかける力はどのようなものか	実 践 分 析	古寺(2021)
	SV の効果、コンサルテーションの効果は何か	実 践 分 析	赤松(2020)
実 践 を 数 値 で 把 握 する	スクリーニングで「退院困難な要因を有する者」となった者に対しMSWはどの程度介入できているのか	量 的 分 析	野口(2013)
	退院支援開始時期と入院期間の相関関係はどのようなものか	量 的 分 析	中越(2016)
	音楽療法士養成校の実習指導において、指導者は何を意識して指導しているのか。実習生はどのような頻度・内容の SV を受けていると感じているか	量 的 調 査(質問 紙調査)	松尾(2019)
研 修 成 果 を 自 己 評 価する	問いを深化させることの意味はなにか	自 己 評 価	小川(2016)
	コンサルテーションプログラムを受講しての学びはなにか	自 己 評 価	辻本(2021)
	コンサルテーションを受けたことの効果はなにか	自 己 評 価	池田(2016)
	コンサルティとして「コンサルテーションを受けるための準備」はどのようなものか	自 己 評 価	佐藤(裕) (2020)

#### 4. 「対人援助実践を紐解く」という実践の分析から見てきた論点

対人援助者は対人援助実践をどのように紐解こうとしているのか、対人援助者による研修の報告内容から対人援助者による実践研究や実践評価のプロセスを探ることが本章の目的であった。まず、対人援助者の実践と研究を取り巻く環境として、エビデンス重視の傾向と同時にエビデンスへの揺らぎがあること、実践者が実践調査者となり実践調査や評価を行うことが重視されつつあることを概観した。そのうえで、本センターの13年間の報告集の報告内容をデータとして、リサーチクエスションと方法との関連に着目し、臨床死生学領域とスーパービジョン/コンサルテーション領域に区分して分析した。

PBRの目的別3分類(探索的研究、記述的研究、説明的研究)(Dodd & Epstein 2012)から報告の内容をみてみると、探索的研究や記述的研究がほとんどであった。今回のデータは1年間の研修後の報告という特徴があることや、対人援助実践の複雑さからくる説明の困難さが説明的研究の報告の少なさに関連しているだろう。

分析の結果、「対人援助実践を紐解く」という営みそのものが研究プロセスであると同時に実践でもあることがみえてきた。研修による学びのプロセスの報告内容という通常では得にくい貴重なデータではあるものの、該当する報告者も限定され、一般的な対人援助者による実践研究の方法や結果の具体的方法などが示されたものではない点には留意が必要である。しかしながら、対人援助者が日々の実践に戸惑いながらも、実践・調査者として適切なリサーチクエスションを定め、方法を選び、丁寧に言語化していることが本分析からみえてきた。本分析を通して、実践と調査研究の関連や調査を実践に活用していく際の工夫すべき点を知ることができ、対人援助者による実践研究を発展させるための検討課題が確認できた。対人援助者の実践研究をすすめるためのより効果的な教育方法が模索されるなかで、対人援助者の長年の経験知からの知見は示唆になることが多い。対人援助実践者自身が研修に参加して学んだ報告に関する本分析結果から、浮かび上がってきた大切だと思われる論点は以下の8点である。

##### 1)対人援助における実践・評価・調査：連続体・表裏一体なものとしての捉え直し

今回分析した実践調査者としての報告の分析からも、実践と調査研究が分断されることなく把握されている面があることがうかがえた。対人援助実践と研究は連続体・表裏一体なものとして捉え直していくことが、実践者による研究にはとりわけ重要であろう。対人援助実践と研究の関連は曖昧な面があり、明確に区分できるものではない。また実践のための研究や研究に基づく実践の重要性が強調されてきた。実践評価も研究の中で位置付けられ、評価の際に研究の手法の活用が求められるようになった。

Banks & Batnes (2005) は、調査(research)と評価(evaluation)には重なりがあるものの、調査は発見や探索のプロセスを含む、体系的な追及(investigation)に関連する広範囲な用語であり、評価は価値のアセスメントのことであり、特定の活動・プロジェクト・プログラム・政策の価値に関する判断に関連し、どちらかといえばより狭い範囲の意味合いであると論じている。対人援助者は評価には判断や価値が含まれることを認識したうえで、実践に関連する評価も広い意味で調査研



究として位置付けられることへの理解も大事だろう。今回の分析データでは評価研究を意識したものは少なかったが、特にスーパービジョン／コンサルテーション領域では効果を把握する報告が多数あり、広義の実践評価研究に位置付けられると思われる。

Humphries (2005) は、理論、実践、調査の切れ目のないつながりとして捉え、政策、組織、構造などの社会変革を目指した調査が求められることを論じている。実践を変える調査の重要性(笠原・永田 2013)が示されているが、対人援助の理論や目的に呼応した、実践と研究のつながりを意識することが大切となる。CSWE の示した「実践に裏付けられた調査と調査に裏付けられた実践に関与するコンピテンス」は日本のソーシャルワーカーなどの対人援助者にとっても重要なコンピテンスである。

## 2) 学びあいながら、揺らぎに気づき、模索する営み

「対人援助実践を紐解く」という実践は、揺らぎに気づき、模索する営みと捉えることができる。報告内容の分析から、研修のプロセスのまとめとしての報告は、これまでの積み重ねや模索を紐解くことで、藁にも縋る思いで糸口を見出そうとしてきた、自分自身の揺らぎに対する問い直しの言語化であることがわかった。研修は一步踏み出すための糸口を共に学びながら見出すプロセスとなっている面があることがうかがえた。生涯学習としての研修プログラムに参加することにより、学び続けることで専門性を高めようとしている。今回分析した長年にわたる多くの報告は研究論文などの「完成形」ではないが、研究に取り組むプロセスや、理論や概念に照らして問いを明確にする、小規模なインタビューの実施、現場の出来事の実分析、インタビューガイドの検討などの途中の段階だからこそ見えてくる貴重な内容を含んでいた。

Dominelli & Hackett (2013) は実践の複雑さを論じ、実践者は簡単には解決策を見出せない実践の複雑さに向き合うが、クライアントの経験を調査する研究にも同様の複雑さがあるとこと、複雑であるがゆえに、熟考する実践家は改善策が見いだせない困難なジレンマに陥りやすいことから、バーンアウトを避けて専門性を発揮するためにも状況を理解する他者の支援を求めるべきと指摘している。研修プログラムで学び合いながら、実践の複雑さの中で、揺らぎに気づき、模索している自らのおかれた状況を相対化することは、専門性の発揮のための他者によるコンサルテーションとしての意味合いもあるだろう。Adams, Dominelli and Payne (2005) も、対人援助の実践者が自らの実践を批判的に評価し、省察しながら新たな知識とスキルを獲得する必要性を論じている。

今回分析した内容は実践の複雑さへの対処の一側面と捉えることができる。

## 3) よい問いにたどり着く：問題の明確化のプロセス

報告集の内容の分析から、問題明確化の詳細なプロセスは十分にわからないものの、それぞれの報告者が報告にむけて自らの問いを探りながら、リサーチクエスチョンを選択し、よい問いにたどり着いていることが伺えた。当初の問いから焦点化された問いへとリサーチクエスチョンが変更する場合もあれば、数年かけて、一つの問いを掘り下げている場合もあることがわかった。今回の報告の分析においても、ぼんやりとした当初の問いから鍵概念に出会い、より具体的なリサ

ーチクエスションの特定にすすむプロセスがみえてきた。

Dodd & Epstein(2012)は、問題の関心が明確になったら、より洞察を深めるために具体的なリサーチクエスション（全体の通じる問いと具体的な問い）を設定すること、問題の特定は研究デザイン、データ収集方法、対象の選択のすべてに関連してくると指摘している。また、問題の明確化の4つのステップとして、1)ブレインストーミング、2)重要性と影響に関する熟慮、3)問題のさらなる焦点化(鍵概念の特定)、4)自分の焦点がずれてないか確認することを掲げている。第三ステップの「問題のさらなる焦点化」とは、問題の関心が明確になったら、より洞察を深めるために具体的なリサーチクエスション（全体の通じる問いと具体的な問い）を設定することである。問題の特定は研究デザイン、データ収集方法、対象の選択のすべてに関連してくることから、問題の更なる焦点化は重要な点である。

#### 4)質の高い実践研究を行うために

今回の報告の分析も、質的研究や探索的・記述的研究が中心であった。1年間の研修における合同報告会での発表は、実際の調査研究論文などとは意味合いが異なるが、自分の知りたい問いにどうアプローチするかを決める際に、意識的に自分なりのスタンスや立ち位置を理解しておくことが、独りよがりな分析を避けるためにも必要である。

佐藤(2015a)は、筋の良い調査というのは筋の良い問いに対する筋の良い答えを提示するものでなければならないとし、筋の良い社会調査には、理論・データ・方法という三者間の関係をリサーチ・トライアングルとして提示している。さらに、3 カテゴリーについて、理論は明確な理論的根拠に基づいてリサーチクエスションが導かれ、またその答えが求められていること、データは良質のデータが確実な実証的根拠として示されていること、方法は的確な調査技法を用いてデータ収集が行われ、適切な推論技法によってそれらのデータと理論やリサーチクエスションと仮説との対応関係が明らかにされていることの必要性を示している（佐藤2015a,p27）。

本分析では、「文献から鍵概念に出会う」や「理論や概念に照らして分析する」などに分類された、理論を活用した報告が多数みられた。理論・データ・方法として、理論の位置づけをとらえると、質的研究法においても理論を確かめるような演繹的アプローチも活用されていた。サンデロスキー(2013)は、質的研究の理論の源を論じるなかで、理論は研究の内側から生み出されるだけでなく、外からも入ってくると指摘している。また、理論をどの時点でどう活用するかも柔軟であるべきと論じている。質的研究は帰納的アプローチと断定することなく、多くの報告でみられたような理論や概念に照らしていく方法も探求や記述を目的とした実践研究では大事なアプローチかもしれない。しかしながら、新たな仮説や理論を生成していくことも重要なアプローチであり、今回の報告では多くはみられなかったが、既存の理論や概念で確認した後でも、十分に把握しえない部分をさらに追及し、言語化・理論化していくプロセスも必要となるかもしれない。その際には、より具体的な調査研究のデザインを再検討することになるだろう。

また、前述したように、調査研究方法の複雑化・多様化を理解し、エビデンスとナラティブ、量的研究と質的研究の強みと弱みについて意識して考えること大事である。EBP、NBP、実践研究・実践評価、プログラム評価、実践の自己評価な

ど、多様な立場で別個に示される場合が多い現状において、たとえば、実践研究をどのように位置付けるかなどの議論を深めていくことが必要であろう。日本におけるソーシャルワーク教育体制での研究や評価方法の教育内容の変革の動向をみると、EBP が重視されている面があり、EBP と NBP の関連については十分には示されていない面がある。当時に、質的研究や実践におけるナラティブアプローチや構成主義的アプローチなど NBP への関心の高まりにより、研究方法としては質的研究が多くみられるようになってきた。スーパービジョン研究などの対人援助の研究においては質的研究が多く、量的研究は多くはない。質の高い実践研究を行うために、対人援助者としても佐藤(2015a)の示した、理論・データ・方法の研究・トライアングルを意識する必要があるだろう。

#### 5)対人援助者のリサーチ・リタラシー向上にむけて

社会情勢のなかで対人援助実践も多様化しつつあり、研究方法も量的調査も質的調査も多様で目指すゴールも様々で方法に関する学ぶ領域も多様化・複雑化しており、全容を学び理解することは困難を伴う。対人援助者がリサーチ・リタラシー向上には、調査手法の学びを深めることも重要だが、専門的なコンサルテーションを受けながら、限界を知り、支援を受けて対応していく体制も大事であろう。調査や研究への苦手意識を払しょくするための学びが求められる。

ソーシャルワーク専門職のグローバル定義において、ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問であるとしている。社会変革やエンパワメントする実践を行うためにも、対人援助職であるソーシャルワーカーがリサーチを活用した実践ができるよう、専門家としての実践力を高めることがますます重要となるだろう。

佐藤(2015a)は、量的調査と質的調査の単純な二分法は意味がなく、社会調査の質を見きわめていくために必要なリサーチ・リタラシーの獲得の重要性を論じている。Dominalli (2005) も、リサーチ・リタラシー向上の必要性和ソーシャルワークリサーチの論争に反応すべきことを述べている。このようなリサーチ・リタラシー向上のためには、ソーシャルワークなどの対人援助者の教育における対応も重要だが、対人援助実践の現場においてもリサーチ・リタラシーを高める努力が求められる。例えば、実践に役立つ研究を組織として実践していくには、マネジメントの立場にある管理者やスーパーバイザーも研修などでリサーチ・リタラシーを高める必要があるとともに、経験の少ない対人援助者も含めてリサーチ・リタラシーを高める必要があるだろう。例えば、職場全体で新たな助成金などを受託してプログラムを実施し、その効果を評価するなどの対応ができるようにならないといけない。

今後、対人援助の実践家が実践に役立つ実践的研究をするためには、リサーチ・リタラシーを高め、様々な研究方法の有効点と限界を理解し、リサーチクエスションを丁寧に掘り下げながら示し、問いを適切な方法で分析・研究し、研究の成果を学術的貢献だけでなく実践へのインプリケーションを丁寧に示すことが求められる。Dominelli (2005) は、ソーシャルワークリサーチャーはサービス利用者、実践者、管理者と協力し、これまでとは異なったソーシャルワークリサーチの新たな方法と洞察を開発しなければならないと指摘している。

研究方法だけでなく、研究倫理に関する学びも研究を実施前の前提として知る必要がある。特に、実践—調査者による実践研究においては、クライアントやスーパーバイザーなどの同意やプライバシー、調査をめぐる倫理的ジレンマなどについての理解も欠かせない。

## 6)実践へのインプリケーションの大切さ

本分析ではリサーチクエスションと方法との関連に焦点をあてたため、明らかになったことや示唆がどのようになされたのかは多くは示さなかったが、報告のなかに実践の中から生まれた素朴な問いの答えを明らかにしたあとに、実践へのインプリケーションが多く含まれていた。Dominelli (2005) は、ソーシャルワークリサーチは人のウェルビーイング（もしくはその欠落）にかかわる人々の関わりを確かめる調査の領域であり、力を剥奪され、周辺化された人々を対象にすることが多く、人々のウェルビーイングにかかわる社会の変革を求めるものであり、調査のための調査ではなく、リサーチの実践へのインプリケーションが導かれなければならないと指摘している。実践者が、日々の実践の中の問いから答えを求めて論じているゆえに示唆に富むものであり、実践研究の強みが確認できたといえる。

## 7)新たな挑戦：テクノロジーの実践と研究への影響

今回の報告のリサーチクエスションに関する分析においては、ICT に関連するテーマは見られなかった。コロナ禍以降、対人援助実践の ICT 活用が促進された状況を受けて、ICT 活用に関する問いも増えていくかもしれない。

ICT が発展しオンラインや AI を活用した対人援助が一気に進展し、データサイエンスやエビデンスの重視が強調されるようになってきた今日、実践を研究することや評価することはどのようなことなのか、どのようになされるのかを再確認していくことが大切であろう。すでに高齢者福祉領域では科学的介護に基づく実践が制度化され LIFE という名称でデータベース化されて運用されている。データ化され、蓄積されたデータはビッグデータとなり、傾向が解析されて実践の評価の可視化が進み、成果をもとにした加算などの対応も進みつつある。このような状況のなかで、ソーシャルワーカーなどの対人援助者の実践はどのように位置付けて評価されていくのだろうか。

すでに介護分野では、介護保険制度内でのデータサイエンス教育の重視される潮流がある。すでに、介護ロボット、見守りセンサー、AI、ICT、SNS などのテクノロジー活用のなど、医療・保健・福祉の現場の対人援助実践もコロナ禍に急激な変容を遂げた実践もある。実践現場の変化に追いつくのが精一杯で、クライアントも、援助者も戸惑いながら支援関係がある状況といえる。ICT 活用により、家族と会えなくてもオンラインでつながれる、夜間の介護がしやすくなるなどのメリットがある一方、対人コミュニケーションの分断など対人援助実践そのものの前提が覆されうるデメリットもある。実践者として、テクノロジーの実践と研究への影響を検討することは、避けて通ることのできない新たな挑戦といえる。

## 8)対人援助実践研究の発展にむけて

本分析では「対人援助実践を紐解く」という実践を臨床死生学研究領域とスー

パービジョン/コンサルテーション領域に分けて分析したが、人間の尊厳・いのちや人権の擁護を重視した広義の臨床死生学的なアプローチや研究とスーパービジョン/コンサルテーション研究などの対人援助実践研究が共鳴しながら発展していくことが求められる。

臨床死生学領域の研究は、生と死、いのちに関して深く探求するものであり、学際的な研究領域である。今回の報告では、終末期ケア、死の準備教育など実践のなかからテーマやリサーチクエスチョンを定め、概念や理論を参照しながら、踏み込んで分析した報告が多かった。死に向き合う本人のみならず、家族や対人援助者にとってのグリーフケアなど、臨床死生学におけるテーマは幅広く、今後もさらに、人間の尊厳の保持・尊重という観点から実践で活かせるような学際的な実践研究の発展が望まれる。スーパービジョンに関する質的研究（高山 2018）や量的研究（石川 2018）の動向が示されているが、さらに対人援助領域でのスーパービジョンやコンサルテーションがどのような問いをどのような方法で研究されているのか、国内外の文献をレビューすることが重要となる。レビューをして、自分の問いに関連のある理論や概念に出会うこともあれば、少し異なるが関連することや、仮説的な答えが思い浮かぶこともある。

研究方法としては文献レビューやインタビューなどの質的研究が主であったが、例えば質問紙調査による量的調査が困難な場合でも、現場の既存データを活用する方法で理解を深めることができる。Epstein(2006)は、実践に基づいた調査研究における既存臨床情報の利用の重要性を論じる中で、「金を夢見つつ銀を掘る」と題して、対人援助者が身近にある豊富なデータを活用しないことのもったいなさを説いている。本分析でも既存データ活用の報告は少数であったが、今後は実践における量的・質的なデータを効果的に活用した実践研究が増えることが望ましい。特に EBP が重視されるなかではビッグデータの分析が主流になりつつあるが、ビッグデータに含まれない情報やデータ測定上の問題点などに関しても、理解しながら既存情報を活用していくことが大事である。

## 5. 結びにかえて

対人援助実践をどのように紐解こうとしているのか。本センターの 13 年間の報告内容からそのプロセスを探り、「対人援助実践を紐解く」という実践の分析から見えてきた 8 つの論点を示した。この長年の報告内容こそが、まさに Epstein(2006)が示した身近にあり活用されていなかった貴重なデータであった。豊富なデータ全部を十分に分析できていない面もあり、具体例も一部を抽出しただけで、他の多くの報告の全容を示しきれなかった分析上の限界もある。そのような限界はあるものの、これからの実践調査者の行う実践研究を発展させるための研修や教育内容を検討するためにも、今回の分析は大事な示唆を与えている。本稿で示した論点をさらに検討しながら、対人援助者のリサーチ・リタラシーを高め、実践調査者として省察しながらも、様々な実践研究を行えるように教育方法や研修プログラムの開発を検討することが今後の課題である。

### 引用文献

Adams, R. Dominelli, L. and Payne, M. (2005) Engaging With Social Work

- Futures, R. Adams, L. Dominelli, M. Payne Eds., Social Work Futures: Crossing boundaries, Transforming Practice, Palgrave Macmillan, p293-299.
- Banks, S. and Batnes, D. (2005) Getting Started with a Piece of Research/Evaluation in Social Work, R. Adams, L. Dominelli, M. Payne Eds., Social Work Futures: Crossing boundaries, Transforming Practice, Palgrave Macmillan, p237-250.
- Charmaz, K. (キャシー・シャーマズ) /岡部大祐監訳(2014=2020)『グラウンデッド・セオリーの構築』(第2版),ナカニシヤ出版.
- Council on Social Work Education (CSWE) (2022) EPAS 2022(Educational Policy and Accreditation Standards for Baccalaureate and Master's Social Work Programs 2022) [2022-EPAS.pdf \(cswe.org\)](https://www.cswe.org/2022-EPAS.pdf)
- Dominelli, L. (2005) Social Work Research: Contested Knowledge for Practice, R. Adams, L. Dominelli, M. Payne Eds., Social Work Futures: Crossing boundaries, Transforming Practice, Palgrave Macmillan, p223-236.
- Dominelli and Hackett (2013) The Complexities of Practice. International Social Work, 56(5) 585-587
- Dodd, S. & Epstein, I. (2012) Practice-based research in Social Work: A Guide for Reluctant Researchers, Routledge.
- Epstein, Irwin(秋元樹訳)(2006)「“実践に基づいた調査研究”における既存臨床情報の利用—金を夢見つつ銀を掘る—」『ソーシャルワーク研究』32-1,42-48&32-2,38-43.
- Flick, Uwe. (2007=2011),小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳 『質的研究入門—<人間科学>のための方法論』新版 春秋社.
- 福山和女(2018)「はじめに」福山和女・渡辺律子・小原真知子・浅野正嗣・佐原まち子編『保健・医療・福祉専門職のためのスーパービジョン—支援の質を高める手法の理論と実際—』ミネルヴァ書房, p.iii - v .
- Humphries, B. (2005) From Margin to Centre: Shifting the Emphasis of Social Work Research, R. Adams, L. Dominelli, M. Payne Eds., Social Work Futures: Crossing boundaries, Transforming Practice, Palgrave Macmillan, p279-299.
- 石川久展(2018)「スーパービジョンに関する量的研究」福山和女・渡辺律子・小原真知子・浅野正嗣・佐原まち子編『保健・医療・福祉専門職のためのスーパービジョン—支援の質を高める手法の理論と実際—』ミネルヴァ書房, p348-362.
- 笠原千絵・永田祐編(2013)『地域の〈実践〉を変える社会福祉調査入門』春秋社
- Sandelowski, M.(マーガレット・サンデロスキー,谷津裕子・江藤裕之訳)(2013)『質的研究をめぐる10のキークエスション サンデロスキー論文に学ぶ』医学書院.
- 佐藤郁哉(2015a)『社会調査の考え方(上)』東京大学出版.
- 佐藤郁哉(2015b)『社会調査の考え方(下)』東京大学出版.
- サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実編(2019)『質的研究法マッピング 特徴をつかみ、活用するために』新曜社.
- 高山恵理子(2018)「スーパービジョンに関する質的研究」福山和女・渡辺律子・小原真知子・浅野正嗣・佐原まち子編『保健・医療・福祉専門職のためのスーパービジョン—支援の質を高める手法の理論と実際—』ミネルヴァ書房, p339-347.

## 第5章

### 包括的臨床コンサルテーションセンターの内的外的資源の活動報告

照井 秀子

#### はじめに

包括的臨床コンサルテーションセンターの活動期間は、前包括的臨床死生学研究所を含めて、13 年間に及ぶ。その間に実施した、通常プログラム外の諸活動を実践記録より以下、2 期に分けその具体的な内容を報告する。

#### 1. 第1期（包括的臨床死生学研究所：2009 年～2014 年）

包括的臨床死生学研究所では、臨床死生学に根差した研究に資するために、その理論的な基礎や知見の提供を目的として、研究員や外部の専門家を活用し、所内研究員へのオプション研修会を開催した。また、対人援助職のニーズに合わせた専門的な研修会を企画し、研究所内外から参加者を募集した。それらを、特別研修、協働実践、研究活動、受託事業、被災地支援に大別して年度別に記述する。

今期での成果は以下のとおりである。

- ・研究員の研究に資するだけでなく、大学院進学等へのサポートとなった。
- ・研究所の PR、新たな研究員を発掘、次年度の研究員確保となった。
- ・他機関からの要請を受けて、各地で多くの研修を実施した。社会貢献の機会が広がった。
- ・2011 年東日本大震災を契機に、研究所としてできることは何かを問われ、関係機関との連携の中、被災地や他県に出向き、多くの「支援者支援」を展開した。
- ・特別研究員（5 名）や関係機関との研究調査活動での論文作成等を行った。

#### 1)-1 2009 年度活動（実践と効果）

##### A. 特別研修

- ①関西ワークショップ（2009・3・4）参加者 21 名

「ささえあうグリーフケア」

研修内容：グリーフワークへの知見を高める目的で、京都で出長講座ワークショップを開催した。講師：金子絵里乃先生（同志社大学）

##### B. 協働実践（国際と国内；他機関との協働体制）

- ①スウェーデン研修会（2009・10・26）参加者 22 名

「スウェーデンの死生学研究者によるスウェーデンの死生学の現状」

ルーテル学院大学と国際連携のリンショッピン大学の先生とのコラボレーションが実現した。

研修内容：臨床死生学に基づく研修

講師：エルスマリー・アンベッケン先生（関西学院大学）、Eva Jeppsson Grassman（リンショッピン大学教授）及び Anna Whitaker（リンショッピン大学教授）

#### 1)-2 2010 年度活動（実践と効果）

##### A. 特別研修

- ① 東京研修会（2010・8・8）参加者 32 名  
「第 2 回ささえあうグリーフケア」講師：金子絵里乃先生（同志社大学）
- ② 熊本研修会（2010・8・23）参加者 6 名  
「いま関心のあること」講師：西彰男先生（九州ルーテル学院大学）
- ③ 関西ワークショップ（2010・12・5）参加者 17 名  
「関西第 2 弾ささえあうグリーフケア」講師：金子絵里乃先生（同志社大学）

## B. 研究活動

- ① 研究調査の講義 4 回（全研究員対象）参加者 91 名
  - ・「研究調査」講師：山口麻衣先生（2010・4・19）
  - ・「質的調査研究」佐藤繭美先生（2010・6・7）
  - ・「参与観察調査法」柳原清子先生（2010・8・18）
  - ・「参与観察調査法」柳原清子先生 御牧由子先生（2010・2・18）
- ② 協働研究活動（2010・4－2011・3）
  - ・「高齢者施設における終末期ケアでのトータルマネジメント技法の開発～利用者および家族の意思決定支援に焦点をあてて～」  
研究者：福山和女先生・特別研究員 5 名（柳原清子、金子絵里乃、佐藤繭美、御牧由子、照井秀子）（日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団の助成金：2011 年 12 月迄）
- ③ 高齢者施設シャローム東久留米職員研修「看取りについて」（2011・7・15）  
講師：福山和女先生（センター長）

## C. 受託事業

- ① 練馬区社会福祉事業団受託事業  
2010 年度練馬区社会福祉事業団施設訪問型活動
  - ・施設の外部委員活動：事業団傘下の 4 高齢者施設に研究員が 2 名一組で訪問し、利用者、家族面接を 1 回 26 件実施

## 1)－3 2011 年度活動（実践と効果）

### A. 特別研修

- ① 講演「グリーフワークについての基礎知職ーライフレビューの視点から」（2011・5・14）参加者 36 名 講師：エルスマリーアンベッケン先生（関西学院大学）
- ② 「質的調査研究の基礎」講師：佐藤繭美先生（2011・11・26）参加者 13 名
- ③ ケアマネジャーのための「グリーフケアの基礎」（2011・12・17）参加者 23 名  
講師：金子絵里乃先生、福山和女先生
- ④ 調布社会福祉士会員研修「グリーフワークの基礎」（2012・2・15）  
講師：石井三智子研究員
- ⑤ グリーフワークプログラム報告会 7 名  
講師：山田美代子研究員 西方福祉医療研究会



## B. 研究活動

- ① 第 21 回アジア・太平洋ソーシャルワーク会議：(2011・7・17)  
「高齢者施設における終末期ケアでのトータルマネジメント技法の開発～利用者および家族の意思決定支援に焦点をあてて～」  
発表：御牧由子（研究者：福山和女先生、特別研究員；柳原清子、金子絵理乃、佐藤繭美、御牧由子、照井秀子）
- ② ニッセイ財団高齢社会ワークショップ（2011・10・29）  
「高齢者の家族の調査報告」講師：福山和女先生
- ③ 小金井市高齢者地区調査協力「中間報告会」（2011・12・3）  
「フィールド調査方法に関する講義」発表：山口麻衣先生
- ④ 「被災者の支援をする専門家のためのグリーフワークスーパービジョンの報告会」（2011・12・17）  
発表：福山和女先生・御牧由子・山田美代子・照井秀子
- ⑤ 文部科学省科学研究費の助成による調査活動：山口麻衣先生
- ⑥ 小金井市高齢者地区調査協力「地域活動活性化のためのパンフレット作製」

## C. 受託事業

### ① 練馬区社会福祉事業団受託事業

2011 年度練馬区社会福祉事業委員施設訪問型活動

- ・施設の外部委員活動：事業団傘下の 4 高齢者施設に研究員が 2 名一組で訪問し、利用者、家族面接を実施。2 回 45 件
- ・事業団本部のコンサルテーション 2 回：福山和女センター長、照井秀子事務局長

## D. 被災地支援（2011・7 月～11 月）216 名

### ① チャイルドファンドジャパンとの協働支援プログラム：

- 「支援者支援グリーフワーク」支援者：福山和女センター長、御牧由子、照井秀子
- ・石巻（日本医療社会福祉協会 MSW）5 回述べ 40 名
  - ・東京（武蔵野赤十字病院支援センター職員）8 名
  - ・京都（京都社会福祉士会会員）10 名
  - ・大船渡（大船渡社会福祉協議会、生活支援員）12 名
  - ・郡山（福島県 MSW 協会）研修会 100 名、ワークショップ 15 名
  - ・東京（ケアマネジャー）24 名
  - ・東京（研究員）7 名

## 1) - 4 2012 年度活動(実践と効果)

### A. 特別研修

- ① テーマ別研究会
  - ・第 1 回「ソーシャルワークと尊厳死」（2012・9・17）  
講師：佐藤繭美先生 15 名参加

- ・第2回「リフレクティングアプローチによるスーパービジョン」(2012・9・23)  
講師：金子絵里乃先生、福山和女先生 24 名参加
- ・第3回「日常のソーシャルワーク実践と研究をいかに結びつけるか」(2013・2・2)  
講師：御牧由子先生 14 名参加

## B. 受託事業

- ① 練馬区社会福祉事業団受託事業・  
2012 年度練馬区社会福祉事業委員施設訪問型活動  
・研究員 8 名により、前期/後期 2 回実施：4 施設訪問  
・事業団本部との意見聴取の会 2 回実施 (2012・9・24/2013・1・29)  
・4 施設長との意見交換会 (2013・1・29)  
・外部委員(研究員)のためのトレーニング 2 回 (2012・10・27/11・10)
- ② グリーフワーク・プログラムの外部評価インタビュー (CFJ) (2013・1・15)  
対象者：照井秀子

## C. 被災地支援 (2012・6 月～12 月)

- ① チャイルド・フアンド・ジャパンとの協働支援プログラム活動 (3 回実施) 45 名  
・第1回「生活支援相談員へのグリーフワーク・プログラム」大船渡市社会福祉協議会 (2012・6・16) 対象者：現地で活動する生活支援相談員 18 名  
・第2回「仮設住宅団地の支援員対象のプログラム (1)」(2012・9・29) 15 名  
・第3回「仮設住宅団地の支援員対象のプログラム (2)」(2012・12・15) 12 名  
対象者：(株) ジャパンクリエイティブの支援職員  
場所：大船渡市福祉の里センター研修室  
ファシリテーター：福山和女・御牧由子・照井秀子
- ② ルーテル教会救援活動との協働 (2012：6・17) 10 名  
・宅老事業所代表者との面談 1 名  
・「対人援助職のためのサポートプログラム」9 名  
対象：みやぎ宅老連絡会の 2 事業所のスタッフ〈介護職〉  
会場：すみちゃんの家 (宮城県東松島)  
協働者：ルーテル教会 野口牧師とみやぎ宅老連絡会事務局の星さんも一部参加
- ③ みやぎ心のケアセンター定例研修会 (2012・12・21) 37 名  
「援助する人へのサポート～リフレクティング・スーパービジョン～」  
対象者：みやぎ心のケアセンター職員 (宮城県精神保健福祉士等)
- ④ 京田辺市役所障害福祉課研修会 (2013・2・25) 74 名  
「心の健康～地域と家族の絆」  
対象者：京都府京田辺市地域住民、医療、保健、福祉の専門職)
- ⑤ 東京 (MSW, 生活支援員) 23 名

## 1)ー5 2013 年度活動（実践と効果）

### A. 特別研修：テーマ別研究会

- ① 「研究と実証調査研究のあり方ー質的研究方法論」(2013・5・18) 18 名  
講師：柳原清子先生（東海大学）
- ② 「デスカンファレンスにおける家族支援の必要性について考える」(2013・11・9) 7 名  
講師：御牧由子先生（埼玉医科大学国際医療センター総合相談センター）

### B. 研究活動

- ① 介護コミュニケーション研究会との協働：(2013・8・27) 51 名  
「実践と研究を繋ぐ効果的な研究デザインと研究方法とは？福祉・心理領域におけるコミュニケーション研究からの示唆」
  - ・第2回研究会（2013・11・23）4 名
  - ・第3回研究会（2014・3・15）11 名

### C. 受託事業

- ① 練馬区社会福祉事業団受託事業：  
2013 年度練馬区社会福祉事業団施設訪問型活動  
4 施設訪問面接 8 回 9 名
- ② 新潟県老人福祉協議会会員への研修会：新潟県燕三条市  
「看取りの援助の中で考える」(2014・2・28) 90 名
- ③ 調布市地域ケアの輪：「対人援助職のグリーフワーク」(2014・3・13) 48 名
- ④ 大分県医療ソーシャルワーカー協会；2014・3・23) 68 名  
災害ソーシャルワーク研修「喪失と再出発を支えるソーシャルワーク～被災者支援における専門的機能～」別府市

### D. 被災地支援（2013・8 月～12 月）47 名

- ① ルーテル教会救援活動との協働  
「対人援助職のためのサポート講座～人の感性を生かして～」
  - ・第1回宅老事業所介護職他 13 名：東松島市斧市民センター（2013・8・30）
  - ・第2回宅老事業所介護職他 13 名：仙台市宮城野区市民センター（2013・10・19）
  - ・第3回宅老事業所介護職他 21 名：岩沼市総合福祉センター（2013・12・10）

## 1)ー6 2014 年度活動（実践と効果）

### A. 特別研修：テーマ別研究会

- ① 「研究と実証調査研究のあり方ー質的研究方法論」(2014・7・12) 12 名  
講師：柳原清子先生（東海大学）
- ② 「家族の一員が喪失に直面していることが家族全体に及ぼす影響について～事例を通して考える～」(2015・2・21) 10 名  
講師：御牧由子先生（埼玉医科大学国際医療センター総合相談センター）

### B. 研究活動

- ① 介護コミュニケーション研究会との共催フォーラム（2014・8・30）55 名
- 「福祉・心理領域における実践的研究方法：『福祉施設職員間の組織コミュニケーションに関する質的・量的データ分析事例から学ぶ』」
- 「組織ディスコースの視点から考える組織開発と組織の学習」
- 清宮徹先生（西南学院大学文学部外国語学科教授）
- 「コミュニケーション・オーディット研究に基づく介護施設職員間コミュニケーションの量的分析」
- 山口生史先生（明治大学情報コミュニケーション学部教授）

### C. 受託事業

- ① 練馬区社会福祉事業団受託事業
- 2012 年度練馬区社会福祉事業団施設訪問型活動、5 施設 4 回 15 名面接実施。
- ② 調布市地域ケアの輪：「対人援助職のグリーンワーク」（2014・3・13）
- 48 名参加、対象者；調布市内の高齢者、障がい者施設の職員、ケアマネジャー

## 2. 第 2 期（包括的臨床コンサルテーションセンター：2015 年～2021 年）

2015 年、包括的臨床死生学研究所は、発展改編する形で、新たなニーズにこたえる包括的臨床コンサルテーションセンターと改名した。内部研修の他、一般の対人援助職を対象とした臨床相談プログラムを新設し、対象者を通年で募集し、個別、グループ、組織のニーズに合わせたスーパービジョン、コンサルテーションを対面、オンライン、訪問により実施した。以下、2021 年までの 7 年間の活動を、拡大研修、臨床相談プログラム、その他の報告に分けて、今期での成果を以下のとおりに記す。

### <第 1 期包括的死生学研究所：研究員の専門分野と職名>

- ・医療機関（総合病院、ガン専門病院、老人保健施設、訪問看護ステーション）：MSW、看護師、臨床心理士
- ・高齢者福祉機関（在宅介護支援センター、高齢者福祉施設、デイサービスセンター）：ケアマネジャー、社会福祉士、看護師
- ・精神障害者分野（地域活動支援センター、福祉作業所、障害福祉課）：相談員、ケースワーカー、地域コーディネーター、精神保健福祉士
- ・教育分野（大学・専門学校）：教員、講師
- ・児童分野（児童相談所、教育委員会、養護施設）：スクールソーシャルワーカー、保育士
- ・その他（開業社会福祉士事務所、いのちの電話、企業他）：社会福祉士、精神保健福祉士、相談員、産業カウンセラー

### A. 拡大研修

- ① 2015 年から 2017 年：臨床死生学に関する研修を全てのプログラムの研究員に提供すべく、拡大研修会として、白井幸子先生の CCTC の枠を活用したものに特化した。また外部の対人援助職である臨床相談プログラムの登録者に参加を呼び掛けて実施した。臨床心理に関する研修ということで、多くの参加者を得て、当該コンサルテーションセ

ンターの基本的な姿勢を継続することができた。

- ② 2018 年から 2021 年：スーパービジョンのニーズに応える形で、グループスーパービジョン研修を企画研修として公開講座で展開。2018 年にモデル事業として「心理と福祉のグループスーパービジョン研修」を実施した。福祉と心理分野のスーパービジョンの違いが明確になり、その専門性を改めて学ぶ機会となった。2019 年からはソーシャルワーク・グループスーパービジョン研修として、実施。福祉の様々な分野の専門職の参加があったが、多くの現場で、スーパービジョンのニーズの多様性が明らかになった。そもそもスーパービジョンとは何かという基本的な理解不足（理論的な知識等）、経験の少ない中間管理職の部下への指導という課題、施設長というトップ管理職の組織的課題、また、地域で関係機関や多職種との連携等多義にわたるニーズがあった。交互作用を重視して、各人の課題をグループで検討する中で、的確なスーパービジョンを受ける醍醐味を感じる一方、単発で実施するために課題の未消化を残すという難しさもあった。グループスーパービジョン研修の受講者はリピーターもあり、また、合同研究報告会への参加、新規研究員登録という副次効果もあった。

## B. 臨床相談プログラムの展開

2015 年より新設されたプログラムで、一般の対人援助職や団体・組織を対象。年々対象者が増えて、個人のみならず、組織のコンサルテーションも継続して実施。センターにとっての収入源の一つとなった。

その背景には、一人職場や経験年数が 2 年未満で部下の指導を任せられ、上司からのスーパービジョンを受けることができないため、相談できる場を求めている人の存在や多職種・他機関連携の流れの中で、協働の課題と組織内外での悩みなど、多義にわたる課題が挙げられる。また一方で認定社会福祉士制度によるスーパービジョンへの要請も高まり、より専門性を求める傾向も増した。

組織・機関のニーズは福祉環境の変化に合わせて職員やスタッフの集合の講義研修から、よりテーマ性のある目的的なコンサルテーションが求められ、対象のグループや管理職の組織的なニーズにも対応し、効果を出した（別表参照）。

## C. その他の活動

- ・他機関からの依頼の受託事業や研究活動の詳細は、以下に記す。

### 2)-1 2015 年度活動（実践と効果）

#### A. 拡大研修会

臨床死生学に関する研修 講師：白井幸子先生

#### B. 臨床相談プログラム

個別スーパービジョン 2 回

組織・団体 2 か所 3 回（市民団体、臨床心理士団体）

### C. 受託事業

#### ① 練馬区社会福祉事業団受託事業訪問活動

- ・ 2015 年度練馬区社会福祉事業団施設訪問型活動 6 回
- ・ 外部委員は延べ 12 人が 6 施設に訪問し、利用者や家族との面談の後、施設職員へのコンサルテーションを行った。
- ・ 事業団報部との評価会議において、これまで 6 年に及ぶこの活動の総括を行った。
- ・ 事業団より、来年度以降も訪問活動を継続したいとの意向が出されたが、この事業の目的は十分に達成されたと考えられるため、今年度で終了した。

### D. 研究活動

#### ① 明治大学との協働研究事業「介護施設における・コミュニケーションオーダー研究」の調査研究活動

- ・ フォーカスグループインタビューと研究会：11 月 15 日
- ・ 研究会議 2 回（11 月 15 日ルーテル学院大学、1 月 31 日明治大学）

## 2)-2 2016 年度活動（実践と効果）

### A. 拡大研修会

臨床死生学に関する研修 講師：白井幸子先生

### B. 臨床相談プログラム

- ① 個別スーパービジョン 14 回
- ② 団体組織 5 か所 11 回（老人福祉施設協議会、障害者支援センター、社会福祉士会、市町村社会福祉協議会 2 か所）

### C. 研究活動

#### ① 明治大学との協働研究事業

「介護施設における・コミュニケーションオーダー研究」の調査研究活動

- ・ 日本コミュニケーション学会年次大会での発表：（2016・6・11.12）福岡関西学院大学
- ・ 研究フォーラム「介護施設における職員間コミュニケーションの『健康診断のススメ』」（2016・10・16）ルーテル学院大学 58 名参加
- ・ 研究会議 2 回：ルーテル学院大学（2016・10・16）、明治大学（2017・1・14）
- ・ 介護コミュニケーション研究会の報告書（5 年間の調査研究のまとめ）が冊子となり、センター研究員にも配布

## 2)-3 2017 年度活動（実践と効果）

### A. 拡大研修会

- ① 「交流分析による人格適応論について一親の養育スタイルが子どもの人格形成にどのような影響を与えるか」(208・2・3) 外部者 7 名参加

講師：白井幸子先生：初めて白井先生の講演を聞く機会を得てとても良かったと感想が聞かれ好評であった。

- ② 特別研修「治療者は何によって傷つき、何によって癒されるのか」

講師：白井幸子先生（合同研究報告会）

## B. 臨床相談プログラム

- ① 個別スーパービジョンの問い合わせや申請が増え、組織から継続しての依頼があつた。

- ・ 個別相談 9 名
- ・ 専門機関・団体 6 件（71 回実施）

高齢者施設連絡協議会（指導員、介護・看護他職員 60 名）、障害者相談支援センター（相談指導員 3～7 名）4 回、・地域社会福祉士会（社会福祉士 12～15 名）3 回、教育委員会（スクールソーシャルワーカー 20 名）、児童養護機関（職員 15 名）、その他（ソーシャルワーカー 3 名）3 回

## C. 研究活動

- ① 調査研究トレーニングプログラム研究員による論文発表

「日常業務におけるソーシャルワーク・スーパービジョン組織の承認と専門職としての承認」、  
日本医療社会福祉協会『医療と福祉』No. 103 vol. 51-2 2018 年 2 月 1 日発行

## 2) - 4 2018 年度活動（実践と効果）

### A. 拡大研修会

- ① 「死生学の目指すもの一望ましい死への取り組み」(2018・9・1)

参加者 16 名（研究員 7 名、外部者 9 名）

講師：白井幸子先生

トレーニングプログラムの研究員や既卒者、心理学専攻院生を含め 16 名の参加があった。トークンタイムではお茶を飲みながら、質疑応答を行い、自身の死生観について話が弾み、原点となる死生学の学びは大きかった。初めて白井先生の講演を聞く機会を得てとても良かったとも感想が聞かれ好評であった。

### B. 臨床相談プログラム

- ① 個別 SV は認定社会福祉士スーパービジョンの申し込みが増えた。組織的 SV は新規の依頼が 1 件あった。

- ・ 個別相談 14 件
- ・ 専門機関・団体 3 件

障がい者基幹相談支援センター（相談指導員 6 名）4 回

救護施設（ソーシャルワーカー 3 名）3 回

社会福祉法人（管理者 2 名）5 回

## 2)-5 2019 年度活動（実践と効果）

### A. 研修会

モデル事業としてグループスーパービジョン研修会を企画し、2 日間にわたって実施し、急な募集にも拘わらず、多くの参加者を得た。

#### ①「交流分析による心理的 GSV」スーパーバイザー白井幸子先生（2019・8・31）

参加者：12 名（心理職 4 名、福祉職 6 名、音楽療法士 2 名）

#### ②「ソーシャルワーク GSV」スーパーバイザー福山和女先生（2019・9・1）

参加者：16 名（音楽療法士 2 名、福祉職 10 名）

今回のモデル事業は現場の若手の専門職が継続的な SV を個人的に受けるような環境が厳しいと考えられるため、単発で一日研修による学びとトレーニングの場を提供することにあつた。そのため、高齢者や児童などの福祉専門機関に初めて案内状を送付して、現場の職員を研修に出していただくよう依頼した。しかし、7 月下旬の案内となり、送付先からの応募は 5 名であつた。周知の方法などの課題が残つた。

### B. 臨床相談プログラム

#### ① 個別相談 19 件、専門機関・団体 6 件

### C. 研究活動（国際）

#### ① ルーテル学院大学創立 110 周年記念事業

リトアニア・日本二か国間セミナー「社会的ケアとテクノロジー」（2019・9・28）

研究員の参加や他機関への PR，当日の受付等運営にも貢献した。

## 2)-6 2020 年活動（実践と効果）

### A. 研修会

#### ①「ソーシャルワーク・グループスーパービジョン研修会」（2021・1・24）

##### ・第 1 分科会：スーパーバイザー加藤純先生

参加者：8 名（介護福祉士、精神保健福祉士、音楽療法士他）

##### ・第 2 分科会：スーパーバイザー福山和女先生

参加者：9 名（包括支援センター相談員、MSW，ケアマネジャー、社会福祉士他）

\*両分科会参加者 2 名

年度企画は 2 回だったが、1 回（1 月）のみ実施。定員（5 名～8 名）を上回る申し込み（17 名）があつた。うち 12 名が初参加者であつた。スーパービジョンを初めて学んだという若手やベテランで、児童分野、障がい者分野、高齢者分野と多岐にわたり、スーパービジョンを必要とする専門職が多いことを再認識した。アンケートを実施した結果、満足度は 90%、こうした機会がこれからも欲しいとの意見が多数あつた。費用面では内容に比して安すぎる、安価で嬉しいという意見があつた。

### B. 臨床相談プログラム

オンラインによる SV を実施。2019 年度に終了予定だつた 16 件のうち、個人 13 名、組織 2 機関は



1年かけて終了した。

## C. 特別講演

### ① 合同研究報告会の開催オンライン（2021・3・7）

「コロナ禍で専門職に従事している人々に心理職ができることは」

講師：白井幸子先生

コロナが蔓延し、緊急事態宣言も発令される中で、保健、福祉、医療、介護等の現場で働く研究員や外部参加者15名には示唆に富んだタイムリーな課題で、そして温かなストロークの提供となった。

## 2)－7 2021年度活動（実践と効果）

### A. 研修会

#### ① テーマ別研修会（研究員合同研修会）（2021・10・9）参加者13名（外部者3名）

「対人援助者のための実践研究の進め方：実践研究の論文化をめざすための工夫」

講師：山口麻衣先生

\*研究に取り組んでいる全研究員のために論文作成に関する研修を久々に開催した。このテーマは臨床相談プログラムの参加者にも案内し、外部からは3名の参加があり、資料などが欲しいと好評であった。次年度も継続したいテーマ別研修となった。

#### ② CCTC 拡大研修会

臨床死生学に関するワークショップ「～コロナ禍における様々な変化への向き合い方について考える～変わったもの、変わらないもの～」

講師：御牧由子氏 静岡県立静岡がんセンター疾病管理センターよろず相談主幹 MSW、日本死の臨床研究会世話人

参加者：15名（研究員7名、外部参加者8名）

\*講師の工夫された内容と進め方で、熱心な参加状況となり、またワークショップで互いの意見も聞けて、とても参考になったと好評であった。活発な質疑応答となり30分ほど時間も延長した。

#### ③ ソーシャルワークグループスーパービジョン研修（4回）

・第1回「ソーシャルワーク・グループスーパービジョン研修会」（2021・6・20）

第1分科会スーパーバイザー加藤純先生 参加者8名

第2分科会：スーパーバイザー福山和女先生 参加者10名

（\*両分科会参加者7名）

対象者：訪問支援員、MSW、成年後見人、相談支援専門員、児童心理士、社会福祉士他

・第2回「ソーシャルワーク・グループスーパービジョン研修会」（2021・9・22）17名

第1分科会：スーパーバイザー加藤純先生 参加者8名

第2分科会：スーパーバイザー福山和女先生 参加者9名

(※両分科会参加者 8 名)

対象者：家庭支援専門相談員、MSW、ケアマネジャー、スクールソーシャルワーカー、社協職員他

- ・第 3 回 11 月 28 日（日）6 名申し込みあるも最小開催人数を満たせなかったため中止
- ・第 4 回「ソーシャルワーク・グループスーパービジョン研修会」（2022・1・23）

第 1 分科会：スーパーバイザー加藤純先生 参加者：4 名

第 2 分科会：スーパーバイザー 福山和女先生 参加者：4 名

(※両分科会参加者 8 名)

対象者：社会福祉士、児童指導員、ケアマネジャー、社協コーディネーター

＊評価

第 1 回、第 2 回は早々に申し込みがあり、締め切りを待たずに定員となった。全体を通じて初めて参加の方がほとんどで、2 名のリピーターがあった。コロナ禍の現場で、対人援助職の孤立や悩みの多いことがスーパービジョンへのニーズにつながったと考えられる。スーパービジョンを初めて学んだという若手からベテランまで、児童分野、障がい者分野、高齢者分野と多岐にわたり、スーパービジョンを必要とする専門職が多いことを再認識した。両分科会の参加者が多かったが、費用面で割引としたことと、日曜日の開催が良かったのではないかと考えられる。アンケートを実施した結果、満足度は 90%以上でとても満足との回答を得た。特に講師の専門性による違いを体験し、理論と実践を学べたことは大きかったと思われる。こうした機会がこれからも欲しいとの意見も多数あった。

## B. 臨床相談プログラム

希望者は通年で受け入れており、オンラインと対面で計 25 件を実施。

### ① 個別スーパービジョン 21 件（新規 14 件）118 回（118 人）

社会福祉士会の認定スーパーバイザーのための申請が 8 名、一人 6 回のコースで年間の回数が増えた。他に生活保護施設、特別支援学級、社会福祉士事務所、特別養護老人ホームなどの対人援助職。

### ② 組織・機関 4 件（新規 4 件）26 回（107 人）

高齢者福祉施設管理者 2 名（毎月）

地域社協のコーディネーターの研修 1 回に 20 名程度（3 回）

障がい者支援センター職員全員（5 名）（3 回）

救護施設職員 3 名（6 回）

#### ＜第2期包括的臨床コンサルテーションセンターの研究員の専門分野と職名＞

- ・医療機関（総合病院、がん専門病院、訪問看護ステーション、リハビリテーション病院、精神科クリニック）：MSW、精神保健福祉士、社会福祉士
- ・高齢者福祉機関（地域包括支援センター、居宅介護支援事業所、高齢者福祉施設、社会福祉事業団）：ケアマネジャー、社会福祉士、看護師、相談員
- ・精神・身体障害者分野（地域活動支援センター、福祉作業所、障害福祉課、療育センター、グループホーム）：相談員、ケースワーカー、地域コーディネーター、精神保健福祉士、ケアワーカー
- ・教育分野（大学・専門学校、教育センター）：教員、講師、スクールソーシャルワーカー
- ・児童分野（児童相談所、教育委員会、養護施設、児童発達支援センター）：スクールソーシャルワーカー、保育士、臨床心理士
- ・その他（社会福祉士事務所、社会福祉士会、行政、社会福祉協議会、権利擁護団体、企業他）：社会福祉士、精神保健福祉士、相談員、音楽療法士、園芸療法家、産業カウンセラー

## 総括

臨床死生学研究所（CCTC）から包括的臨床コンサルテーションセンターとなって、13年間の間に、総勢479名の研究員を全国から迎え、研究とトレーニングの研鑽の日々であったことをこの報告書が物語っている。事務局として、特別研究員として、また様々な研修の講師としてかかわった実績の中で、所外活動をここに記録した。この間に大きな社会変革ともいえるべき出来事が2回起こり、その度に取り組んだことは記憶とともにセンターにとって貴重な財産となった。

### A. 東日本大震災

一つは東日本大震災である。研究所が2011年3月12日、13日の2日間を予定していた2010年度合同研究報告会は前日に起こった東日本大震災のため中止され、46名の研究活動の成果を報告出来なかった。未曾有の震災の大きさに打ちのめされ、身動きの取れない虚脱な状態であったと思う。しかし、ソーシャルワーカーとしてできることはないかと臨床死生学をベースに「支援者支援」を展開、多くの被災地の対人援助職のバックアップ、サポートの活動を他機関と協働で続けた。その一端を報告書として2014年に「グリーフワークの視点に基づく援助者に対するプログラム」としてまとめた。

#### 《支援者支援こそ CCTC の役割》

人の尊厳を第一に、研究活動を行ってきた当研究所の特性を生かして、震災直後の直接的な援助ではなく、被災地における支援者＝援助の担い手である対人援助職へのサポートプログラムを展開した。3年で述べ453名、支援者（高齢者福祉、臨床心理、医療、精神保健福祉分野の専門職）を対象に24回、訪問15回の支援活動を実施した。

被災地で起こったことは、専門職がアイデンティティ、役割、生き様、他者との関わりそれぞれの価値や意義を見失った状態（グリーフ）に陥っていたということであり、直面した現実を理解するプロセスが必要であった。そのため「グリーフワーク・スーパービジョンプログラム」として、リフレクティング・チーム・アプローチ（RTA）を中心の3時間のセッションを実施。「今ここで」のグリーフワークは効果的であった。またグリー

フワーク理論（喪失・悲嘆概念）としてポーリン・ボス著『「さよなら」のない別れ別れのない「さよなら」～曖昧な喪失～』はタイムリーなテキストとなった。

また、CCTC ならではの支援者支援の活動は被災地のみならず他県でも展開した。現地に馳せ参じた支援者は全国にいて、なお取り組み続けている専門職や関係スタッフ自身が支援を求めているからである。さまざまな実践組織との協働なしには、このプログラムは実現しなかったと考えると、これからの活動にも、多くの関係機関との連携協働が欠かせない。

## B. コロナの感染による社会の変化

2019 年度はコロナ感染が社会的な大きな問題となったが、2 月 28 日(日)、ルーテル学院大学 110 年周年事業だった合同研究報告会は中止を余儀なくされた。「終結をしない援助」のように、けじめをつけられず、何かを引きずったまま次年度を迎えた。

合同研究報告会は 1 年間のトレーニング、研究の成果を研究員が一同に会して、報告し合い、お互いに議論しあう場として、年々熱のこもった報告会となっている。しかし、2020 年度以降コロナ禍での 3 年は対面のグループ研修活動はなくなり、オンラインによる開催は新規研究員には体感を伴わないものとなった。微妙な距離感の中、研究員同士の交互作用は十分とは言えなかったのではないかな。そうした制約の中で意欲的に取り組めたのは関係遮断に抗して、先生方の工夫と努力により、環境に適応する専門性がより養なわれたし、報告に結実している。また毎年関心を寄せる外部からの参加者が研究員となって、センターの一員になる道が続いている。

一方、オンライン研修はどこにいても参集できるという物理的な距離を埋めてくれ、参加の機会を拡大した。また、個々のテリトリーでの参加は安全な環境にすることで、継続することを容易にした。企画研修は一期一会ではあるが、学びの機会と出会いを提供してきた。

このさき不確実で不安定な社会状況が続くと思われるが、真摯に向き合って取り組んでいる専門職の尊厳を護り、サポートするセンターがここにあることは意義あることではないだろうか。

## 終章

### 援助者を支援する実践：人間の尊厳を守る社会の実現を目指して

山口 麻衣

#### 1 本書の目的と各章の概要

社会の変化のなかで続けられてきた対人援助実践を紐解き、本研究所・センターのこれまでの実践記録から、対人援助者自身による個々の実践と研究への貢献への気づきや、対人援助実践と研修効果を可視化することが本書の目的であった。ここでは各章の概要をまとめてみたい。

第1章（担当：福山）では、不安定な社会状況のなかで十分な保証の得られずに業務をする専門職に対するスーパービジョン（SV）体制やコンサルテーション（CON）体制の活用の効果について論じられていた。報告データの分析結果から SV や CON のニーズを可視化し、ソーシャルワーカーが直面する不安定さの質を詳細に紐解き示している。具体的には、スタッフのニーズを SV 体制の構成要素の7軸（1）主体（機能・役割）、2）業務行動プログラミング、3）発達段階モデル、4）7 実践方法とスキル・理論、5）原理・原則（姿勢）・独自性確立 6）5 領域協働体制（エコシステム）、7）トレーニング体制の稼働）で分析した結果がまとめられている。さらに、システムの内在者と外在者の観点からどちらのシステムが付加を与えているかという点からも分析している。環境の中の一員としてスタッフが職場内外で様々に工夫をしていることが、専門家であることの証明であり、SV や CON の活用を通して専門職としての成長を目指して取り組んでいるさまであると論じている。また、スーパーバイザーとスーパーバイジーの両方のニーズを把握したうえで対応するスーパースーパーバイザー（スーパーバイザーのスーパーバイザー）の必要性を示している。対人援助の専門職が直面する不安定さの質を分析し、そのような困難な状況のなかで工夫しながら実践していることを明確化している。また、職場内外の環境のなかで専門職が専門職として成長を目指す際の、「スーパースーパーバイザー」としての SV や CON を行う専門職の重要性やセンターの研修を通じた支援者支援の機能の意義が再確認できた。

第2章（担当：白井）では、日本が直面している困難は社会問題や経済問題にとどまらず、精神や心理の領域に深刻な影を落していることを示したうえで、格差社会に生きる人々の格差をやわらげ、ともに耐えて生きたいと願う人々を助け、閉ざされたように見える社会に希望を見出すために、人々と共に、その先頭に立って歩むのが社会福祉に関わる人々の一つの姿であることが論じられていた。さらに、交流分析の知見から、助けを必要としている人々に対する援助は、物質的、経済的、法的、知的であると同時に精神的、心理的である必要があり、精神的、心理的援助の中で用いられるひとつの技法としてストロークについて説明している。ストロークの背景には人は誰でも幸いを求めている尊い存在であるという認識と、他人に対する暖かい共感があり、無条件のストロークとは、相手の存在そのものを肯定し、認め、ほめることであると説明している。社会福祉従事者が日々直面する様々な困難を突破して、多くの助けを実現するために、ストロークの技法を用い、社会資源を活用して人々を社会的、経済的に助け、精神的、心理的にも支え、自らも現代に生きる希望をもって、人々と共に歩まねばならないとまとめ

ている。本章は、ストロークを手掛かりに、社会福祉従事者が困難に直面する人の存在そのものを肯定し、支援者自身も希望をもって、人々と共に歩む大切さについて示している。共に歩むためにどうしたら十分に支援できるかということばかりに気持ちが向かいがちだが、共生の前提として支援者自身も希望をもつことの大切さが重要なことがわかる。

第3章（担当：加藤）では、報告者の感じる疑問を、1) スーパービジョンを実施できているかという疑問、2) どのようなスーパービジョンを実施しているかという疑問、3) 周囲がスーパービジョンを認識しているかという疑問、4) スーパービジョンの効果に関する疑問に整理したうえで、どのような点に着目して研究してきたか丁寧に分析していた。第一の自分がスーパービジョンを実施できているかという疑問については、疑問も答えも実践の中に隠されていること、スーパービジョンという概念と実践を中間的な抽象度で結び付ける必要があること、疑問の細分化が有用であり、その方法の一つが概念を細分化することであることを論じている。第二の自分はどのようなスーパービジョンを実施しているかという疑問に対しては、実践を具体的に描写すること、役割として描写することの大切さが説かれていた。第三の周囲がスーパービジョンを認識しているかという疑問については、スーパービジョンの概念の細分化や具体化することにより、後輩などの周囲の認識状況を理解できるとまとめている。第四のスーパービジョンの効果に関する疑問については、自分の実践が現場にもたらしている効果をロジックモデルや他の創意工夫した方法で明らかにすることが役に立つとまとめている。対人援助者が日々感じる疑問の内容を明確にし、それぞれの疑問への対処について、参加者の研究例を多数示しながら、具体的に疑問への対処方法についてわかりやすくまとめられていた。また、報告書という個別の成果のみならず、参加者同士の共同作業が大切な成果であることも示されている。共に学びあうことで、疑問を語り、疑問への対処について概念やモデルに照らして対応していることが伺える。

第4章（担当：山口）では、対人援助実践の研究方法に焦点をあててまとめている。複雑化・多様化する研究方法をめぐる論点として、1) EBP と NBP のせめぎ合い、2) 実践研究への関心の高まりと実践-調査者による PBR の重要性、3) 研究デザインと研究方法の多様化と複雑化、4) 調査・研究や評価のコンピテンスの向上にむけた対人援助者の教育の動向の4点を挙げ、実践者の困難には、実践への対応の困難とそれを可視化するための方法の活用の困難の二つの困難が見えにくい形で交絡していると指摘している。対人援助者が実践をどのように紐解こうとしているのか、報告書の内容をもとに分析し、「手探りの中で探索する」、「文献から鍵概念に出会う」、「確かめて記述する」、「日々の実践を振り返る」、「理論や概念に照らして分析する」、「構成要素や構造を可視化する」、「実践の効果を探求する」、「実践を数値で把握する」、「研修の成果を自己評価する」として整理されていた。さらに、対人援助における実践・評価・調査を連続体であり表裏一体なものとして捉え直すことの重要性、学びあいながら揺らぎに気づき、模索する営みの重要性、よい問いにたどり着くという問題の明確化のプロセスの重要性、対人援助者のリサーチ・リタラシー向上の重要性、実践へのインプリケーションの大切さが論点として示された。また、新たな挑戦としてテクノロジーの実践と研究への影響を示し、人間の尊厳・いのちや人権の擁護を重視した広義の臨床死生学的なアプローチや研究とスーパービジョン/コンサルテーション研究などの対人援助実践研究が共鳴し

ながら発展していくことが求められるとまとめている。

第5章（担当：照井）では、包括的臨床死生学研究所から包括的臨床コンサルテーションセンターとなった13年間の臨床実践についてまとめられていた。包括的臨床死生学研究所として対応した第1期（2009年～2014年）は、特別研修、協働実践、研究活動、受託事業、被災地支援に大別して年度別に記述されていた。包括的臨床コンサルテーションセンターとして対応した第2期（2015年～2021年）は、拡大研修、臨床相談プログラム、その他の報告に分けて示されていた。通常の研修プログラムのほかに、これらの多様な形態での臨床実践や実践研究、特別研修などが実施され、外部の人に関わられた場として学び合いの機会を提供してきたことや、様々な組織にあったプログラムを開発し、他の機関と連携しながら多くの臨床実践がなされてきたことが伺えた。また、この間に東日本大震災とコロナの感染による社会の変化という大きな社会変革が起こり、その度に支援者支援に取り組んだことがセンターにとって貴重な財産となったと記している。東日本大震災の際には、臨床死生学をベースにした支援者支援を展開し、多くの被災地の対人援助職のバックアップとサポート活動を他機関との協働により実践した。コロナの感染による社会の変化への対応としては、対面での研修が困難ななか、オンライン研修の利点も活用しながら工夫した実践により、環境に適応する専門性がより養われたと記していた。この先不確実で不安定な社会状況が続くと思われるが、真摯に向き合っている専門職の尊厳を護り、サポートするセンターがここにあることは意義あることではないだろうかとまとめている。

## 2. 援助者を支援する実践の意義を再確認する

このように本書は、包括的臨床死生学に基づく命や生きることへの学びや、スーパービジョンやコンサルテーションに関する学びを深めるために本センターが長年行ってきた研修や実践を振り返り、担当した講師がソーシャルワークや心理学のそれぞれの専門領域の視点から、参加者報告や臨床実践内容を丁寧に読み解いてまとめたものである。別の表現をすれば、実践現場で孤軍奮闘するソーシャルワーカーなどの対人援助者やスーパーバイザーをバックアップするために模索してきた実践の効果や研修成果を改めて整理した内容となっている。

アプローチや焦点化したテーマは異なるものの、本書全体を通じて、不安定な社会情勢のもと支援が必要な人のみならず支える専門職も困難に直面したとしても、人の尊厳を守るという理念と価値観をもち、専門職自身も尊厳と希望をもつことの大切さと、専門職の成長を見守り支えることの必要性を伝えている。

本書では全報告を詳細に示すことはできず十分に分析できていない面もあるかもしれない。また、研究会の報告書という特徴のあるデータであるということの限界もある。そのような限界や伝えられることの限定性はあるものの、多様な側面から対人援助実践を紐解いたことによって、スーパービジョン体制の存在や意義が見えにくく、自らの実践に自信を見失いがちな対人援助者が、実践で感じた疑問に対峙しながら学び合い、自らの実践の貢献や専門職としての成長を自覚し、援助者を支援する実践の意義を再確認することのきっかけを示せたのではないかと考えている。

長く続いた新型コロナへの対応が変化したものの、また蔓延する懸念も残るな

か、自然災害や戦争による被害で多くの人々の日々の生活が失われ、人としての尊厳が脅かされている状況は今もなお続いている。人間の尊厳を守る社会の実現を目指すためにも、援助者を支援する実践をより効果的に実施していくことがこれからの引き続きの課題ともいえる。



## 臨床相談プログラム実績（2015 年～2022 年）

年	総数	個別 SV	職種	組織・機関	対象機関
2015	56 人	2 件	MSW	2 件/3 回	市民団体、臨床心理士関係機関
2016	7 件/25 回 (194 名)	2 件/14 回	MSW、ケアマネジャー	5 件/11 回	老人福祉施設協議会、障がい者相談支援センター、社会福祉士会、市町村社会福祉協議会
2017	15 件/69 回 (152 名)	9 件/53 回	MSW、ケアマネジャー、指導員、ケアワーカー、社会福祉士	6 件/14 回	老人福祉施設協議会、障がい者相談支援センター、社会福祉士会、スクールソーシャルワーカー協会、児童養護機関、救護施設
2018	17 件/94 回 (114 名)	14 件/82 回	MSW、ケアマネジャー、ケアワーカー、相談員、社会福祉士、児童福祉士	3 件/12 回	救護施設、社会福祉法人（高齢者、障害者の総合機関）障がい者支援センター
2019	25 件/84 回 (157 名)	19 件/63 回	MSW、ケアマネジャー、社会福祉士、大学教員、他	6 件/21 回	救養護施設、社会福祉法人（高齢者、障害者の総合機関）障がい者支援センター、総合病院、地域包括支援センター
2020	29 件/117 回 (210 名)	23 件/96 回	MSW、ケアマネジャー、社会福祉士、スクールソーシャルワーカー、相談員、他	6 件/22 回	児童養護施設、社会福祉法人（高齢者、障害者の総合機関）障がい者支援センター、救護施設、社会福祉協議会、総合病院
2021	25 件/144 回 (225 名)	21 件/118 回	MSW、社会福祉士、ケアマネジャー、高齢者施設相談員、ケアワーカー、他	4 件/26 回 (107 人)	高齢者福祉施設管理者 2 名（毎月）、障がい者支援センター職員全員 5 名（3 回）、救護施設職員 3 名（6 回）、地域社協のコーディネーターの研修 1 回に 20 名程度（3 回）
2022	21 件/106 回 (126 名)	18 件/93 回	MSW、社会福祉士、児童指導員、ケアマネジャー、指導員、他	3 件/13 回 (33 人)	障がい者支援センター、救護施設、地域社会福祉協議会

# 報告一覧

	報告者	年度	タイトル	頁 注)
1	宮下有希	2010	社会福祉援助技術演習の授業方法における学生間のかかわりの関連性について	—
2	下ノ本直美	2010	在宅看取りケアを行う際にケアマネジャーが抱える困難の質について	—
3	梨本しげみ	2010	介護支援専門員に対する看取り準備教育—看取りに焦点をあてて—	—
4	河島京美	2010	精神障害者が安心して暮らせる地域・まちづくりに必要不可欠な要素とは～N区西部地区におけるインタビュー調査から見えるもの～	—
5	三澤真理	2010	老人保健施設の支援相談員のアセスメントに含まれるターミナルケアの視点について	—
6	井上貴詞	2010	介護支援専門員に求められる実践能力の一要素として自己統制の検討	—
7	池田紀子	2010	児童虐待防止法・DV防止法の審議における母親の意味づけについて	—
8	渡邊淳子	2010	地域活動支援センターでの相談支援事業における、相談支援技術の一考察	—
9	三澤弥生	2010	在宅でのターミナルケアにおける介護支援専門員の役割について	—
10	山本琢也	2010	MSWによる慢性疼痛を抱える高齢者への心理社会的側面への介入に関する研究	—
11	網谷道穂	2010	重症心身障害児のいのちの尊厳について—家族の中に見出すスピリチュアリティの側面から—	—
12	西田純子	2010	無料低額診療事業ハンドブック（人身売買被害者及び在日難民編）作成に関する研究	—
13	福貴郷	2010	精神科クリニックにおけるソーシャルワーク支援の有用性についての一考察	—
14	大野美智子	2010	支援相談員業務マニュアル作成の試み—介護老人保健施設における日常業務に焦点をあてて—	—
15	大橋英理	2010	がん電話相談機関の運営体制に関する研究—我が国における電話相談全体を一つのシステムとして捉える視点からの一考察—	—
16	篠田聖子	2010	医療・保健・福祉における多職種協働の中でソーシャルワーカーは独自性をどう生かせるのか	—
17	鈴木四季	2010	専門職成年後見人等の身上監護における実務上の課題について—制度施行10年を経て—	—
18	瀧澤理絵	2010	統合失調症の社会機能障害に関する一考察	—
19	萬歳芙美子	2010	ドロシー・デッソーのインターク面接記録に基づく理論構築—ソーシャルワーカーの独自性を活用する観察基盤モデル—	—
20	榊原次郎	2010	医療機関におけるソーシャルワーク部門の組織的社会化とスーパービジョン体制との関係性について	—
21	藤井薫	2010	福祉現場におけるコア人材育成の視座～一般職クラス・コア人材クラスが抱く組織コミットメントと役割期待を活用して～	—
22	佐藤弓子	2010	家族独自の特徴ある関係性と取り組みを、ソーシャルワークの支援に活用する方法を検討する	—
23	竹家博子	2010	地域における子どもを虐待した母親へのアフターケアに関する一考察～児童相談所を中心とした虐待者対応に焦点をあてて～	—
24	前廣美保	2010	ソーシャルワークにおける援助者側の「自己開示」の活用	—
25	塩田哲也	2010	保健・医療・福祉の協働場面におけるソーシャルワーク支援の意義～グループワーク技能にもとづくソーシャルワーク支援の検証～	—
26	浜本京子	2010	医療チームの中での病院チャプレンの機能とその援助の特徴～医療チームにおける病院チャプレンの介入モデルの一考察～	—
27	廣野有美	2010	介護職者のグリーフワーク～ピアサポートに焦点をあてて～	—
28	石橋明希	2010	大学病院におけるがん終末期患者家族の療養場所選択に対する医療ソーシャルワーカーの支援とは	—

29	清重哲男	2010	自己実現概念の構築に関する研究－ 人間の永遠性から把握する自己実現概念の構築－	—
30	乙幡美佐江	2010	地域における高齢者虐待防止策の構図	—
31	柳原清子 佐藤繭美 金子絵理乃 御牧由子 照井秀子	2010	高齢者施設における終末期ケアでのトータルマネジメント技法の 開発－利用者および家族の意思決定支援に焦点を当てて－	—
32	梨本しげみ	2011	介護支援専門員による看取り支援に対する準備教育の必要性－イン タビュー調査から－	—
33	三澤真理	2011	老人保健施設の支援相談員のアセスメントに含まれるターミナル ケアの視点について	—
34	井上貴詞	2011	介護支援専門員の実践能力についての研究－要素として自己統制 の検討－	—
35	池田紀子	2011	児童虐待防止法・DV防止法の審議における母親の意味づけにつ いて	—
36	三田真外	2011	介護サービスにおける専門職の記録業務の枠組み～介護保険制度 に規定される指定基準の考察～	—
37	西脇愛	2011	ケアワーカーとして児童養護施設の子ども・家族に関わる社会福 祉士の支援についての考察	—
38	山本琢也	2011	MSWによる慢性疼痛を抱える患者・家族への介入に関する研究	—
39	網谷道穂	2011	重症心身障害児の生命（いのち）について－家族の中に見出すス ピリチュアリティの側面から－	—
40	西田純子	2011	無料低額診療事業ハンドブック（在日難民編）作成に関する研究	—
41	下ノ本直美	2011	在宅看取りケアを行う際にケアマネジャーが抱える困難の質につ いて	—
42	大橋英理	2011	がん診療連携拠点病院におけるソシオ・バイオ・サイコ側面から の支援機能ががん患者・家族支援体制に及ぼす影響について	—
43	鈴木四季	2011	専門職成年後見人等の身上監護における実務上の課題について－ 制度施行10年を経て－	—
44	萬歳芙美子	2011	インテーク面接のトレーニングプログラム－ 観察基盤アプローチに基づく専門性のトレーニング－	—
45	瀧澤理絵	2011	大学学生相談室において臨床心理士のできること	—
46	遠山由香里	2011	コメディカル医療従事者の喪失体験からの回復過程－セルフグリー フケアとレジリエンスの視点での一考察－	—
47	斎藤弘昭	2011	第三者評価事業におけるプロセス評価試案	—
48	榊原次郎	2011	医療機関におけるソーシャルワーク組織の社会化とスーパービジ ョン体制との関係性	—
49	佐藤弓子	2011	F市近隣の独自の取り組みや、人々の関係性について、ありようや 実態を明らかにする	—
50	竹家博子 渡邊隆文	2011	スクールソーシャルワークにおける機関間連携・協働の課題	—
51	高橋徹	2011	認知症高齢者の介護に直面する家族への情報提供について	—
52	平澤一郎	2011	保育科学生が地域子育て支援センターでのボランティアに参加す ることによる体験や学び	—
53	塩田哲也	2011	保健・医療・福祉の多職種と利用者本人や家族との協働体制の構 築	—
54	浜本京子	2011	医療チームの中での病院チャプレンの機能とその援助の特徴～一 般病棟の終末期患者への医療スタッフ及びチャプレンの取り組み の報告～	—
55	廣野有美	2011	介護職者のグリーフワーク～ピアサポートに焦点をあてて	—
56	三澤弥生	2011	在宅ターミナルケアにおける介護支援専門員の役割について	—
57	清重哲男	2011	宗教的超越性の視点からの自己実現概念の再度構築に関する研究 －古代インド仏教思想の自己実現概念－	—
58	前廣美保	2011	ソーシャルワークにおける援助者側の自己開示の活用	—
59	山田美代子	2011	災害支援活動における「曖昧な喪失」の概念適用	—
60	秋山信悟	2011	社会福祉分野における組織活動の活性化－人材育成／確保の観点 からの考察－	—

61	石井三智子	2011	「被爆者の拠り所とするものは何か」～ヒロシマからフクシマに至る問い～	—
2012年度実践報告会報告書				
62	梨本しげみ	2012	介護支援専門員の看取り対応マニュアルの提案～看取り支援の特性を活かして～	9—13
63	三澤真理	2012	老人保健施設の支援相談員のアセスメントに含まれるターミナルケアの視点について～介護老人保健施設こうのとりの	14
64	三田真外	2012	介護サービスにおける記録の妥当性の検討～客観性の概念モデルの視点から～	15—17
65	藤原泰	2012	エンド・オブ・ライフケアにおける相談援助職者の支援について～生きてきた証を継承する支援～	18—20
66	山本琢也	2012	慢性疼痛を抱える高齢者への心理社会的側面への介入に関する研究	21—23
67	西田純子	2012	無料低額診療事業ハンドブック（在日難民編）作成に関する研究	24—26
68	瀧澤理絵	2012	学生相談活動における臨床心理士の専門性（独自性）	27—29
69	野口百香	2012	医療機関におけるソーシャルワーカー部門の体制や規模に関する文献研究—組織の管理運営の視点から—	30—32
70	下ノ本直美	2012	看取りケアを行う際にケアマネジャーの抱える困難の質	33—35
71	萬歳芙美子	2012	初回面接における家族評価（アセスメント）の最適化に向けて～家族システムズ論の視点から～	36—39
72	齋藤弘昭	2012	ターミナル期における成年後見ソーシャルワーカーのクライアント認知の変化	40—41
73	佐藤弓子	2012	F市における独居高齢者と介護支援専門員の経験知に関する研究	42—45
74	塩田哲也	2012	保健・医療・福祉の多職種と利用者本人や家族との協働体制の構築～医療ソーシャルワークの基盤構築に向けて～	46—48
75	廣野有美	2012	介護職者のグリーンワーク～ピアサポートに焦点をあてて～	49—51
76	清重哲男	2012	WHO国際生活機能分類（ICF）を活用した自己実現概念の再構築の研究—ICFの構成要素（参加と活動など）に基づく自己実現概念の再構築—	52—54
77	前廣美保	2012	ソーシャルワークにおける援助者側の自己開示の活用	55—57
78	秋山信悟	2012	社会福祉分野における人材育成・定着の現状と課題—介護職員の意識調査からの考察—	58
79	石井三智子	2012	被ばく者が拠り所とするものは何か」（Ⅱ）～ヒロシマから福島に至る問い～	59—61
80	大曲睦恵	2012	CTTPプログラムに参加して学んだこと	62—64
81	品田雄市	2012	がん相談支援センターにおけるソーシャルワーク特性—あるがん相談場面におけるグリーンワークの構造分析から—	65—67
82	小川里花	2012	ターミナルケアとグリーンワーク—「尊厳」を見る目—「尊厳感情」を回復・保持する関わり—	68—70
83	横田雪花里	2012	子どもの死生学教育の重要性和課題	71—73
84	小倉典子	2012	筋萎縮性側索硬化症患者が人工呼吸器を装着する可否かを決断した要因と家族の葛藤	74—75
85	赤畑淳	2012	聴覚障害と精神障害を併せ持つ人への支援行為における対象者理解のプロセス	76—80
86	御牧由子	2012	災害支援活動における支援者支援の取り組み	81—84
2013年度実践報告会報告書				
87	三田真外	2013	介護サービスの提供記録の妥当性を測る尺度開発案の検討	1—3
88	藤原泰	2013	エンド・オブ・ライフプラクティスにおけるソーシャルワーカーの役割について～生きてきた「証」の継承を支援すること～	4—6
89	永沼加代子	2013	DVによりPTSDを患った当事者理解と「あいまいな喪失」	7—9
90	杉山美幸	2013	看取られる場所で人の逝き方は影響をうけるのか	10—12
91	深澤信枝	2013	学校でチーム支援を具体化する問題解決型ケース会議—子どもの強みに着目して関わる者が協働するために—	13—15
92	中越陽子	2013	医療ソーシャルワーカーの専門性から独自性を見出す	16—18
93	越智彰子	2013	相談支援の職務上生じる疲労感について	19—20

94	萬歳芙美子	2013	デッソー理論に基づく初回面接の目的について	21-24
95	大倉美成子	2013	滞日外国人支援におけるソーシャルワーカーの役割とその有用性	25-26
96	安藝聖衣子	2013	高度救命救急センターにおける転院支援スクリーニングシートを使ったMSW介入の現状について	27
97	池田紀子	2013	「児童虐待防止法」及び「DV防止法」の制定過程における福祉施策の代弁者機能について－被害者及び加害者への意味づけの分析を通して	28-29
98	佐藤弓子	2013	独居高齢者の経験知に関する研究	31-32
99	野口百香	2013	診療報酬制度に規定された『退院困難な要因を有する者』を抽出する 項目のスクリーニングの実施とMSWの介入状況に関する調査	33-35
100	野田京	2013	湯灌と悲嘆作業の関係性について－家族の属性からの一考察	36-39
101	鈴木四季	2013	専門職成年後見人等の身上監護に関連する諸問題について — ソーシャルワークアプローチの有用性についての一考察 —	40-41
102	福嶋美奈子	2013	高齢者介護施設における対人援助職員の育成方策～誰もが安心して暮らせる地域づくりに果す高齢者介護施設の役割～	42-44
103	清重哲男	2013	ジョン・ロールズの正義論と自己実現概念の関連性の研究	45-47
104	石井三智子	2013	被ばく者が拠り所とするものは何か（Ⅲ）（2011.10～2014.3）～ヒロシマから福島に至る問い～	48-50
105	大賀有記	2013	医療ソーシャルワーカーの役割喪失にともなう悲嘆作業を考える－役割の変化への取り組み過程についての理論的検討－	51-53
2014年度実践報告会報告書				
106	三田真外	2014	介護サービスの提供記録の妥当性を測る尺度案の検討 アンケート調査に向けて	5-8
107	永沼加代子	2014	DV当事者の「喪失」の検討～対象喪失とあいまいな喪失～	9-13
108	池田紀子	2014	児童虐待の支援体制構築に影響を与えた社会的価値観とソーシャルワーク視点の交互作用について－児童虐待防止法制定過程における母親の意味づけを通じた考察	13-26
109	福地尚子	2014	対人援助職を支えるスーパービジョン～スーパービジョンの業務位置づけがない職場と同質性スーパービジョン制度がある職場の聞き取り調査から～	27-31
110	佐藤弓子	2014	F市在住の独居高齢者と担当ケアマネジャーの相互会話の内容に関する研究	32-43
111	小高康正	2014	「デス・エデュケーション」（死の教育）を考える	44-48
112	金井美香	2014	透析者のおかれている状況の変化－MSWの立場から－	49-51
113	清重哲男	2014	包括的自己実現概念の創設 研究1－カントの自律、ヘーゲルの社会化、諸外国への自己実現概念の今日的広がり－	52-61
114	大賀有記 森朋子	2014	独居がん患者の在宅看取りにおけるコンテキスト 文献レビューから	62-69
115	古寺久仁子	2014	障害児の「親の障害受容」は本当にあるのか－先行研究の検討から	71-79
116	大川満里子	2014	ホスピス・緩和ケアにおける「患者の気持ちに寄り添う」ことについての一考察	80-82
117	鵜沢和子	2014	ファシリテーター養成講座に参加して－講座の目指すもの－	83-91
118	杉山美幸	2014	住む地域で人の逝き方は影響をうけるのか	92-98
119	鈴木四季	2014	専門職成年後見人等の身上監護に配慮した支援付き意思決定について — ソーシャルワークアプローチの有用性についての一考察 —	99-100
120	高橋幸枝	2014	自助グループ形成過程における当事者の主体性と専門職の専門性とは何か～当事者性を奪わない支援の在り方～	101-104
121	田口寛子	2014	親やきょうだいを亡くした子どもに対する教職員の関わりに関する研究～子ども時代に死別を体験した若者の振り返り調査から～	105-107
122	中越陽子	2014	医療ソーシャルワーカーの専門性から独自性を見出す	108-112
123	野口百香	2014	潜在的ニーズを有する患者への退院支援を「予防的アプローチ」の視点から考える	113-116

124	萬歳芙美子	2014	初回面接に基づくスーパービジョンの構造と意義ースーパービジョンの課題と組織的体制の構造化についてー	117-124
125	廣野有美	2014	介護職者のグリーンワーク～ピアサポートに焦点をあてて～	125-126
126	福島美奈子	2014	高齢者介護施設における対人援助職の育成方策～誰もが安心して暮らせる地域づくりに果たす高齢者介護施設の役割～	127-128
2015年度実践報告会報告書				
127	赤畑淳 古寺久仁子 品田雄市 鈴木あおい	2015	ソーシャルワークのスーパービジョンをめぐる日本の現状や課題に関する探索的・予備的研究ーソーシャルワーカーを対象としたフォーカスグループインタビューにおける語り	2-5
128	萬歳芙美子 佐藤弓子	2015	トレーニングシステムにおけるロールプレイング・プロセスにみるトレー ー間の現象分析ー理論展開に及ぼす影響の考察ー	6-13
129	斧由紀子	2015	ソーシャルワークの専門性を活かした研修型コンサルテーションーFKモデルを使ったカンファレンス演習ー	14-23
130	御牧由子	2015	がん医療における緩和ケアチームによるコンサルテーションについて	24-27
131	宮川恵子	2015	一般病棟における緩和ケアチームによるコンサルテーション上の困難性と、そこでのソーシャルワーカーの関わりについて	28-33
132	高山由美子	2015	コンサルテーションプログラムを受講して	34-36
133	山田美代子	2015	コンサルテーション契約の前提条件の考察	37-39
134	大川満里子	2015	教育センターでの活動をスーパーバイザーとして考えるーケースカンファレンスや勉強会を通して何を学んだかー	40-41
135	河野敦子	2015	スーパービジョンとコンサルテーションの機能と内容に基づく業務	42-44
136	篠田聖子	2015	ソーシャルワークの職場内スーパービジョンにおける構造とパイジの視座についてースーパービジョン実践の振り返りからー	45-47
137	野口百香	2015	SVTPに参加して学んだこと、分かったこと、感じたこと	48-49
138	井上貴詞	2015	スーパービジョントレーニングプログラム報告	50-51
139	畑中眞優子	2015	CTTPに参加して学んだこと	52-54
140	福島美奈子	2015	高齢者介護施設における対人援助職員の育成方策～誰もが安心して暮らせる地域づくりに果たす高齢者介護施設の役割～	55-56
141	土山緑	2015	医療ソーシャルワークのスーパービジョンにおける喪失概念の援用について～職場内事例検討の試みから～	57-61
142	小高康正	2015	死生観の危機とデス・エデュケーション	62
143	清重哲男	2015	包括的自己実現概念のまとめと結論その1ー15年間の自己実現研究からの総括的自己実現概念の共通基盤の構築ー	63-65
2016年度実践報告会報告書				
144	藤井薫	2016	公益的取組「認定就労訓練事業」における当事者の変化とそれに影響を与える事業所スタッフとのかわりについて	4-6
145	鈴木四季	2016	専門職成年後見人等の身上監護に配慮した支援付き意思決定についてー ソーシャルワークアプローチの有用性についての一考察ー	7-9
146	福島美奈子	2016	高齢者介護施設における対人援助職員の育成方策～誰もが安心して暮らせる地域づくりに果たす高齢者介護施設の役割～ 4 年次	10-11
147	池田紀子	2016	コンサルテーションを受けたことの効果ー実践と研究を行き来する思考の言語化ー	12-13
148	田中典子	2016	コンサルテーションを受けたことの成果	14
149	清重哲男	2016	自己実現概念の具体的生活場面への適用ーコンサルテーションを取り入れた自己実現概念の生活場面への適用ー	15
150	齋藤弘昭	2016	社会人が大学院を卒業して研究を続けることの過程に関する考察	16-18
151	小川智子	2016	GCTCでの学びを振り返って：問いを深化させることの意味	19-21
152	久我由美子	2016	コンサルテーションを受けたことの成果	22-23
153	中越陽子	2016	退院支援開始時期と入院期間の相関関係・介入に適した時期について	24-32
154	小桑亜紀	2016	SVとCONがもたらす効果	33
155	崔誠樹	2016	スーパービジョンがもたらす効果	34-37
156	宮内美季	2016	スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果	38-40

157	増村喜久子	2016	組織内のスーパービジョン体制の構築に向けて～組織管理の中での教育的スーパービジョン～	41-43
158	吉田千代	2016	実践を通して、教育的スーパービジョンの振り返りスーパービジョンの確認作業から「自分にもたらした効果」について	44-48
159	宇佐美宏美	2016	『コンサルテーションがもたらす効果』について—コンサルテーション・プログラムを受講して—	49-51
160	斧由紀子	2016	スーパービジョン(SV)とコンサルテーション(CON)のもたらす効果について一家族会が立ち上げたNPO法人の活動を地域で支えるために	52-59
161	河野敦子	2016	「対応困難ケースを担当するケアマネジャーに対するコンサルテーションの成果」	60-62
162	河島京美	2016	コンサルテーションを受けたことの成果	63-65
163	菅井夏子	2016	コンサルテーションがもたらす効果	66-68
164	梨本しげみ	2016	コンサルテーション・プログラムを受講して学んだこと、気づいたこと～対人援助職の専門性に焦点をあてて～	69-71
165	八谷弘文	2016	地域ケア会議におけるコンサルテーションについての一考察	72-74
166	春山陽子	2016	SVとCONがもたらす効果	75-76
167	宮川恵子	2016	コンサルテーションがもたらす効果	77-80
168	山下尚郎	2016	包括的臨床コンサルテーションがもたらす効果	81-82
169	山田美代子	2016	スーパービジョンとコンサルテーションの構成要素の比較による考察	83-86
170	鈴木あおい 品田雄市 古寺久仁子	2016	調査・研究トレーニングプログラム研究員報告「日常業務におけるソーシャルワーク・スーパービジョン—組織の承認と専門職としての自己承認」	87-90
171	萬歳芙美子 御牧由子 佐藤弓子 野口百香	2016	上級トレーニングプログラム研究員報告	91-96
172	萬歳芙美子	2016	コンサルテーションからみたスーパービジョンの今日的課題—業務の複雑性をめぐって—	97-104
2017年度実践報告会報告書				
173	田中典子	2017	CCTC 研究内容について	9
174	土山緑	2017	ソーシャルワーク支援にもたらすMSWのグループ・スーパービジョン効果	10-14
175	福嶋美奈子	2017	高齢者介護施設における対人援助職員の育成方策～職員間のトラブル解消と連携方策～	15-16
176	鈴木四季	2017	専門職成年後見人の身上監護に配慮した支援付き意思決定について—実践に基づくソーシャルワークアプローチの有用性についての考察—	17-21
177	小川智子	2017	学生の成長を考えるための方策	22-24
178	野坂洋子	2017	CCTC ドメスティック・バイオレンス関連法に基づく担当支援者による被害者への二次加害防止策の構築	25-27
179	宇佐美宏美	2017	コンサルテーションのもたらす効果	28-30
180	吉田千代	2017	コンサルテーションのもたらす効果—学校でのコンサルテーションの実践を振り返る—	31-33
181	山下尚郎	2017	包括的臨床コンサルテーションがもたらす成果	34-35
182	菅井夏子	2017	コンサルテーションがもたらす効果	36-38
183	石橋明希	2017	コンサルテーションの効果をだすために～専門職として自律すること～	39-41
184	渡邊淳子	2017	コンサルテーションがもたらす効果	42-44
185	八谷弘文	2017	組織に対するコンサルテーションの取り組みがもたらす効果についての一考察	45-47
186	河野敦子	2017	スーパービジョンとコンサルテーションの理論に基づく業務分類の試み(その2)	48-51
187	下山桃子	2017	スーパービジョンがもたらす意識の変化について	52-54
188	佐藤裕子	2017	音楽療法スーパービジョンについての考察～スーパービジョントレーニングプログラムを受講して～	55-58

189	宮川恵子	2017	一般医療機関におけるコンサルテーション導入の意義	59-61
190	小川康男	2017	SVとCONがもたらす効果～スーパービジョントレーニングを受講して～	62-63
191	鈴木麻紀	2017	スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす成果	64-65
192	佐藤弓子	2017	職場内スーパービジョンの難しさと共通プログラム活用の意義について	66-70
193	野口百香	2017	2年間の「上級プログラム」の振り返りと成果	71-73
194	萬歳美美子	2017	スーパーバイザーの代位責任についての考察ースーパービジョン関係過程における役割遂行の観点からー	74-79
195	御牧由子	2017	コンサルテーション・スーパービジョン指導者養成「スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果」	80-83
196	古寺久仁子 品田雄市 鈴木あおい	2017	スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果	84-87
197	崔誠樹	2017	コンサルテーションがもたらす効果	88-92
198	大倉美成子	2017	(特別寄稿) JICA日系社会シニアボランティア	93-94
2018年度実践報告会報告書				
199	深澤信枝	2018	人の尊厳に着目したワンストップ支援 スタッフの多様な専門領域を活用するスーパービジョン	1-4
200	寺井薫	2018	子どもの主体性を支える保育方法の可能性を探るーカウンセリングの視点を応用した保育実践の検証を通じてー	5-6
201	池田紀子	2018	Thresholdの概念を用いた判断基準の定義について	7-9
202	鈴木四季	2018	専門職成年後見人による成年被後見人等への意思決定支援についてー実践に基づくソーシャルワークアプローチの有用性についての考察ー	10-15
203	菅井夏子	2018	障害福祉ソーシャルワーカーの育成・確保とコンサルテーションがもたらす効果	16-18
204	石橋明希	2018	医療機関におけるソーシャルワーク実践とコンサルテーションとの関連	19-21
205	山下尚郎	2018	システム中心のコンサルテーションがもたらす効果～個人の尊厳の保持と財政回復の動向に焦点をあてて～	22-24
206	河野敦子	2018	コンサルテーションがもたらす効果	25-26
207	鈴木麻紀	2018	SV と CON がもたらす効果	27-28
208	佐藤裕子	2018	音楽療法スーパービジョンについてのー考察～アンケート調査から～	29-32
209	池田繭子	2018	スーパービジョントレーニング・プログラム：スーパービジョンがもたらす効果	33-36
210	宮川恵子	2018	スーパービジョンがもたらす効果	37-40
211	中越陽子	2018	SVTP 参加の振り返り	41-43
212	原祐佳里	2018	スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果	44-46
213	米澤直美	2018	多職種協働におけるスーパービジョンの効果	47-50
214	伊東みなみ	2018	スーパーバイザーとしての限界と挑戦～実践から見てきたこと～	51-53
215	小柳玲子	2018	音楽療法士の職業的成長に向けてスーパービジョンを活かすには～実態調査を通じて課題と対応策を検討する～	54-58
216	古寺久仁子 鈴木あおい	2018	ソーシャルワーカーによるコンサルテーションに関する事例研究ー研修という名前で行うコンサルテーションー	59-66
217	榊原次郎	2018	回復期リハビリテーション病棟におけるソーシャルハイリスクのある患者特性分析と患者支援	67-73
218	御牧由子	2018	コンサルテーションがもたらす成果と限界について	74-76
2019年度実践報告会報告書				
219	鈴木麻紀	2019	SVとCONがもたらす効果	1-2
220	米澤直美	2019	地域包括ケアシステムの構築に求められるコンサルテーション	3-5
221	佐藤裕子	2019	音楽療法スーパービジョンについてのー考察～音楽療法士の職業的アイデンティティを高めるためにSV/CONはどのように活用されるか～	6-8
222	石川陽子	2019	スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果	9-10



223	飯田涼子	2019	グループ内病院におけるソーシャルワーカー・トレーニング・プログラムの構築	11-14
224	山下尚郎	2019	スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果～SDG達成のためにピアで探究する新しい働き方に焦点をあてて～	15-17
225	池田紀子	2019	判断と決定に関する概念整理—学校現場における児童虐待の早期対応の検討に向けて—	18-20
226	寺井薫	2019	一般の保育所での重度重複障害児の保育方法について～保育者の準備の必要性に注目して～	21-23
227	櫻井唯乃	2019	高齢者福祉領域における「音楽療法」の再考察～音楽療法士としての実践経験から考える～	24-26
228	古寺久仁子	2019	ソーシャルワーカーが行うコンサルテーション実践に関する調査	27-30
229	御牧由子	2019	コンサルテーション・スーパービジョン指導者養成—「スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果」	31-33
230	古旗真幸	2019	精神障害者を主な支援対象としたヘルパーステーションにおけるスーパービジョン体制の構築	34-37
231	西條久美子	2019	SVTPを実習指導にいかす～音楽療法実習における一考察～	38-39
232	橋村季嗣子	2019	小規模化・地域分散化する児童養護施設に於けるスーパービジョンやコンサルテーションについての一考察	40-42
233	赤松基美	2019	スーパービジョンがもたらす効果	43-45
234	松尾香織	2019	音楽療法スーパービジョンに関する一考察～実習指導を振り返って～	46-53
235	榊原次郎	2019	クリニックにおけるソーシャルワーク機能の類型化と諸課題（中間報告）	54-56
2020年度実践報告会報告書				
236	鈴木麻紀	2020	CONTPを受けて	16
237	米澤直美	2020	スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果	17-19
238	佐藤裕子	2020	コンサルテーションを受ける準備～2020年度コンサルテーションプログラムを受講して～	20-21
239	石川陽子	2020	コンサルテーショントレーニングプログラムを受けて	22-23
240	飯田涼子	2020	2020年度コンサルテーション・トレーニングプログラムを振り返って	24-25
241	古旗真幸	2020	危機・クライシスにおける対人サービス組織のスーパービジョン体制の有効性	26-27
242	赤松基美	2020	スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果	28-30
243	中越陽子	2020	2020年度 SVTPを振り返る	31-32
244	西條久美子	2020	音楽療法臨床現場におけるSVIについての一考察～SVTPを学んで～	33-35
245	松尾香織	2020	音楽療法実習指導におけるスーパービジョン意識化の試み	36-39
246	古寺久仁子	2020	スーパービジョン・トレーニング・プログラムを受講して～ベテランである部下の意欲的な学びに向けて～	40-42
247	井上智香子	2020	「職業的社会化」の視点がもたらす専門家育成プロセスの検討—放課後等デイサービスにおける児童発達支援実践を通じて—	43-45
248		2020	スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果～自分の行った実践から、専門職の行うスーパービジョンについて振り返る	46-48
249	辻本鈴代	2020	職能団体におけるスーパービジョンについての一考察～ソーシャルワークの視点から～	49-50
250	池田紀子	2020	児童虐待対応の判断と行動を決定する閾値thresholdに関する考察	51-53
251	寺井薫	2020	一般保育施設での重度重複障害児に対する保育士支援について障害特性に応じる保育方法の的確な基礎的知識及び姿勢	54
252	岡江晃児	2020	住民に対する終活プログラムの意義について～マクロソーシャルワークの展開～	55-58
2021年度実践報告会報告書				
253	飯田涼子	2021	コンサルテーションの効果について	14-15

254	古旗真幸	2021	精神保健福祉分野の支援における問題解決思考に陥りやすい現状	16-18
255	辻本鈴代	2021	2021年度コンサルテーションプログラムを受講して	19-20
256	西條久美子	2021	2021年度コンサルテーションプログラムに参加して、この一年で積み上げたもの	21-22
257	佐藤裕子	2021	コンサルテーションプログラムを受講して～積み上げたもの～	23-24
258	米澤直美	2021	コンサルテーショントレーニングプログラムにおいて積み上げてきたもの	25-27
259	赤松基美	2021	2021年度CONTTPで積み上げたもの	28-30
260	志賀あゆみ	2021	スーパービジョンとコンサルテーションの違いについての学びとコンサルテーションの効果について	31-32
261	石川陽子	2021	コンサルテーション研究で積み上げてきたもの	33-34
262	古寺久仁子	2021	スーパービジョン・トレーニング・プログラムを受講して～スーパーバイザーの組織に働きかける力～	35-36
263	井上智香子	2021	SVとCONがもたらす効果	38-40
264	中越陽子	2021	部署責任者の管理業務を管理的スーパービジョンの12の職務で振り返る	41-48
265	土山緑	2021	「業務行動プログラミング」を用いたグループスーパービジョンの効果	49-52
266	池田紀子	2021	児童虐待通告と支援介入決定の閾値との関連について	53-55
267	寺井薫	2021	統合保育がもたらす一般の児童と障害を持つ児童への効果＝一般の児童と障害を持つ児童のかかわりから＝	56-60
268	岡江晃児	2021	終活出前講座における“死の人称”を意識した住民へのアプローチ	61-63
269		2021	スーパービジョンとコンサルテーションがもたらす効果～アルコール依存症の実践事例から、利用者への専門職の関わりについて振り返る～	64-65
270	横井義広	2021	母子生活支援施設におけるスーパービジョン・コンサルテーション体制の整備についての考察	66-68

注) 報告書がない年度については頁は「一」で表記してあります。

## 執筆者プロフィール

### ●福山和女 巻頭言・第1章

---

ルーテル学院大学 名誉教授  
ルーテル学院大学 大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センター 顧問  
ルーテル学院大学 大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センター 前センター長  
[専門分野] 医療福祉、ソーシャルワーク・スーパービジョン、家族療法

### ●白井幸子 第2章

---

ルーテル学院大学 名誉教授  
ルーテル学院大学 大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センター 顧問  
ルーテル学院大学 大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センター 前副センター長  
[専門分野] 交流分析、臨床牧会カウンセリング、臨床死生学

### ●加藤純 第3章

---

ルーテル学院大学 教授  
ルーテル学院大学 大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センター 講師  
[専門分野] 児童臨床心理、児童家庭福祉

### ●山口麻衣 第4章・終章

---

ルーテル学院大学 教授  
ルーテル学院大学 大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センター センター長  
[専門分野] 高齢者福祉、社会老年学、ケアラー支援研究、社会福祉実践調査

### ●照井秀子 第5章

---

ルーテル学院大学 大学院附属包括的臨床コンサルテーション・センター 前事務局長

ルーテル学院大学大学院附属

包括的臨床コンサルテーション・センター叢書

「対人援助実践を紐解く：スーパービジョン体制からの理解」

発行日 2023 年 10 月 1 日

編者 ルーテル学院大学大学院附属

包括的臨床コンサルテーション・センター

発行所 ルーテル学院大学大学院附属

包括的臨床コンサルテーション・センター

〒181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20

Mail : houkatsu@luther.ac.jp